西南学院大学　国際文化論集　第三十六巻　第二号　一九一－三九五頁　二〇二二年三月

天保九（一八三八）年　幕府巡見使への対馬藩対応（二）

―宗家文書『巡検上使記録　御勘定奉行所』―

森　弘子
宮崎　克則

前号『国際文化論集』第三十六巻第一号の続き。

凡例

- 旧字は常用漢字にした。但し、固有名詞は残した。
- 「ゟ」は「ヨリ」、「ホ」は「等」、「而」は「て」、「江」は「え」とした。
- 変体仮名は平仮名に改めた。
- 欠字・平出は省略した。
- 伺いに対する返答として「付紙」があり、「付紙」が頭注に記されてる場合は＜頭注＞と記した。
- 判読できなかった文字は□とした。
- 読点「、」、並列点「・」は筆者による。
- 傍注の（　）は筆者による注。

御乗船御船頭

黒米

相当之階級

口上手控

今般、御巡検使就御廻郷、仁位村ヨリ樽之浜御渡之節、御乗船御船頭、且下知役人兼勤仕候様、山口又左衛門え被仰付置奉畏罷在候、然処大小姓勤之儀故、既宝暦年御記録面ニも上下三人ニて相勤申居候処、当節は、上下而已を以相勤申候様と之儀ニ御座候得共、折角難有格並宜被為召置候我々ニて、先規も有之、殊更両勤相兼、其上壱州ニ被差越置候御徒士、御船頭之銘々は、上下参人ツ、ニて罷渡申居、就ては第一御巡検使御見聞も有之候事故、大小格分ニ取、宥々御徒士御船頭より下人相減、下村御宛行御徒士同様、黒米壱俵と八升御渡相成候次第、如何之訳合ニ御座候間、此際彼是多端申上候も恐多奉存候、依之事情宜被為下分格別之御出方筋ニも無御座儀故、何卒宜御賢察之上、表同様ニ相準、相当之階級相立候様可然御差図、御沙汰之程千万奉願上候、是等之趣、御序之刻何分宜被仰上被下、願之通被仰付被成下候様、御執成偏ニ以奉願候、以上

閏四月十五日　　大小姓　御船頭中

西村仁左衛門

御与頭衆中様

御付紙

其筋及吟味候処、勤向ニ依上下差別有之と相見候得共、下知人をも相兼候様被仰付候事故、外

役釣合を以、上下弐人御渡物弐俵之渡方御改被下候間、可被申渡候

閏四月十二日　　杉村右馬助
古川将監

田嶋所左衛門殿
吉村儀右衛門殿　　可被其意候
藤正左衛門殿
箕原九八郎殿

中馬六疋

此節御立込之中馬六疋、寛政年之通御入用無之段被仰出奉畏候、早速御売払之儀申上候心得ニ御座候処、当時御立馬数も少く、其上病馬弐疋有之、御着岸当日は数疋之出馬ニ候処、御馬不足仕居、加之非常御備等紙末之通、御馬数ニて全御備相立不申、此所如何可被仰付候哉、乍去斯ル御時勢ニ付、非常御備等御構無之節は、右中馬六疋之内、参引丈御引残不被仰付候ては、是又紙末之通御馬差支候間、右両段を以何れ共可然御差図被仰出被成下候様奉伺上候、以上

閏四月　　御馬方

御馬方

一、御馬　弐疋　　御召、御召替用
一、同　　弐疋　　御供之騎馬用

上馬

中馬

一、同　壱疋　火元見馬

右御出馬之御備

一、同　三疋　上使乗馬

一、同　壱疋　上使御家中衆乗馬

一、同　壱疋　御年寄中

一、同　弐疋　御使者用

一、同　弐疋　御用達中

〆　十四疋

内七疋　上馬

右之内弐疋病馬引之

残て　五疋　上馬

六疋　中馬

〆　十壱疋

残て　参疋不足

右非常之節出馬如此

一、御馬　壱疋　杉村右馬助

一、同　壱疋　多田菜男

一、同　壱疋　吉田大蔵
一、同　弐疋　御使者両人
一、同　弐疋　御用達両人
〆　七疋
内上馬　五疋
残て　弐疋不足
右弐疋不足之分、中馬三疋御引残可被仰付哉
右上使御着岸出馬数、如此
以上

中馬六疋
借馬

御付紙
中馬六疋之内、三疋御引残、三疋は御売払被仰付候間、非常等之節ハ借馬ニて御用欠ニ不至様
可被相心得候、以上
閏四月十七日　杉村右馬助
古川将監
島居正左衛門殿
吉村儀右衛門殿　可被得其意候
藤正左衛門殿

御宿番人

田井直左衛門

右は御巡検使使御宿番人被仰付置候処、病気依願被差免候

福嶋大作

右は御巡検使御宿番人、田井直左衛門為代被仰付候、以上

閏四月十九日　　御勘定奉行所樋口亘理

御発駕

巡検使、明廿三日辰之上刻、御発駕被成と之御事候間、被得其意、諸事兼て申渡置候通可被致手当候、以上

閏四月廿二日　　杉村右馬助

古川将監

田嶋所左衛門殿

大目付中

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

打廻頭中

夜廻休息所

行燈

火鉢

御用達中

船改頭役・佐役中

早田安賀之介殿

以手紙令啓上候、御巡検使御在留中、御徒士目付夜廻之節、休息所山口屋敷御作事方詰所被仰付候、就夫御巡検使御着之当日より御出船之前夜迄、紙末之通御渡可被下候、此段専可申述、如此御座候、以上

閏四月十六日　　御勘定奉行所吉田大蔵

一、夫之者　壱人

但、定番之者繕勤ニ相成候ても宜

一、行燈　壱軒

但、有明ニして

一、火鉢　壱ツ

但、火入炭定法之通

以上

組之者弐人

右は中村太芸居宅え不寝番申付候条、夫之者其外入用之諸品、諸事先格之通可被致差図候、以上

閏四月廿一日　　御勘定奉行所田嶋所左衛門

御山駕篭

御巡検使御三方様、用意相成居候御山駕篭、田舎御巡検中御借用可被成と之御事候条、可被得其意候、依之為用心御三方様御中ニ御替駕篭壱挺差下候様可被取計候、以上

閏四月廿二日　　古川将監

吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
高崎翼殿
御用達中
早田安賀之介殿

唐津船手

以手紙申達候、肥前唐津船手之衆、揚陸として夜行も有之哉ニ相聞、如何成御手入可相成も難量候付、夜分通行在之候者、町切番所ニて通行不相成段相断、若病用等無余儀節ハ手数を軽各被承届、通行方差図可有之候、尤夜行不相成段は、船改所彼方御役向ニ及掛合置候、都て旅人

夜行

は、右之心得可被申付置候、此段為可申達如此ニ候、以上

閏四月廿五日　　御勘定奉行所古川将監

仁位格兵衛殿

口上手控

久田村仮御番所

我々儀、久田村仮御番所勤被仰付置奉畏相勤罷在候、然処御巡検使御乗船一行繫船ニ相成、船手之諸用何事ニ不依御番所差図を請候振合ニ御座候間、事品ニ依都合能差配を以罷在候、就夫此程肥前守様御船奉行より為御挨拶被相付候役人衆揚陸、御番所え被罷上応対仕候、折悪、風雨烈敷御番所雨打込、其人衣類濡、当座之体気毒入候儀ニ御座候、其次第は素り余事共ニ昨日奉添御聞候処、書付を以申上候様被仰達奉畏、ケ条を以申上候間、宜御聞通被成下候様奉希候、右ニ申上候御番所え被罷在、応対之都合、此程之暴風は稀成儀、又は右様之振合ニて有之間敷奉存候得共、暴風之節、別て諸用相達可申儀ニ奉存候間、御番所畳敷之場所え格別之打雨不致様、御手筋え被仰達被成下度奉存候

暴風之節

一、御番所之儀、此前は屏風ニて後手御囲ニ相成候様相見申候処、此節は御品御有合無之段其筋より申聞候、船手之上下無間断揚陸都度ニ、御番所え相断候事故、仮成ニ見掛宜相成候て如何可在御座候哉、他国之人応対之節、御番所之体勢ニ依り、其振合も可有之奉存候間、古幕ニて御囲之場所先格之通、何分屏風囲ニ被仰付度奉存候、尤此程逐一申上置候儀、急場不

他国之人応対

船手飯米

仕候付、猶奉添御聞候

一、船手飯米突として水主共揚陸仕、突場船宿等之儀及尋向候付、村役人え申達、都合能仕候処、数艘之儀ニて雨晴ニ不拘様子ニ御座候間、当村下知役へ及談候処、雨天之節、米突仕候儀何共当惑之由、付ては其筋え下知役より相伺候様相達置申候、余事ニ違、食料之儀ニて難聞捨奉存候間、雨天之節、米突之儀船手より相伺候節、如何相心得可申候哉、可然御差図可被成下候

筆墨紙

一、御番所用共、筆墨紙其外諸品入用、其筋より仮差紙を以見計相受取候処、品ニより其筋より異儀申聞、乍恐御時勢柄奉咸服、決て御費筋無之様談合も罷在候間、其段は可然御聞通被成下、御手筋往復仕候節は、無滞御用便之道御差図置可被成下候

右之趣、宜御聞通被成下、可然御差図被仰出被成下候様被仰上被下候様奉希候、以上

閏四月廿六日　　久田村仮御番所
御番人中
串崎益之助

御付紙

条々見届候、何れも不都合無之様其筋可申談候、此旨可被申渡候、已上

閏四月廿六日　　古川将監

田嶋所左衛門殿
吉村儀右衛門殿　可被得其意候
藤正左衛門殿
御郡奉行所

町年行司　米壱俵半ツ、
町年行司　（前川松兵衛　遠藤忠蔵）
同壱俵ツ、
（町奉行所書手　町肝煎）
書手

右之通、御巡検使御用向相勤候付、近例之通御渡被下候、尤書手之儀壱人ニて別て骨折候付、別段半俵被下候、右之通可被相達候、以上

閏四月廿七日　古川将監

仁位格兵衛殿
御勘定奉行所　可被得其意候

松平肥前守様
病死
葬手形

松平肥前守様御船乗組之者両人、今朝令病死、御巡検使御召船之儀故、早々陸え為揚度段、彼方御船奉行より被申聞、先久田村延命寺え為揚置候様申越候旨被申出、承届候、右死骸取置方別て彼方望之筋も無之候は、延命寺え葬候て、住持より葬手形、彼方役人え相渡候様可被取計候、以上

閏四月廿八日　　年寄中

田嶋所左衛門殿　右之趣延命寺え被申渡、久田村仮番所詰之面々えも可被相達候
船改頭役・佐役中
吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿　可被得其意候
御郡奉行所
箕原九八郎殿

旅人
火入炭

以手紙令啓上候、砥石淵、町切え旅人為御締、下目付壱人昨廿八日ヨリ被相付候、就夫夫之者壱人、火入炭等御渡ニ相成候様、其筋え御差図可被下候、殊ニ依候ハヽ、夜詰いたし候様被仰付置候付、油之儀も御渡ニ相成候様、何れも御差図被下度希存候、此段御釣合為可申述、如此御座候、以上

閏四月廿九日　　大目付中

御勘定奉行所

大久保勘三郎様
香丹子

以手紙申達候、大久保勘三郎様より香丹子御調被成度御注文在之候旨、御宿亭主より申出候段、御用達より申聞候、上品之御在合候ハヽ、御宿亭主え可被相渡候、若在合無之候は市中吟味可被買上候、為其如此御座候、以上

閏四月廿九日　古川将監

吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿

明日御帰府

御巡検使御三方様、段々無御滞御通駕、今晩仁位村御止宿、明日御帰府之御日積候間、被得其意、相関候筋々、先規之通諸事無滞様可被取計候、以上

五月朔日　古川将監

田嶋所左衛門殿
大目付中
仁位格兵衛殿
御勘定奉行所
御郡奉行所
箕原九八郎殿
幾度小四郎殿
船改頭役・佐役中

壱州勝本

香丹子

御帰府

両殿様

梅野治平治

右は御巡検使漕船下知として、壱州勝本迄可被越候様被仰付置候処、病気依願被差免候

仁位右兵衛

右は梅野治平治為代、御巡検使御帰帆之節、壱州勝本迄之漕船下知被仰付候、以上

五月朔日　　御勘定奉行所多田采男

角入香丹子弐ツ　　御役人様用

右御内話之品ニ依、御用達より御内々差出候分、御遣出被下候、可被得其意候、以上

五月二日　　支配方

御勘定奉行所

御巡検使、今日無御障御帰府被成候付、明日ヨリ御順待之事候間、御出帆当日都て御着船御手数之通被相心得、諸事先格之通無御滞様、都合能可被取計候

一、御出帆当朝、両殿様より御使者被差出、御着船之通ニ候事

一、各中御用掛壱人、御着船之通御旅宿え罷出、引取掛直ニ波戸え罷出居、御見送申上候事

右之通可被得其意候

五月二日　　杉村右馬助

古川将監

御出帆
御祝詞
詰間
若殿様

田嶋所左衛門殿
大目付中
仁位格兵衛殿
吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
高崎翼殿
箕原九八郎殿
御用達中
早田安賀之介殿
船改頭役・佐役中

御巡検使御出帆之上、御祝詞として、年寄中并式日出仕之諸役中、御馬役、御用達、人馬役、且御用掛之小役人、其外御巡検使ニ被召仕候役々、何れも裏え上下着出仕之事

一、殿様御留守中ニ付、詰間へ御用人呼出、御巡検使無御滞相済候御祝詞申上候事

一、若殿様え為御祝詞、年寄中并諸役中、中御形え罷上候事

一、諸役中、御馬役、御用達、人馬役一同詰間へ罷出、御祝詞被申聞候事

一、右之外、御巡検使ニ被召仕候役々不残、御馬廻は扇之間縁類南之方、大小姓扇之間縁類東

扇之間

雲之間

町六拾人

式日出仕

八郷奉役

之方、御徒士は雲之間縁類東之方列座、年寄中扇之間ニ出座、面謁、御用掛之与頭ヨリ取合候事

一、右相済て御勘定所買物番、諸組小頭、雲之間下段溜之檜縁ニ並居、御用掛之年寄中立寄、苦労之段及会釈候事

一、辻堅、漕船奉行は、先規面謁不致、寛政年ニは与頭ヨリ会釈も無之相見候へ共、いつれも苦労之段、与頭方おいて相応可被及会釈候事

一、御巡検使御用相勤候町六拾人、雲之間縁類ニ列座、御用掛之年寄中面謁、町奉行より取合候事

一、年寄中御詰間、御吸物、御酒被成下、先格ニ候得共、御至倹中ニ付無其儀、御口祝被成下候事

一、式日出仕之諸役人中、御馬廻、御用達、人馬役迄同断之事

一、八郷奉役之儀、為御祝詞罷登候、御家中同日致面謁、御祝等被成下、先格ニ候得共、当時之勢専要之時節ニ付、上府之儀御免被成、追て罷登次第可致面謁候事

但、御至倹中ニ付、御祝は不被成下候事

一、御見送御使者相勤候御用達は、追て帰着之上、致面謁候事

右之通、関之筋々得其意、夫々可被相達候、以上

五月朔日　　古川将監

田嶋所左衛門殿
御用人中
若殿様　御用人中
大目付中
仁位格兵衛殿
吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
御郡奉行所
高崎翼殿

御上船

御巡検使、兼て御上船御乗組之御手数無之、御順風当日御乗出し、御乗組之御治定ニ付、関之筋々可被得其意候、以上

五月二日　　杉村右馬助
古川将監

田嶋所左衛門殿
大目付中
仁位格兵衛殿

御勘定奉行所
御郡奉行所
箕原九八郎殿
御用達中
早田安賀之介
船改頭役・佐役中

閏四月六日

御巡検使、府内御在留中は、御城え相詰、御屋敷えは式日外出仕無之候、御用掛、外之諸役も御城え罷出候様、可被相達候

右之御書付、与頭ヨリ写取候事

御駕籠夫

上使御三方様御駕籠夫、御具足箱持夫、御鑓持手代り、御茶行厨持夫、御一方様十五人余、御目印看板法非被成御渡、夫之者着用為仕候処、長途嶮岨ニ付片濡、風雨之節は合羽着致居候へ共、此節之風雨は夥敷儀ニて、中々以、合羽体ニて可相凌ニ無之、尤御宿亭主よりも頼談ニ及候訳も無之、今朝より御順待之事故、早速組中え申付、夫々片抜洗張為仕申候、尤、追々御出ニ付、数合は追て御勘定奉行所え可申遣候付、見合賃銭可被成下候様、其筋え御差図置可被成

合羽

洗張

下候、以上

五月　　早田安賀之介

右、将監殿ヨリ正左衛門え被成御渡候、五月四日

覚

御徒士目付
内野半左衛門
下目付御雇
御巡検使田舎御附廻　　杢治
三月廿三日下村、一昨二日上府　杢右衛門
田舎御附廻御年寄中附　　同
三月廿二日下村、一昨二日上府　市右衛門
同
田舎売物方へ被相附　　壱兵衛
三月七日下村、一昨二日上府　源作
喜兵衛

右之通、御巡検使ニ付、田舎え被差下置候処、令上府候間、左様御承知在之度存候、以上

五月四日　　御勘定奉行所吉田大蔵

七日御上船

雨戸

不心得

人馬役

早田安賀之介

右は乾一郎兵衛病気ニ付、御用達助勤被仰付候、以上

五月五日　　御勘定奉行所田嶋所左衛門

御巡検使ニも、七日御上船ニ相成候付、両浜近辺不行作之儀無之様可被相達置、第一、見通之場所と申、諸番所も有之候得は、万一不行作之儀在之候時は、忽御固之御締方相拘、不相済次第勿論、扨又久田道之義は猶更、其外高ミ住居之向は相達候迄も無之候得は、御滞船中は雨戸をもゝ置、諸事不行作無之様厳重可被相達置、且、役々并組中下目付ニ至被相達、不心得之向は、不閣申出候様可被及差図候

右之通被仰出候間、可被其意候

五月五日

鳥目三百文ツ、　　御駕籠小頭

同弐百文ツ、　　参人

御駕籠舁夫

三十人

強雨

右は、御巡検使府内御発駕後、次第ニ強雨ニ相成、御通行道筋殊外悪罷成、其筋々ニも令差配、苦等敷入候得共、俄之事ニて中々行届候儀ニ無之段、無御別条当宿御宿ニ至候、偏右之者共精力ニ出候儀と相聞、尤之者共ニ付、褒美として右之通相与候、此旨可被申付候、以上

閏四月廿三日　杉村右馬助

高崎翼殿

早田安賀之介殿　可被得其意候

賄方

褒美

深山村

深山村ニて御達し　豆酘郷人夫

鳥目百五拾文　五拾人

長持夫

右は御長持夫として召仕候処、いつれも格別令出精、既ニ大久保様御役人衆ヨリ右之者共日々引切召仕呉候様、馬指を以頼談有之、御長持之儀は外駄荷と違長途一入ニ苦労候事と相聞、畢竟衆抽候心得方尤之至、右ニ付手筋より申出之品も有之候付、褒美として右之通相与候、此旨可被申付候、以上

褒美

閏四月廿五日　杉村右馬助

高崎翼殿

早田安賀之介殿　可被得其意候

賄方

記録

今般、巡検上使御下向ニ付、諸役所相預候御用筋、記録出来、先例差出之有無ニ不拘出、記録早々可被差出候、尤取調方、其一事役所々々ニて不引合も有之候てハ、却て後弊不及事故、取引之現実預之筋々入念、所々行違無之様、瑣細ニ取調差出候様、役中ニ可被相達候、以上

五月十五日　　杉村右馬助
古川将監

田嶋所左衛門殿
大目付中

記録

御関所在番えも記録差出候様、可被相達候

仁位格兵衛殿
吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
高崎翼殿

記録

作事方えも記録差出候様、可被相達候

箕原九八郎殿
嶋居正左衛門殿
御用達中
早田安賀之介殿
船改頭役・佐役中

勝本へ被召仕候御船頭、但仁位渡共何れも記録差出候様可被相達候

対面
肴二三種

口上手控

私儀、船御改所頭役在勤中、御巡検使附両御船奉行より致対面度由ニ付、船附宿於亀屋半蔵宅対面仕、其場所之振合ニて肴二三種為致用意差出候間、右之入料払切ニ被仰付被下候様奉願候、此段御序之刻可然被仰上被下候様奉願候、以上

五月十七日　梅野忠兵衛

御与頭中様

御付紙

見届候、願出之入料払切ニ被仰付候、此旨可被相達候、以上

五月十七日　杉村右馬助
古川将監

与頭衆中

仁位格兵衛殿

吉村儀右衛門殿　可被得其意候

藤正左衛門殿

用心物薬

上使御巡検之節、大人夫之召仕ニ付、用心物薬物紙末之通持下方申上、則御渡ニ相成居候内少つ、取遣、相残候分御勘定奉行所え相納申候間、取遣之分払切ニ相成候、御手筋え御差図被成下度奉存候、此段為可申上如此御座候、以上

五月　　御郡奉行所

古川将監様

杉村右馬助様

人参

一、人参　弐袋　　一、清心丸　六丸

万能膏

一、万能膏　六貝　　一、百腸丸　拾弐袋

内壱貝取遣、残五貝　　内参袋被遣、残九袋

以上

薬物

御付紙

見届候、薬物取遣之分、払切被仰付候、以上

六月五日　　杉村右馬助

古川将監

高崎翼殿

吉村儀右衛門殿　　可被得其意候

藤正左衛門殿

拾四筋之縄代

紙蝋燭

白半紙

黒半紙

黒半切

御巡検使御廻村中、奉添御耳置候通、大山村ニて拾参人、佐賀村ニて壱人、合拾四人縄下ニ取計申候付、右拾四筋之縄代、御定式之通相渡候様御差図之事

五月廿九日　　御郡奉行所

右馬助殿ヨリ島右衛門被成御渡

人馬方紙蝋燭払帳差出候処、寛政年と引比見候処、格外入増ニ付、紙類ニハ弐参束ツ、増、蝋燭ニは弐参割増被仰付度段申上、尚払方之差引紙末之通在之

一、白半紙　壱〆七束　此節払帳高
　内　七束八帖　寛政年払帳前
　残　九束弐帖此節入増之分

一、黒半紙　壱〆八束　此節払帳高
　内　五束五帖　寛政年払帳前
　残　壱〆弐束五帖　此節入増之分

一、黒半切　千七百枚　此節払帳前
　内　四百八拾枚　此節払帳前
　残　千弐百弐拾枚　此節入増之分

一、蝋燭九百九拾壱挺　此節払帳前

箱挑灯

内　弐百挺　寛政年払帳前
同　参拾九挺　御着之夜、終夜ニ相成燈台燈之
同　百四拾丁　右同断ニ付、高帳六張り、箱挑灯九張、小田原挑灯参張、〆十八張灯也
同　参拾五丁　大山村ニて弐番様御荷物之内、不足之品在之、吟味ニ付取遣之分
此三口　臨時之儀ニ付引之
残　五百七拾七挺　此節入増之分
右之通申上置候処、御付紙を以、左之通御達被成候

御付紙
人馬方諸色払方之儀ニ付、申出之趣は尤と相見候得共、畢竟時勢之転変、且は役中心得方之厚薄ニ依、増減も可在之、最早現世取遣居候事と相聞候付、当節は全払切ニ可被取計候
六月廿五日

御船付宿亭主入目銀

一番御船付宿亭主土田卯兵衛より、時宜ニヨリ御船奉行え難差出候入目銀之内、持札銀金弐歩被差出候分相受取、右入料売物方ヨリ相調候諸品代之内ニ、右弐歩相払候銭九銭参拾九匁壱分八厘払切被仰付被下候様、且又二番御船付御宿亭主前川護兵衛、礼銀壱歩弐朱有之候内、雑費有之候分引之、残九銭拾四匁壱分如何可被仰付哉之段、年行司ヨリ申出候書面

賄入料

馬医

薬種代

丸散

御付紙

見届候、卯兵衛心得方不行届所ヨリ、纔なから御出方ニ相成、右等之筋、御払切置被下候ては多少ニ不依、後例ニ相成候儀ニ付、御取揚難被下訳筋ニ相見候得共、現在自分ヨリ相弁、御算用ニ不差支様ニ取計罷在候と相見候付、当節は別段之訳を以、右九銭参拾九匁壱分八厘之分払切ニ被仰付候、尤右を以後例と不相成所、聢と相心得可被置候

一、護兵衛取賄入料、残之分は護兵衛ニ入用被仰付候

右之通、夫々可被相達候

六月廿五日　　杉村右馬助

古川将監

仁位格兵衛殿

吉村儀兵衛殿　　可被得其意候

藤正左衛門殿

馬医志田左右作より願出は、御巡検使御廻村之節、御牽馬、且中馬被差下候付、病馬用として御附廻被仰付、持下之薬種代御渡被下候付、薬店ヨリ薬味相調、丸散等取調罷在候処、此節御牽馬、中馬共御入用無之候、夫ニ付右丸散之儀、上え御入用無之品ニ御座候得共、右ニ付上納仕候様、被仰付被下候用様願出

御付紙

見届候、薬種代御渡被下置候銀四拾九匁八分之分、此節払切被仰付候、調合之丸散、御馬方え相受込置、病馬之節相用候様可被取計候、以上

六月廿五日　　杉村右馬助
　　古川将監

島居正左衛門殿
吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿

薪・燔草

口上手扣

此節、御上使御乗船之久田村繋船中入用之薪、燔草(ママ)所望被致候節、売渡被下様御備ニ相成候諸品残候分、先例之通伐出候村々入札仕候様、被仰付奉畏候、然処右両品之内、燔草之儀は千五百抱之御用意ニ御座候処、行足不申、追々為取出売渡候程之儀ニ付、残候分無御座候、薪之分、則別紙帳面指上候通六拾三疋余、御船江内え建込之侭相残居申候、右残薪伐出候村々より入札を以奉願候も、御手入筋ニも御座候付、右六拾参疋五合、居村え御売渡被成度奉存候、元来右薪伐出候節も入札ニ被仰付、居村ヨリ之入札、薪壱疋ニ付銀七匁ニして入札差出申候処、落札ニ相成、其直段を以村々ヨリ伐出居村え漕回し、御船江え建込居候事ニ御座候得共、御船々え

代銀

久田村下知役

御売渡被下候節、帳面取調差上候通、殊外欠ニも相成候様之儀、其上村方え差廻候人夫費候事ニ御座候へ共、近比如何敷奉願事ニ御座候得とも、右薪壱疋ニ付代銀六匁参分つゝニして、居村え御売渡被成下候ハヽ、早速夫々取形付難有可奉存候、代銀之儀は、如何共御差図次第可奉畏候、右之趣宜敷御聞通被成下、奉願候通被仰付被成下候様、御執成之程偏以奉願上候、以上

六月五日　　久田村下知役
　　長九郎

御郡奉行所

御付紙

見届候、願出之薪六拾参疋五合之分、代銀六匁三分つゝニして、久田村中え御売渡被下候間、夫々可被相達候、以上

六月廿五日　　杉村右馬助
　　古川将監

高崎翼殿
吉村儀右衛門殿　　可被得其意候
藤正左衛門殿

町奉行

人夫遣

郷夫四拾人

賃銭

町用銀

差人賃銀

町奉行仁位格兵衛より口上手扣を以申出候は、窮民差引役平山平七より別紙之通願出申候、委細は上御存知被遊候御儀御座候得は、九十ニ申上候迄も無御座候得共、御巡検使御着発、田舎御往還、四度同様之人夫遣ニ御座候処、御勘定所ニは御着一日計六十人之賃銀可相渡段、申聞候由、甚喰違之事ニ御座候、既ニ御着当日ニは人夫不足ニ相見、御用滞之程止無ニ奉存、郷夫四拾人差出方奉入御聞候処、御郡奉行致役談候様と之御事ニ付、及役談候処、人繰決て不相成事ニ候得共、郡町外ニ出夫無之事ニ候得は、四十人夫上府方相達可申、御着当日と申候ては、間ニ合不申事ニ付、直ニ明日罷登候様可及差図、御宿迄一日弐匁ツヽ之賃銭相渡候様及役談、則御郡ヨリ之紙面差上置候事ニ御座候、尤段々減数仕押詰郷夫共七人ニ相成申候、御着一日之御用ニ十日余も賃銭相渡候事ニ御座候、委細ハ差引役ヨリ先日帳面差上候通ニ御座候、然を万一上ヨリ御渡不被成下様御座候ては、町用銀は至て少く、殆当惑千万之仕合ニ御座候、右申上候通之事情、宜敷被為聞召分、壱日六拾人夫四度之所、且郷夫十日余之賃銀御渡方御差図被成下候ハヽ、其余賃増賃銀之処は町用銀ヨリ相払候様可仕、何分不要御聞得被下、宜敷被仰出被下候様、偏ニ奉頼候と之書面

御付紙

見届、差人賃銀之儀は、御着船、御発船、田舎御往還、都合四日六拾人ツヽ、外ニ廿七人、五日分、当節御渡被下候、其段賃銀之儀は最前相達置候通可被相心得候、尤差人之儀は、町請前

之事ニて御取揚も難被下候得共、現在召仕候上之訳ニ付、当節は右之通御渡被下候得共、又候之度ニは決て御取用不被下候条、其心得罷在候様、厳重相達可被置候、以上

七月十二日　　杉村右馬助
　　古川将監

仁位格兵衛殿
吉村儀右衛門殿　可被得其意候
藤正左衛門殿

薪・燔草

御巡検使御乗船より所望在之候節々、売渡用之薪百五拾疋、燔草千四百束、先例之通入札を為伐出候処、久田村落札ニ相成候付、夫々伐出相備置候処、燔草之儀は無残渡候処、薪之儀六拾参疋五合之残在之候分、同村下知役ヨリ願出之、品々ニヨリ壱疋銀六匁参分ツヽニして、御売渡被下候段被仰達候処、右両品最早伐出相備候節、入札前之代銀御渡相成居不申候付、御船々え売渡候直段、則落札直段を以、売渡候様被仰付置候得は、右両品売払候代銀、彼方え取立罷在候を、直ニ落札之者え相渡候様被仰付被下、右残薪六十参疋五合御売渡直段、壱疋ニ付銀七分つヽ入札直段違銀、紙末之通相見申候付、此節久田村落札之者え御渡被下度奉存候

入札直段

一、御船付之面々、為湯入揚陸有之節々、湯茶等之儀、此節は断ニ被及申請候様被仰達置、則申請候、銭六銭ニして弐拾目ニ相成候段申出候、寛政年ニは宿主え被成下候と相見申候、当

湯入

風呂屋

節如何可被仰付候哉、風呂屋御借上ニ付てハ、家内労疲在之儀ニ御座候得は、宿主え被成下候は難有可奉存候

右之趣、何れ共御差図被成下候様奉希候、此段為可申上、如此御座候、以上

八月十一日　　御郡奉行所

古川将監様

杉村右馬助様

一、銀四拾四匁四分五厘

但、残薪六拾参疋五合伐出、落札直段銀七匁ニ候を此節銀六匁参分充ニして御売渡被成下候付、壱疋ニ付銀七分充違銀、如是落札主え被成下候分

以上

薪売払

御付紙

承届候、薪売払違銀之分御渡被下候、御船付之人揚陸湯茶代、宿主え被下候、何も夫々可被取計候、以上

八月十七日　　年寄中

御郡奉行所

御勘定奉行所　　可被得其意候

遠見番所

御船附侍中平山喜兵衛、浦田一郎治より申出候は、去春巡検上使下向ニ付、遠見番所引切勤被仰付、夜分四ツ時迄充相詰、御入船之節夜入ニ相成、下番えも相渡候付、蝋燭四十八丁御渡被下候様ニと之書面ニ

御付紙を以左之通御達

見届候、挑灯・蝋燭等御貸渡被置候は、御着夜入之節相用候為ニ候、平日取遣候分御払切可被下訳ニ無之、仍て御入船夜入ニ付、一張ニ付八丁宛を以、都合拾六挺、此節御払切被下候、余は早々可令上納候、此旨可被相達候、以上

亥三月廿四日　　御勝手方支配

与頭衆中

御勘定奉行所　　可被得其意候

挑灯・蝋燭

（天保十年亥）

筆墨紙類

乾一郎兵衛より願出候は、去春御巡検使御下向ニ付御用達被仰付、為御迎勝本被召仕候処、筆墨紙類、紙末之通、御賄方より貸渡ニ相成候分、全取遣候付払切被仰付被下候様と之書面

一、白半紙　弐束

一、黒半紙　弐束

一、島銘筆　五本

一、上墨　壱丁

一、並差札　拾五枚
一、油紙　拾九枚
一、王ま　弐拾五尋

御付紙
見届候、筆墨紙賄方より貸渡之分、払切被仰付候、以上
亥四月廿八日　年寄中
与頭衆中
御勘定奉行所　可被得其意候

御宿御普請

払切

此御役所添書
巡検上使田舎御宿御普請見分之儀被仰渡置、就夫御作事方より申出之書面差上之、奉入御披見候、寛政元己酉年、巡検使御下向之節御止宿ニ相成候村々、家居仮成ニ御座候分、成丈は御先形不相扒様御止宿可相成段、勿論ニ御座候処、頃日も申上置候通、今程及大破又は解家ニ相成居候儀も可有之事故、少々之道法違之村方は手入無之、村方御止宿ニ相成被苦間敷候哉、其段御便利之道、郡奉行え御達被成置候由被仰渡、御普請奉行人は、此御役所ヨリ申談置候得と之御事ニ付、見分方之様子ニ依御手入無之様、品ニヨリ村違ニも治定仕候処、談達仕置可申候哉、

御入料減縮

郷大工

御一行御人数

百弐拾人程

尚又心得方聢と御達被下置度奉希候、追々申上置候通、巡検使ニ付候御取役方御手当方全不相立候所、何を以ケ様ニと心組候品更ニ無之候得共、御取役方は是非御取計無御座候て不相済儀ニ付、諸般御入料御減縮ニ至候所、精々心配有之候様、尚又御郡奉行え御懇達被下度、就夫己酉年御止宿御普請御入料、其比御時体郷方ニも寒心仕、御普請積前之内、半減或は割方を以自分ヨリ承り、又は悉皆自分より承居候向も在之、是等は御郡奉行所えは尚又委鋪書留可有之、此節は御勝手向弥御行詰之此場ニ付、其段此節郡奉行下村之上、当時別て之御逼迫御行支之次第、郷中感服仕候様書達ニ相成、一統気服仕候様、折合を付万端御為筋ニ心を寄、御入料減縮仕候様懇達有之、如何可有御座候哉、右之通己酉年之先形も在之候得は、可相届候得は、御普請御入料悉皆自分ニて出来、又は半数割方等を以自分聞ニ相心得候様、其余不相届向は少々たりとも、上之御手出ニ不相成様、郷割ニも相成候所、御郡奉行周旋方御懇達被下置候は、品ニ依一廉之御用便相成間敷儀ニも無之哉と奉存候、将又御普請之儀己酉ニは、御役々被差下、見分積前を以現取掛候節は、御役々より不被差下、郷方之手を以悉皆御普請成勝ニ相成候儀と相見、此節は先例之通、郷大工而已之手を以御普請可被仰付哉、猶見分御役々上府之上、積書等差出候上は、尚又奉入御披見、其節奉伺候様ニも可仕、宜敷御聞届被成下度奉希候

一、上使御一行御人数之儀、此御役所書留ニては凡百参人程と相見申候得共、此儀は御下御方御石高ニも依、御人数多少も可有之儀と奉存候得は、御下之御方相極候上、江戸表ニて御人数等御問合之上、委細可申来儀ニ付、夫迄諸般之積立凡百弐拾人程と見積、御下宿等ニも積立置ニて如何可在御座候哉

御宿割

一、御止宿之村々御宿割己酉年御作事方留書ニハ、御一方ニ付下宿共参軒充之手当ニ相成居候由、此御役所書留吟味仕候処、延享年ニは六軒ニて不足有之、御巡検使御家中より下宿一軒充増候様被申聞候付、御附廻御役々宿々当在之、宿明渡、都合九軒ニて相済候由相見申候、尤宝暦年・寛政年には、六軒ニて相済居候儀と相見申候得共、村方ニ依、家之繰合ニて大小も可有之儀ニ付、尚御郡奉行所書留吟味在之、差当所、寛政年御止宿之村々、家数等委細被申上候様被仰渡、家数之極御達被下置候は、御作事方えも其趣を以相達置候様仕度奉存候

間取絵図

一、御宿間取絵図、御作事方ヨリ差出候付差上之、奉入御披見候、凡先形間数御座候は、可宜儀と奉存候得共、是又御郡奉行所心得之品吟味被申上置候様、被仰渡被下度奉存候

出火焼失

一、御止宿村々之内、近年出火焼失仕、今以建揃不相成村方も可有之哉、御郡奉行所ニて吟味有之、左様之村方も候は、村違之儀、道法等相考被申上候様、御達被下度奉存候

御昼休場

一、御昼休場は、多分御設之茶屋ニて相済候共相見申候得共、鶏知村・佐須奈村、是又御昼休ニ付、家居相応之場所ニ御普請被仰付置候哉、御郡奉行所旧記吟味之上、御普請等有之場所々々は、此節見分被仰付置度儀ニ付、是又委細被申上候上、御達被下候は御作事方へ相達置候様可仕候

御普請

一、此節御役々被差下、御普請入用之木品は、其村所納ニ注文為差出置度、可然御聞届置可被成下候

一、御普請取掛候節は、前ニ申上候通、積前を以郷方手を以御普請可被仰付候哉、就夫大工小

頭一人、脇大工弐人連下度段、御作事方ヨリ申出居候得共、此儀は見分積立相済候上、尚又御伺可申上候

雪隠・湯殿

一、上使御宿ニ限り、雪隠・小用所・湯殿無之候て相済間敷、雪隠は多分可有来儀ニ付、格別見苦無之分は能々洗掃除為仕、小用所・湯殿は取設候様可被仰付候哉、就夫湯殿は、縁竹張ニて御済可被成哉、天上張之場所はひしやき竹ニして張立候様、如何可在御座候哉

畳表替

一、御宿々畳表替仕候分は、其侭家主え可被成下儀と奉存候、新規鋪入候分は、相当直段を立売立可申哉、尚又此儀御用相済候上、御伺申上候品も可在之、可然御聞届置被成下度奉存候

台所

一、田舎向台所は、総て板敷ニて相済居候儀ニ付、畳敷ニ可被仰付哉之段、御作事方より申出、然所木賃を以、御取賄被成候儀ニ付、家毎台所ニては炊仕候役々以下罷在候儀ニ付、先は板敷之侭ニて、相済候様可被仰付候哉

板敷

一、御下宿ニも同様之儀ニ付、在来板敷之場所は、其侭ニて相済候様可被仰付候哉

御刀掛

一、上使御宿用御刀掛等は、御賄方用意ニて差廻候仕来と相見申候得は、其趣相達置候様可仕候

両御関所

一、御宿門内、仮繋出来候様先規ニ相見、取設方積差出候様相達置可申候

一、両御関所之儀、御飾付も有之儀ニ付、損之場所見分被仰付置度奉存候、是又御郡奉行所書留吟味被申上候様、被仰付度奉存候

綱浦

一、綱浦御番所之儀、御巡検之節は、御目付一人被差下候儀と相見、然処寛政年比は同村下知

奥御目付
御浦目付

役より在番兼勤被仰付置候儀ニ付、御巡検ニ付勤方之御書付等御渡可被下哉之趣、御郡奉行所ヨリ被申上候所、御巡検之節は奥御目付一人在勤被仰付候積ニ付、不及其儀義と相見、此節も奥御目付在勤可被仰付候哉、御場所柄も違候得共、右之通下知役ヨリ兼勤被仰付置候、御場所之儀ニ付、別て御意味合無御座候ハヽ、此節は時節柄ニ依候てハ、御浦目付居込被仰付置候て、御主意宜敷御事共ニ御座候ハヽ、海漁方両様相兼候得は御出方も相減、双方御用便之義と奉存候、併訳も違候御役筋之儀ニ付、強て難申上候得共、係ル御時体ニ付少分ニても出方相減候処を以申上見候、何れ共御評議次第と奉存候

大船越堀切
材木橋

一、大船越堀切掛橋掛候儀と相見、宝暦年迄は、土橋出来候儀と相見候得共、寛政年ニは材木橋出来候様被仰付候間、村方便利之訳在之、御郡奉行所ヨリ申上候依、材木橋ニ相成候儀相見申候、入用之材木は御立山ヨリ不伐出、伐伏山出木之人夫飯米は、上ヨリ御構不被成、浜え取出候上橋を掛候節計之人夫、飯米為被成下儀と相見、尤船橋ニては不便用之品在之、右之通被仰付候儀と相見申候、此節は如何可被仰付候哉、此分も見分積可被仰付候哉、尤長拾弐間壱尺・幅九尺ニ付、懸通置候ては通船之支ニ相成候ニ付、梁中参間ハ明置、御巡検使勝本御到着之御左右相達候上、懸通候手当ニ候儀と相見、其外仁位村浜ニは船を以波戸出来候儀と相見、是等は御郡奉行所取設之儀ニ付、手当方心組も可在之、外ニも右等之取設方ニ依候は、此節見分役々被差下候儀ニ付、見分被仰付置候場所等無之哉、御郡奉行所吟味被申上候様、御達相成如何可有御座候哉

船橋

通船之支

（天保八年酉）

右之趣宜御聞通被成下、尚何れ共御賢慮之御差図被仰渡被下度奉希候、以上

酉三月　　御勘定奉行所

田舎御宿
御普請奉行
古川武左衛門
御作地方出張
御勘定手代
笹葉孫右衛門
作事方手代
扇廣作
番手小頭
小田市左衛門
大工小頭
惣八
当時番手
壱人

右は巡検上使、田舎御宿御普請為見分、明十一日罷下候間、御切手且乗馬・荷馬差出、無滞送方等、夫々御差図可被成候、以上

三月十日　　御勘定奉行所

覚

目障之所

其方儀、御巡検使御宿拵普請奉行被仰付候間、御勘定奉行所・御郡奉行所得差図可被相勤候事

御勝手向

一、寛政年御宿ニ成候家々、当節は及大破候と相聞候付、左様之所は成丈建継取繕等ニて相済候様、其外御通筋目障之所は申不及、御高札損之所見掛能取繕候様可被相心得候、新ニ御建被成候ては、御時体柄御物入之違不軽事ニ有之、殊更御勝手向御難渋之次第、追々公儀えも被仰上置たる事ニ付、御丁寧ニ相成候ては、却て不宜儀候之間、麁末・不丈夫ニ無之様、御郡奉行以下役々立会見分之上、仕様帳入目積等可被差出候事

寄付

一、御宿々寄付無之候ては、不叶事ニ候間、今程解除候所も有之候は、軽く四畳半ニ建、天井は屋根裏ニても可相済候事

湯殿・雪隠

一、御寝間、不しまり之所は、素り床之下行抜ニ成居候ては不用心ニ付、左様之所は可取繕、猶又湯殿・雪隠等は、別て損居可申候間、見計致修理候様可被心得事

但湯殿、雪隠近所之椽、大体片椽ニて不苦事

右之条々得其意、万端御費無之様心を用、諸事御為宜、厳重可被申談候、以上

御宿三軒

雑兵多人数

豆酘草使家

三月　　年寄中

古川武左衛門殿

右御書付、普請奉行八郷御宿見分下村前、御用掛平田俊左衛門御詰間え誘引、御月番古川主典殿より御渡被成、見分済、上府之上、御用掛御支配杉村右馬助殿え俊左衛門より致返上候事

巡検上使御宿三軒之内、佐護郷・豆酘郷草使屋御借上可相成哉之趣、先日御伺申上置、下見分之儀御郡奉行役談仕候処、佐護郷草使屋ハ差支無之、豆酘郷之儀は、御着船前廉ヨリ夫六拾人、馬参拾疋、口付共ニ人夫九拾人程呼登候先形ニて、右差配之役々草使え相詰候事故、御借上ニ難取計、外ニ振替如何在之哉之及返答候、然処右場所之儀は、御旅宿近過之事故、右等雑兵多人数入込候儀如何可在之哉、既ニ寛政年ニは、板塀しめ切ニ相成居候様ニ相見、此節被仰付へき哉、草使難被召置候は、下宿ニ御借上ニ相成候様儀、御都合之儀と評議仕候、何れ共御差図被仰出被下度奉希候、以上

酉六月　　御勘定奉行所

御付紙

見届候、豆酘草使家御貸上被取計候様、及差図置候付草使引移、先御郡奉行申談相応之場所可被致手当候

六月十九日

年内江戸御発駕

御巡検使之御様子、於江戸表其筋無油断承合居候処、当秋将軍宣下前後ニは、御人柄も相済、無間御下向可相成と之内話有之、左候得は年内江戸御発駕、御国えは来早春御下向ニ可相成趣、今度申来候間、御手当方無手抜様夫々可被取計候、御模様相知次第追々可相達候、以上

七月二日　　杉村右馬助

田嶋所左衛門殿
大目付中
仁位格兵衛殿
平田俊左衛門殿
藤正左衛門殿
多田左柄殿
箕原九八郎殿
島居正左衛門殿
船改頭役・佐役中

御勘定手代
小川与一兵衛

右は御巡検使御用掛被仰付置候処、此節江戸勤番被仰付候間、右御用掛被差免候

同

繁野涼四郎

右は小川与一兵衛為代、御巡検使御用掛被仰付候、以上

七月四日　　御勘定奉行所樋口弾正

早春御下向
御借上

御郡奉行所え申越候手紙

以手紙令啓上候、御巡検使来早春御下向可相成段御達有之、就夫郷之御借上品々申進候様被仰下、凡紙末之通之品々、御借上ニ相成居候様相見、一郷之御借上分申進置候間、豊崎・佐護・伊奈・三根・仁位・与良、右六郷右高を目度ニして、成丈全数相揃候様御達被下度希存候、此段為可申述如是御座候、以上

七月九日　　御勘定奉行所

御郡奉行所

一、椀　百参拾人前　　一、引盆　弐参束
一、錫間鍋　弐対　　一、木具　五束
一、片木　壱束　　一、皿　拾五束
一、猪口　六束　　一、天目　六束

椀
皿
猪口

一、切溜　三組
　組入子鉢ニても
一、肴鉢　弐拾五枚
一、膳　百参拾人前
一、塗飯次　拾
一、丸盆　六束
一、塗枕　百
一、火鉢

一、塗湯桶　拾
一、料理鍋　四拾
一、吸物椀　六束
一、屏風　三双
一、手燭　弐
一、木綿夜具　五拾通

肴鉢

火鉢

御船奉行所手代
佐護吉五郎

右は御巡検使御用掛被仰付候

御勘定奉行所樋口弾正

七月廿四日

来春御下向

御巡検使之儀、来早春御下向ニ可相成趣、江戸表ヨリ申来候付、無手抜様取計候様被仰達奉畏候、就夫御船繰仕見候処、元来御数少之隼船、若来戌年、殿様御下向ニ共相成候えは、年内中ニ御船之仕回切、早春御迎船御出帆ニ至可申、左候得は丁度御巡検使御下着と御一所ニ相成、

御船繰
日吉丸
長盛丸
新規造
参判使
日吉丸
弐拾六挺立

弥以御船繰六ヶ敷、殊其前、各中様参判使として御両度之朝鮮御渡可有之、引小隼弐艘御引被成、重ね之御船繰不相成当惑仕申候、就夫御時体柄多分之御物出事ニ御座候得共、当日吉丸之儀、造主ヨリ十七ヶ年相成、難御用立、大修理又は御造替ニても被成度段、其業筋之人より六月十九日書付を以申出候付、其節之書付差上置候事ニて御座候、扨又長盛丸ニも敏く御造替之年期ニ付、新規造被仰付置候得は、此弐艘船、此節新規造被仰付候ハヽ、奥ニ申上候様之御船繰ニ相成可申哉、殿様御帰と御上使御下着と御一時之運ニ相成不申候は、御船繰相成可申候得共、大凡御一時之運ニと見て、右弐艘船新規造被成、且古日吉丸・古長盛丸修理を加へ、此節之御用ニ相立候様可被成候は、仮成ニ御船繰相立可申、然処弐艘船新規造と申ては、造主難相望も難計、依ては先ツ日吉丸一艘を重ニして、長盛丸は参判使御曳船ニ被成、年内御帰ニも相成候は、夫を以御上使先導船ニ当可申、万一参判使御逗留ニ共相成御様子ニ候は、村船ニても御引替被成、且後之御渡之参判使曳小隼も矢張村船を小隼立ニ相飾候て御済被成、如何可有御座哉、先ツ御上使御下着御船繰之儀、左之通奉伺之候

覚

一、隼船　壱艘　　新規御造立日吉丸　弐拾六挺立

但、此前は御召替小鷹丸、御使者乗船ニ被差越候得は、其節は新造ニて御試調無して不叶訳ニ付、折柄之事ニて、弐拾六挺立代被召仕候と相見候得共、此節は先形之如く弐拾六挺立、御新造日吉丸被召仕候ニして

長盛丸
拾八挺立

一、同　壱艘　　拾八挺立　長盛丸

但、先形為案内被召仕候は、弐拾弐挺立と相見候得共、御有合無之、天明年ニは拾八挺立長盛丸ニて、御済為被成と相見候付、当節も其通被仰付度奉存候

一、頭漕天道　弐艘

内壱艘は、古小使船御在合ニ候処、御船具全無之と申、内第一帆無之、此帆新ニ御入被成候得は、其外之道具ハ大体古物等取集候は、乗出可相成候間、跡壱艘御借入被成度奉存候

但、弐艘共御借船ニ被仰付候様御伺可申上奉存候得共、内壱艘は小使船御召仕被置度、迎使乗揚之節、第一御見掛も宜、且彼方様御船頭と此方様船頭と申談、同前沖見等之入用有之事之由相聞候得は、旁御手船壱艘は、御遣し被置度奉存候

隼船

一、隼船　壱艘　　拾八挺立位ニして

但、御着之節御馳走役三人乗船、三艘御入用と相見候得共、天明年之節、御有合無之ニ依、壱艘乗組ニして村船御借上被成、隼船頭ニ御飾被成御済候、当節も其通ニ可被成候哉

小使船

一、小使船　参艘

但、御着岸之節、御馳走役参人、橋船用、且頭漕諸御入用共六艘と相見候処、天明年之節、三艘ニて相済候と相見候ニ付、此節も其通可被仰付候哉、内壱艘は古船御座候間、

御飾船

村船

隼船飾

残弐艘御不足ニ付、似寄之船御借入被成度奉存候、尤仁位御渡之節、頭漕ニ此前差廻有之候間、当節も御間筈能其通取計可申候

一、隼船　壱艘

但、当浦御飾船ニ御座候、延享・宝暦両度ニは、弐艘御飾為被成と相見候得共、天明年ニは、弐艘御有合無之、五拾六挺立壱艘被成御備候、此節は隼船壱艘も無之候間、御米漕を隼船形ニ飾、壱艘御備被成候て如何可在御座候哉

一、同　壱艘　　弐拾六挺立位ニして

但、佐須奈飾船、浦々御見分之節、上使被為召仕訳を以、天明年ニは安全丸被召仕候と相見申候得共、隼船立此節は御在合有之、御残念之乍御事相応之村船を以被成御済、如何可有御座候哉、右ニ付ては飛船参艘、御供船三艘御入用ニ御座候、此前之通御郡用意被仰付度奉存候、村船御借上ニ被仰付候は、御船手見合差下、船番・船飾等為仕可申候

一、隼船　壱艘

但仁位御渡用ニ候、是又天明之通村船を隼船飾ニ仕立、御借上ニ可被仰付候哉、頭漕三艘共前ニ申上候通、御着岸之節、召仕候小吏船を差下可申、其外御供船ニ至候ては、此前之通御郡御用意被仰付度奉存候

一、前ニ申上候趣御聞通被成下、此節弐拾六挺立新規造壱艘被仰付候は、帆・碇・綱類ニ至、是又新規同様御入不被成下候て難叶候付被仰付候は、早速取調御用意方御勘定奉行所申談

日吉丸
御入料

候様、取計可申候

右之通奉伺之候、如何共御差図被成下候、猶心付之儀追々可申上候、以上

七月　　御船奉行所

御巡検使御下向御用意方之儀ニ付、御船奉行所ヨリ被申上之書面、被成御渡披見仕候、隼船之儀数艘御入用之儀ニ付、日吉丸壱艘新規御造作方之儀は、御船奉行所申上之通可被仰付候哉、然処御入料多数之銀高と相成候処、追々申上置候通、御先形之御入料ニも今以御備不相立中、御船御造作方ニは臨時之御入目ニ付、夫丈御入料相増候付、弥御手当相立兼候得共、事品も違、是非不被相備して難叶義ニ在之、其上日吉丸之儀、書面之通造立よりは年数ニも及居、何れか御造替不相成候て、其侭ニて可被難相済、御用意方時月も差詰候儀ニ付、新規御造作方早々御治定被仰出、入用之諸品積書を以申出ニ相成候様被仰渡被下度奉存候、尤此節御船奉行所申出之通、御治定ニ相成候得は、第一村船数艘御借上相成候儀ニ付、有来之侭ニて相済候、船計ニも有之間敷、修理不相加しては不御用立船も可有之、其上隼船ニ飾方等も可在御座儀ニ付、尚又其段は御郡奉行所え御借上方御差図被仰渡、早々御吟味被仰付被下度御座候、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

酉八月　　御勘定奉行所

御下着御用

覚

一、苧　　弐百拾貫匁
一、苫　　五百五拾枚
　　御巡検使御下着御用
一、道木丸太　参拾本
一、長大杭　　参拾本　　此三口当月中上納ニして
一、椴板車　　弐拾挺　　壱尺・壱尺二寸
　御小隼立御造作様
右之通、早々相納候様御郡え御注文可被成候、已上
　　酉八月二日　　御勘定奉行所
　御郡奉行所

道造

人夫高

御巡検使田舎御通行筋道造之儀、当時之御時体柄ニ付、御入目御減縮之方之儀、上之六郷奉役中え被及諭達置候処、此節之御巡検使は、寛政年ニ較候ては格別御間も有之、道中内ニ生茂候木品、大木ニ相成候程之儀ニ付、大荒ニ相成、不一形手入と相聞候得共、御時勢深く令勘弁、何分寛政年之人夫高を以、道造成就為仕度旨申出、奇特之至ニ付、此節之道造六郷奉役中え御任被成候間、御為宜令精力旨被相達、道造仕様之儀は寛政年之通取計候様、可被申渡候、以上

八月九日　　杉村右馬助

御郡奉行所
多田左柄殿
高崎翼殿
御勘定奉行所

遠見御番所

鰐浦遠見御番所改建御普請方、御関所御役々被成仕様入用之諸品、左之通申来候付、釘類差下候事、板木は御関所方より直ニ郷注文相成候事

七寸釘

一、七寸釘　十本
一、四寸　弐千拾五本
一、弐寸釘　四千百本

弐寸釘

一、五寸釘　千四拾本
一、三寸　五百本

右府内ヨリ差下候事

松

一、大垂木　五本　弐間もの
一、松　五歩板　拾八間
一、雑まき　五寸角材木拾丁　長八尺
一、松敷脇　壱丁　弐間もの
一、五六材木　六丁　弐間もの

杉板

御普請積帳

日雇賃金

一、松貫　八枚　弐間もの
一、椎五六材木　六丁　二間もの
一、壁縁　弐拾弐本　右同断
一、杉板　五間　厚サ弐寸　九尺もの
一、同　拾壱間　厚サ壱寸　九尺も之
一、同　三尺廻杉丸太壱本　長弐間半
一、松　五八材木参丁　弐間もの
以上

御巡検使府内御宿々、両御関所、大船越、綱浦御番所、鰐浦御関所御見分之節、御休家等御普請積帳三冊差上之、奉御披見候、就夫府内御宿々之儀は、御先格之通各中様を初、諸役以下小役人迄御用掛之面々、一同ニ御見分方之儀、不間取御極御達被成下、御見分相済候は、早速御普請取掛不申候ては、何方も大分之手入、修理之儀ニ付、御間筈能出来申間敷、然所右御入料積高銀拾五貫九百匁余之分ニ至り、全御手当無之取掛被仰付候得は、大工日雇賃金は、是非相備不申候ては取掛相成不申、右御手当方如何共相立兼罷在候得共、最早何分ニも御取掛ニ相成不申候ては、御間筈之儀も不相済奉存候付、御手当方之儀は、近々奉伺候様可仕候、此段宜御差図被仰渡被下度奉希候、以上

府内御船附宿

久田村御揚陸

風呂屋

小役人相詰場所

酉八月　　平田俊左衛門
　　藤小左衛門

巡検使府内御船附宿之儀、寛政年ニは六十人、権藤久右衛門・渡辺利七・亀谷喜三郎宅御借上ニ相成、湯殿・雪隠等少々御繕被下、其余悉皆自分繕ニて御用立候儀と相見申候、当節は如何可被仰付候哉、何れ浜付相応之町屋、御借入ニ相成候儀ニ御座候は、御手筋え御達被下度奉存候

一、久田村御揚陸之節、御宿寛政年ニは長村杢左衛門宅、且延命寺御見分ニ相成候処、杢左衛門宅御手入薄候付御借入ニ相成、扨又同所売物方ニ相成候家一ヶ所、風呂屋一ヶ所、村家御借入ニ相成候と相見、当節は如何可被仰付候哉、寛政年之通被仰下候御事ニ御座候は、是又御手筋え御達被下度奉存候

右之段奉伺之候、何れ共御賢慮次第奉存候、以上

八月　　御勘定奉行所

御巡検使、此元御在留中、各様以下諸役小役人相詰候場所、寛政年ニは、畑しま藤右衛門宅御借上被仰付置候様相見、然処同所之儀、今程松山卯右衛門相住居罷在候処、手狭ニ相成候儀と相聞申候得は、当節は中村太玄宅、右御役々諸所ニ御借上被仰付、如何可在御座候哉

木賃賄

一、上使御宿は勿論、下宿為取賄、旅籠屋、町家内三軒御借上ニ相成来候儀と相見申候処、寛政年留書を以は、其節も木賃賄ニ相成候付、御宿ニて御宿亭主、夫々仕出被仰付、旅籠屋御入用無之、依之下知役大小姓中も被差免候義と相聞候得ども、前々ヨリ旅籠屋は御手当相成来居候儀と相見申候得共、此節は町家内三軒、旅籠屋御借上可被仰付候哉

町家三軒

一、御宿人足、郷夫宿壱軒、是又町家内最寄之場所御借上被仰付来候儀と相見、御借上方御手筋え被仰達被下度奉存候

右之趣、宜御差図被成下度奉存候、以上

酉八月　　平田俊左衛門
　　藤正左衛門

御付紙

中村太玄宅御借上ニ相成候段、八月廿一日被仰出

田舎御宿

田舎御宿々、御普請積前帳之通ニ御座候処、都合銀四拾参貫九百余与相見、右御入用之内、郷方ニて相届丈は御加勢をも被仰付度候、先般申上候通、寛政年ニは自宅普請入料出銀仕候人も有之、又は板木差出、或は一手を以普請取計候儀と相見、此節は別て御行支中之儀ニ付、相及丈は出精仕、上之御厄介相軽候道、御郡奉行所えも折角御熟達ニも被及居候儀共相聞候得共、猶又諭達方被仰付、御請之品ニ依、何れ上ヨリ御普請被仰付御場所々々、或は御関所、其外御

自宅普請

番所等ニ至、品々御普請御取掛ニ相成候様被仰出、如何可在御座候哉、夫共御手当之儀御銀米共、全相立居不申候得共、何れか御取掛ニ不相成候ては、不相済儀ニ付、追々奉伺候品も可在之、此段宜御差図被成下置度奉希候、猶何れ共御賢慮之御差図被成下度奉仰候、以上

八月　　平田俊左衛門
　　藤正左衛門

御旅館大破

口上手控

巡検御上吏御旅館ニ御借上被仰付、御手入無御座家居も可在之候処、御上吏毎ニ御宿被仰付候段、千万難有奉存候、就夫一昨廿三日、御評議之趣可承知仕候処、脇之御本陣と違、殊外大破ニて御入目も太ク相聞、其上家体曲等之御評議向も有之、斯ル御時体向御入目銀之相嵩候段恐寒仕、自分之下通成共即席申上度奉存候処、通年勝手向不都束ニて、口惜敷奉存候、将又諸勘弁仕候処、只今之家体御普請被下候時、曲ミ之形ニては、御上使御旅館と申儀如何奉存候間、自分ニて曲ミ直取計方大体銀調仕候間、其余御普請被下置、御宿被仰付被下候は、難有可奉存候、尤私家屋敷之儀、先祖代相設候節、御用場と申儀御達ニ付、難渋難凌諸合も他借仕、私ニ売払等不仕儀ニ御座候得は、此節之御用乍恐御不繰之御時体、可成ニ仕繰之道も候は、自力ニて普請仕、御用立可申儀ニ候処、前条之通不行届之身分相届得不申、曲ミ直之入料自分ニて仕候は素り、建具等之儀骨具御出来被下候は、自分ニて張上可申、右を自分之寸志と御聞得被下、此節も御宿被仰付被成下候は、私代迄も御旅館連続御借上被仰付難有可奉存候、御勝手筋之儀

南岳院

曲ミ直し

普請入料

自分ニて張立

与奉存、御改所迄御内願申上候間、御評議宜奉願候、以上

八月廿四日　　南岳院

御勘定奉行所

南岳院より申出之書面差上之、奉入御披見候、此節居宅御借上被仰付置候処、御時体柄感服仕、申出之趣尤之至奉存候、古家之儀ニ付ては大分之曲ミ相見居候段は、頃日御見分之通ニ有之、右曲ミ直し自力を以取計候上、御普請被仰付置候は、場所柄之儀ニ付、又候御用之節は、御借上ニも可相成儀ニ付、願出之通曲ミ直、自力を以取計候様被仰付候付、建具ニも損繕は素、不足之建具は新規出来被仰付置候儀ニ付、張立方は是又申出之通、自力を以張立候様被仰付候哉、猶何れ共御賢慮次第奉存候、以上

丁酉八月　　御勘定奉行所

〈頭注〉御付紙

見届候、御巡検吏御宿用居宅御借上可被成、此程役々令見分候処、大破之家体御普請入料、大造之積前相見候、然所即今之御事体令感服、曲ミ直等自力を以出来、建具損繕、新規御出来之分共、張立方是又自分ニて張立可御用立段申出、尤之心得方ニ付、申出之通被仰付候、此旨可被相達候

九月

樽之浜船附築出

巡見使御通行之節、鶏知樽之浜船附築出之儀、材木を以出来候方御便用と評議仕、御伺申上候処、伺之通材木ニて御見掛宜出来、御通行之節麁末之儀無之様、入念夫々可取計之御旨被仰出、尤積書差出候様御達被置、則郷方より取調積書差出申候間、差上之懸御目申候、最初地方普請奉行積之通、石を以夫々相築置申候得は、後年之為ニも至極宜御座候得共、差当御出方多く相成申候事故、此節は先ツ別紙積帳之通ニて御出来被置、如何可有御座哉、右御積前大工弐百四人、郷夫四百六拾弐人半ニて、今度御作事方ニて取調候、御普請ニ被召仕候、員銀は通帳を以御渡被下候得は、都合銀壱貫八百五拾六匁六分余と相成、定式之飯米員銀ニて被召仕候得は、米四石参斗五升弐合余、銀弐百四匁ニて相済申候得共、御作事方積之通当時之米価も有之、定式通ニては難儀仕候得共、追々米直段も引下居候様子ニ御座候間、定式ニ少々御見込被下、斯ル御時節之事故、積前之夫高、大工高を以、何分御様便宜出来仕候様御治定被仰出被下候は、員銀等之処は尚御作事方ニ被召仕候釣合も可有之候付、御勘定奉行所御役談之上、御便用相当之処取極候様仕度奉存候、仕位浜船附普請之積は、未差出候得共、右を待候ては隙入、御不便用と奉存候間、田舎之方取調相済候事、品ニヨリ段々奉伺候て御治定之、奉得御差図、何事ニ不依、一日も早取掛度評議仕奉伺之候、可然被仰出被下度奉存候、此段為可申上如斯御座候、以上

積前之夫高

仕位浜

酉八月十九日　　御郡奉行所

杉村右馬助様

樽之浜

鶏知村樽之浜船附ケ御普請屋、棚ニして上ニ出を鋪候積、西手船附より東船附迄之間数、柵間弐拾参間、入四間ニして、下タ岩ニて柱堀込之儀不相成候付、入桁間共ニ貫を通桁込ミ、せいろ組ニして出来候事

柱

一、柱百拾五本　松丸太ニて

内弐拾参本　九尺物　同弐拾参本　五尺

同弐拾壱本　七尺物　同弐拾参本　参尺

同弐拾参本　弐尺

取出夫　拾六人

松丸太

一、桁用松丸太　弐間物ニして　百八挺

取出し夫　三十六人　但し一人参丁取ニして

一、張木用松丸太　弐間物ニして

取出し夫　十六人　但し同断

一、貫弐間物　参百七拾五挺

此材木弐間物　五寸・八寸ニして四拾七挺

取出し夫　四十七人　但し一人一丁取ニして

木挽夫　七十三人　一人五枚挽ニして

一、坪数九拾弐坪
　大工手間　百八十四人　　壱坪弐尺ニして　切組手間
一、道木丸太七百八拾弐本
　取出し夫　廿八人
　一人ニ付弐拾本伐出ニして
　長サ弐間ニして、但し壱間之所ニ拾七本鋪ニして
一、柴元百五拾本
　伐出し夫　四人
　一人四十本伐ニして
一、柴百八拾四〆　但し五尺縄ニて
　壱坪弐〆敷ニして
　取出夫　十八人半　一人拾〆伐ニして
一、土台組立夫　十人
一、葛五〆　取出夫　二人
一、道木丸太　かき付柴敷等召仕夫　廿人
一、土取土鋪　弐坪ニ夫壱人と見
　夫四拾六人

〆夫参百弐拾六人半
〆大工百八拾四人
一、右同所井樋口迄参拾間幅弐間ニして
一、柱用松丸太六拾挺　長サ五尺
　但し三尺間ニして堀込
　取出し夫　七人　掘込夫　六人
一、入桁間松丸太弐間物六拾挺
　取出し　夫弐拾人
一、外類桁壱通弐間物拾五挺
　取出夫　五人
一、道木丸太五百拾本
　取出夫　廿六人
一、柴元百弐拾本
　取出夫　三人
一、坪数六拾坪
　大工手間　三十人

一、柴百弐拾〆　五尺縄ニて
取出夫　十二人
一、土台建組夫　拾五人
一、下タ地拵候夫　拾人
一、葛五〆　取出夫　弐人
一、土込ミ夫　参拾人
〆夫百参拾六人
〆大工弐拾人
合〆夫四百六拾弐人半　飯米弐石三斗壱升弐合五勺　壱人米五合ツヽニして
合〆大工弐百四人　飯米弐石四升　壱人壱升ツヽ　賃銀弐百四匁　壱人壱匁ツヽニして
弐口〆六百六拾六人半　合米四石参斗弐合五勺　合銀弐百四匁
右は村役人、大工立会積高差上之申候、以上
夫四百六拾弐人半
賃銀壱貫四拾匁六分弐厘五毛　一日一人銀弐匁弐分五厘充ニして
大工弐百四人
員銀八百拾六匁　一日一人銀四匁ツヽニして
合　銀壱貫八百五拾六匁六分弐厘五毛

御作事方積通ニしてハ、如此ニ相成申候

酉八月十五日　　神宮吉左衛門

御郡奉行所

御馬具

御巡検使御下向御取設之内、御馬方用意方之儀ニ付、同所ヨリ申出候書面被成御渡、披見仕候、上使御召用之分、御馬具御在合如何可在之候哉、取調申上ニ相成候様御達被下度奉存候

中馬六疋

一、田舎御附廻中馬六疋、寛政年御用意ニ相成候段申上候書面ニ御座候処、此御役所留ニは、宝暦年拾五疋、外ニ御借馬五疋と相見申候得共、田舎御附廻中馬拾疋被仰付、尤寛政年御下向之節、御立馬上馬七疋ニて御不足ニ付、御借馬を以上馬不足相償、右拾疋、外ニ凡五疋程と見、御家中より馬具御借上、都合拾五疋之御手当被仰付置候、其節御借上之儀御達ニ相成候、馬具紙末之通、御借上方御馬方より申上ニ相成居候儀と相見申候

一、御着船之節は勿論田舎御附廻共、御馬御用意方之儀は、右之通宝暦年之節は、上馬三疋中馬都合弐拾疋と相見、寛政年ニは拾五疋と相見申候得共、御馬方書留等、猶又吟味被仰付、早々御治定被成、諸注文物等不差出置候ては、御間筈ニ合兼可申儀と奉存候

一、田舎御附廻御馬役之儀、寛政年ニは馬医一人、御厩之者二人被差下候様御達ニ相成居候処、中馬御附廻相止候付、右馬医、御厩之者ニも御附廻被差免置候儀と相見申候

右之趣、猶御吟味之上、何れ共被仰出度奉存候、以上

酉九月　　御勘定奉行所

馬医

鞍

手綱

一、切付　三口
一、力皮板氈　参掛
一、駄覆　参ツ
一、手綱　参筋
一、泥障　参掛
一、練繰大口取　参間
一、無地鞍覆　参ツ
一、馬批杓　参本
一、練繰小口取　参ツ
一、渡手助　参掛
一、孰腹帯　参筋

右は御召用

一、村山房　三掛
一、手助　参掛
一、十文字轡　六喰
一、馬氈　弐ツ
一、村山鬢掛　参ツ
一、桐油馬衣　三ツ
一、竹沓籠　参ツ　棒共
一、桐油鞍覆　参ツ
一、桐油駄覆　参ツ

一、鞍　弐拾口
一、泥障　弐拾掛
一、泥障諸　弐拾掛
一、手綱　弐拾筋

一、丸三尺　五本
一、切付　弐拾口
一、力皮板馬氈　弐拾掛
一、火打四方手　弐拾掛

中馬用

一、村山房　弐拾掛
一、轡　弐拾喰
一、鐙　弐拾足
一、桐油鞍覆　弐拾
一、洗轡　弐拾喰
一、とち金　弐拾参掛
一、手助　弐拾掛
一、木綿馬氈　弐拾
一、腹帯　弐拾筋
一、竹沓籠　壱荷　棒共
一、鼻皮　弐拾参掛
一、沓籠覆　五ツ

右中馬用

右は其節御馬方御在品之分、引残御借上方御達相成候儀ニ可有之哉、此御役所書留ニは右之通相見申候得共、尚又御馬方ニて吟味被申出候様、御達被下度奉存候、以上

久田村
両所見分

御巡検使御乗組之上、久田村え御繋船ニ相成、御揚陸之節、御宿御設ニ相成、寛政年ニは延命寺、且給人長村杢左衛門宅、両所見分有之候処、杢左衛門宅御借上ニ相成居、此節も右両所見分可被仰付候哉、何方ニ相成候ても、御普請等無之候て相済間敷儀ニ候間、明十二日見分被仰付、如何可在御座候哉、尤見分御役々先規吟味仕候処、与頭一人・町奉行一人・御郡奉行一人、我々御用掛之内一人、其外、与頭手代・御勘定手代・御郡手代・御作事方役々罷越候儀と相見申候間、頃日御借上被仰付候府内御附宿町屋三軒、是又右之御役々見分被仰付候先規と相見申候付、与頭・町奉行・御郡奉行え、右之趣御達下可被下候、此段宜御聞得被下度奉希候、以上

酉九月　御勘定奉行所

久田村宿

仁位浜波戸

宮谷橋御番所

信使来聘

〈頭注〉御付紙

見届候、御船附宿六十人、平山源助以下三軒、明後十四日見分之儀、与頭以下役々え相達在之候間、可被申談候

一、久田村宿一軒、下宿二軒御借上被成候付、明後十四日罷越、御郡奉行被申談、相応之家居見分可有之候、尤与頭・町奉行等不及見分候

九月十二日

巡検使御通行ニ付、仁位浜波戸拵候儀ニ付、仕様帳弐冊、御郡奉行所添書共被成御渡、披見仕候、屋棚普請は、諸色は素り第一人夫多人数之積立ニ在之、船波戸之儀先例も在之、手入も薄之儀と相見申候得共、御郡奉行所申出之通、船波戸ニて相済候様、御治定被仰付如何可在御座候哉、尚何れ共御賢慮次第奉存候、已上

酉九月　　御勘定奉行所

御巡検使御下向、御取設之内、諸番所御在来之場所々々御飾ニ相成来候処、宮谷橋御番所之儀は、信使来聘之節、御取設之儀ニ御座候得は、御先形ニは無之候故、此節右之侭ニて可被下置候哉、御殿開可相成候は、損所之分見分之上、修理等被仰付如何可在御座候哉、奉伺立候、以上

外見

樽之浜地石築出
人夫六百人

御用意品

上方注文

酉九月　　御勘定奉行所

御付紙

見届候、宮谷橋御番所之儀、取開飾等ニ不及候間、外見損之所而已可被取繕置候、若御尋有之候節は、信使来聘之節、取設置候段、御答候様相達候筈ニ付、可被得其意置候

巡検使御通行之節、鶏知樽之浜地石築出之儀ニ付、郷方ヨリ差出候積書壱冊、神宮吉左衛門申出之書面、且御郡奉行所添書ニも被成御渡、披見仕候、吉左衛門申出之通被仰付候得は、人夫六百人ニて飯米御渡被下候は、其余之所は郷中ヨリ相償、右ニて長く御手入無之様出精為仕可申由、同所之儀は、何角之節之御用場之儀ニ付、右ニて丈夫ニ普請被仰付置候は、後々之御為相成候ニ付、吉左衛門申出之通、六百人夫を以普請被仰付、如何可在御座候哉、猶何れ共御賢慮次第奉存候、以上

酉九月　　御勘定奉行所

御巡検使ニ付、御用意品之内、紙末品々御不足ニ付、先例之通、御家中市中共、持合之人々より御借上可被仰付候哉、右（左カ）候得は筋々え御借上方御達被下、当月廿五日迄御返答申出候様、被仰渡被下度奉存候、尤其外口々多数之御用意品々御座候得共、追々御入用有之品は、多分上方注文可仕、手配罷在候儀ニ付、紙末品々ニも御借上不相揃分は、何れも上方注文差出不申候て

不相済儀ニ付、御達ニ相成候上は、成丈早々返答申出候様諭達被下度奉希候、以上

九月　　御勘定奉行所

料紙箱

一、料紙箱　六ツ　　一、縁金黒塗重　参組

絹夜具

一、絹夜具　壱通　上使御用分上　　一、絹同　四拾壱通　中之分

一、木綿夜具　七拾通　　一、宗和膳　弐拾人前

馬具

一、天秤　壱丁　　一、乗物　三丁

一、馬具　参通　上之分　　一、同　八通　中之分

一、同　六通　中之分

以上

御入用品々

見分人

御巡検使田舎御下之節、御入用品々、先例之通御借上方御郡奉行所より触達ニ相成、有合之品々取調申来候付、見分人先例之通被差下度、就夫寛政年之節被差下置候は、御賄頭中嶋右門、御郡手代壱人被差下置候様留書ニ相見、右門儀は、其頃諸般御用意方専ら心配仕居候儀と相見候付、被召仕候儀ニて有之間敷哉、此節も御賄頭之内、一人可被差下哉之所、両人共当年切ニて交代前ニも相成居候儀と申、殊更取調方最早時月も差迫り、急便不仕候ては不相済儀ニ付、御役切之人被召仕候者、御用便不少儀ニ付、此節は御賄掛之内、川本茂十郎儀は去年ヨリ御用

御不足品
御借上

黒椀
丸盆

掛被仰付置、是迄取扱も仕罷在、其上年来勤馴功者ニも罷成居候儀ニ付、当節は為御用便、御郡手代壱人、右茂十郎両人被差下、御借上品之見分被仰付、如何可有御座候哉、有合之品可御用達段相届候儀なから、田舎之儀ニ付、其内ニは不御用立品可有之も難計儀ニ付、見分之上、品請取行候上、注文品有之候得は、御用意方甚以差急申候儀ニ付、右之趣奉伺之候、猶何れ共御賢慮次第奉存候、以上

酉九月　　御勘定奉行所

御巡検吏ニ付、御用意品々之内、紙末之通御不足ニ付、市中持合之面々ヨリ御借上可被仰付候哉、左候得は筋々え御達被成下度、尤来ル廿五日限、返答申出候様御諭達被下度奉希候、以上

九月　　平田俊左衛門
　　藤正左衛門

一、黒椀　参拾人前　　一、黒塗飯次　拾参
一、火箸扣　五膳　　一、同　参膳　上之分
一、木具　参束　　一、曲物入子鉢　九組　内三組切溜ニても
一、同　弐拾八束　中　　一、丸盆　四束
一、蝋鉢　三枚　　一、春慶片木　八束

庖丁

硯蓋

火鉢

一、湯久利　拾壱　一升入ニして　一、料理庖丁　参通
一、湯戸　九拾壱　並之品　一、引盃　百八拾六枚
一、吸物椀　拾参束　一、鉄間鍋　七拾五
一、硯蓋　四拾五枚　一、唐金火鉢　拾壱
一、磻火鉢　七拾　一、春慶多葉粉盆　百通
一、閣煙器　五百四拾本　内弐百九拾本　上
同二百五拾本　中下
以上

御借上之居宅

此節御巡検使ニ付、村々御借上之居宅、当春其筋御役々被差下、御普請積帳取調差上置候処、居宅御貸上之面々、何れも御時体柄威服仕面々其器量ニ応し、御加勢可申上段、郡奉行所え申出候書面、且添書共被成御渡、披見仕候、何れも心得方、尤之儀と奉存候得は、申出之通御取用被下度儀と奉存候、就夫御加勢申上候口々は、御積前之木品ヨリ相減注文差出候、手配仕罷在申候、就夫両御関所は素り、郷々御普請ニ至り数口之儀、中々大造之儀ニて、急々取掛候様仕度奉存候、御普請役々早々被差下度奉存候、然処右之通御加勢ニ付、木材之注文方相減候、取調口々ニて甚タ手入ニ有之、漸昨今之注文ニ相成候得は、郷方ニも木早々伐出方日数を軽不申候ては、没々被差下候時、下村早速取掛候様ニも相成間敷哉と奉存候間、敏ヨリ注文仕置候、

両御関所

両御関所ヨリ御普請取掛候様仕度奉存候間、御役々も直ニ御関所え当被差下、其外郷々段々と取掛候様仕度奉存候、就夫大造之御普請向ニて最早余月も無之候得は、役々一組ニては、御間筈能成勝之程、無覚束奉存候間、御関所御普請之様子ニヨリ、外ニ役々一組被差下候様被仰付置被下候は、御成就方も尖ニ可有之、且又口々多端之御普請向も御座候得は、為御障御作事方え被相付置候見分役をも同様被差下度儀と奉存候、猶何れ共御賢慮次第、可然被仰出被下度奉存候、以上

九月　　平田俊左衛門
　　藤正左衛門

御付紙

書面之趣承届候、両御関所御普請、急速取掛候様手当可被致候、其外村方御普請大造之事ニ付、御関所御普請之様子ニヨリ、今一組相増二組ニして役々被差下度由、是又其通可被致手配候、依て被差下候役々名前、早々可被伺出候、以上

九月廿一日　　幾度八郎左衛門
　　杉村右馬助

平田俊左衛門殿
藤正左衛門殿

御勘定奉行所
多田左柄殿
高崎翼殿
御郡奉行所

御勘定手代
笹葉孫右衛門
御作事手代
阿比留郡治

右は御巡検使ニ付、両御関所小綱、大船越御番所、其外田舎御宿々御普請ニ付、右之面々被差下候哉

大工小頭
惣八
並大工
十二人
番手小頭
小田市左衛門

普請奉行

番手
一人
御手左官
一人
組左官
一人　御作事ニて雇入
日雇統領代
雇入ニして一人
当時番手
一人

右同断ニ付、可被差下候哉

右之通奉伺之候、以上

九月　御勘定奉行所

御作事掛
古川武左衛門

右は御巡検使ニ付、普請奉行被仰付置、当春御宿ニ見分として被差下候処、当節村々御普請御

佐須銀山

取掛ニ付ては、役々被差下候間、同人ニも此節も可被差下候処、府内御宿々御普請も有之、万端誠認之人ニて、御用便之訳も有之、且又佐須銀山御宿々見分も被仰付置、是又可被差下旁、此度は別紙之役々而已被差下方御伺申上候間、此談御聞届被成下置度奉希候、以上

酉九月　　御勘定奉行所

田代役々浜崎

此節初て

廣川理兵衛

御入料銀拾弐貫

此節御巡検使ニ付、田代役々ヨリ申越候書状差上之、奉入御披見候、田代之儀は、御休泊ニも相成間敷との趣ニ相見申候得は、各別御心遣之儀も有之間敷、然処浜崎之儀何れ御休泊之間、難免と之様子ニ付、田代より作事掛前川健吾諸見分として差越、猶平山元右衛門え委細申越、此前寛政年之節は、御領分ニ不相成前之儀ニて、此節初て之儀ニて在之、素り先例等相考候処、両庄屋且寺等ニて相済たると相聞候処、何れも難御用立候間、此節は新古之御役場取繕、商人廣川理兵衛宅御借上ニして、右三所之修理積取計、絵図積書等差越申候間、差上申候、然処御役場御門内手狭ニ有之、仮番所厩仮繋等取設候場所も無之候ニ付、隣家清左衛門家屋敷、六銭七百八拾匁ニて御買入被成度、外ニ弐百四拾匁御合力被成下候は、組内ヨリ助合いたし呉可申段、申出候分共ニは、都合壱貫弐拾匁ニ相成、然ル上、年々米壱俵程ツヽ御年貢之減と相成、不容易御事とは奉存候得共、此節之御取設手狭ニて不相届者と相見申候得は、申越候通可被仰付候哉、状面三通被仰付候御事ニ御座候は、屋敷代は先々之通郡用銀より貸ニして、御合力之分は払切候様被仰付度奉存候、尤総御入料銀拾弐貫匁程之分、御仕向方之儀申越候処、差当何

を似御仕向可被成御銀筋も無之候事故、此段は追て御伺申上候様可致奉存候、追々御普請向相後候ては、御間筈之程不安奉存候間、早々御治定之御差図被仰越被下度、御普請向は素り諸取設ニ至り、平山元右衛門御用便宜御間筈能引受、心配仕候様御達被下度奉存候、此段奉伺之候、以上

酉九月　　平田俊左衛門
　　藤正左衛門

浜崎御休泊

御付紙

承届候、浜崎御休泊ニ相成候時、御宿差支候付、新古御役場、且商人廣川理兵衛居宅御借上、其外御役場屋敷内手狭ニ付、隣家清左衛門家屋敷御買入被成候ニして、普請向一体之入料積、田代役ヨリ申出候趣無余儀相見候、然処清左衛門屋敷は、御年貢参斗弐升余之場所共相見候、即今之御時体と申旁不容易候事、御用仕ニ相成候ては、不相済次第ニ付、申越之通ニして、早々普請取掛候様可被相達越候、尤厩取建方之儀は、猶又遂吟味、若厩無之候共、相済儀ニ候は、新ニ取建ニは及間敷候、御役場玄関前生垣等を取除、仮成ニ取繕、清左衛門屋敷御買入不被成しては相済間敷哉、成丈御物出等相減候様被取計度事候、其所其役々油断も無之事故、彼地え被成御任候間、時宜次第都合能取計候様可被及差図候、折柄平山元右衛門在勤之事故、御普請向其外諸御取設ニ至り、田代役差図を請、御間筈能致心配候様可被相達候、猶田代役えも相達越候

田代役差図

九月廿六日

七曲り御茶屋
雪隠
売物茶屋
雪隠
金屏風

御巡検使ニ付、七曲り御茶屋之儀、先格九尺角切組一ヶ所、桐油苫葺柴壁ニして外ニ腰掛茶屋一ヶ所、入九尺、桁間参間苫葺、縄結柴壁ニして参方ニ腰掛を取り、上下雪隠弐ケ所取建候先格と相聞申候付、寛政年も其通御取設ニ至り居候処、上使御振合道木縄結等ニ無之候ては、如何敷候間、切組之御茶屋は御差図ニて解除、弐間半ニ九尺之腰掛、御茶屋一ケ所之内ニて、売物屋をも相兼させ、御三人様御休場之用意ニ不及して相済候事と留書ニ相見申候、此節之取設方如何可被仰付候哉、尤重ては柴壁縄結茶屋、九尺角ニして一ケ所腰掛、御茶屋弐軒ニ入九尺ニして、一ケ所売物茶屋九尺ニ入壱間ニして一ケ所、外ニ雪隠上下弐ツ出来、何れも柴壁道木縄結ニて可相済事と、寛政年留書ニ相見申候得共、聢と御達ニ相成たる儀共相見不申、此節何れを相用ひ可然哉、御差図可被成下候

御付紙

七曲り水茶屋、九尺角一ケ所腰掛付、弐間ニ入九尺一ケ所、売物茶屋九尺入壱間一ケ所、外ニ雪隠上下弐ケ所、何れも柴壁道木縄結ニて寄麗取設候様可被致候

一、打廻御番所之儀、先々金屏風、絹幕ニて御取飾被成候儀と相見申候処、寛政年は紋紙屏風、木綿幕ニて相済居申候、此節如何可被仰付候哉

大船越御番所

三ツ道具

古川武左衛門

御付紙

金屏風ニ不及、幕之儀、絹木綿御在合ニて可被相済候

一、大船越御番所御取飾之儀、留書ニ相見不申、上使御通行之場所と相見申候付、表通鑓建等御出来、御番所御取飾方如何相心得可申候哉

御付紙

御番所取飾ニ不及、御巡検使御通行之節は、三ツ道具取除、御番所ヨリ不相見様取計方手筋へ相達置候

右之通奉伺之候、早々御治定御差図被成下候様奉願候、以上

九月　　御勘定奉行所

御作事掛

古川武左衛門

右は御巡検使ニ付、普請奉行被仰付置、田舎御宿々見分として被差下候処、当節村々御宿々御普請取掛ニ付ては、役々被差下候間、同人ニも此節も可被差下之処、府内御宿々御普請も口々有之、万端誠認之人ニて、御用便之訳も有之、且又佐須銀山、御宿見分も被仰付置候得は、是

又可被差下旁ニ付、此度は別紙之役々而已被差下方、御伺申上候間、此段御聞届被成下度奉希候、以上

酉九月　　御勘定奉行所

南岳院
表門前南手
解払

御作事方ヨリ別紙之通、申出候付差上之、奉入御披見候、南岳院御借上御本陣之御手当ニ相成居、御普請取掛罷在候、然処同所表門前南手ニ、先御船手久我右衛門と申者、家を建込相住居罷在、頃日見分仕候処、御作事方より申出之通、表門之下地内挟駕篭之振廻りニも可障程ニも有之、殊ニ石垣通ヨリ右家出張居、殊ニ表通格子作之家ニて、御見掛之場所如何敷奉存候、御作事方ヨリ家を跡え引取、相済度見分をも仕候と相聞候処、夫丈之空地も無之場所と相聞、間近く建組候、家解除候段難儀ニは可相心得儀は御座候得共、不被得止儀ニ付、解払候様可被仰付候哉、何共御賢慮之上、当人えも御手筋を以、御達被下度奉存候、以上

九月　　御勘定奉行所

御作事掛
古川武左衛門
同手代
扇廣作

大工頭
青柳善作
大工小頭　一人
番手小頭　一人

鶴野銀山

右は御巡検使、鶴野銀山御見分も可被成候付、御泊り御宿之見分方被仰付置候間、昨四日御郡奉行下村ニ付、右之面々下村方御達被成下候は素り、乗馬荷馬差出方、其筋え夫々御差図可被成下候、以上

十月　御勘定奉行所

紙合羽

御巡検使ニ付、赤青紙合羽、人馬方渡并諸方渡共、都合五百程も御入用之内、別て人馬方渡多数と相見申候、寛政年、御巡検使之節は御伺申上、御行列ニ相加り候人夫、其外御見掛ニ相拘り候分計紙合羽着用、其余御荷物ニ付候人足等は、可成丈は茅藁之蓑ニて相済候様被仰付候と相見申候、当節如何可被仰付候哉、寛政年之通ニ御手当可被仰付候哉、左候得は合羽之御入用相減、斯ル御時勢御便用之御事と奉存候付、奉伺之候、申上候通被仰付候御事ニ御座候は、御郡奉行所え御達被下、右御用被召仕候郷夫、格別不見苦品用意罷登候様、御達被置被下度奉存候、尤紙合羽用意方も御座候間、早々御治定之御達をも被成下度奉願候

蓑

山駕篭

上使用山駕篭之儀、宝暦年は御自分駕篭ニて相済、延享年は此方御用意之駕篭ニ間々被召候共

相見申候得共、多分御持越之御駕篭ニて相済候儀共相見申候付、寛政年之節、別て御用意ニ及間敷と之儀御伺申上候処、一丁御用心ニ用意仕、持下候様被仰渡候処、御入用も無之哉ニ相見申候、此節如何可被仰付候哉、火急御用意難相届品之事故、三丁共用意可仕候哉、御駕篭注文方段々相遅れ候ては、御間筈之程も不安奉存候間、早々御治定御達被下度奉存候

右之趣奉伺之候、御賢慮之上、いつれとも御差図可被成下候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

大坂え注文

御巡検使ニ付、幕看板類、其外御入用多数之儀、何れ御出来ニ不相成候て難叶相見申候処、当年条、公木（木綿）悉皆銀変返ニ相成候ニ付ては、御有合之木綿至て纔ニて、大坂え注文可仕外無之、就夫御神事用天幕之内、間近く御取替之分在之を以、此節御造立之日吉丸・長盛丸帆用取替度、御船奉行所示談仕候処、右之品ニて可宜申聞候間、取遣候様仕度奉存候、尤天幕之儀、来年御神事分ニは、新公木到来を以相備候様可仕候間、此段御聞届被為置被下度奉希候、以上

天幕

酉十月　　御勘定奉行所

御付紙

申出之通可被取計候

入用之桶

御巡検使ニ付、府内田舎入用之桶類多数之儀有之、府内ニて入用之分、杉樽其筋ヨリ郷注文取計候分、凡百参拾〆と相成処、郷方ニも御巡検使ニついては、府内・田舎御宿々御普請請方之木代、其外口々納物等も有之、多数之杉樽納方甚ニして難渋、全数納方六ヶ敷相聞、最早日間も無之、段々延引いたし結立方不相成候ては、多数之桶類御間筈之処不安奉存候、一日も早々結立候様及差図度、就夫府内近辺え之御立山之内より、三尺廻り杉木八本程伐取り候得は、凡七八拾〆ニも相成可申哉ニ相聞候付、其余不足之分は郷方より相調候様、御郡奉行所役談可仕候間、先ツ八本丈手近御立山ヨリ伐取方被仰付、如何可有御座候哉、尤田舎入用之分は、右之外ニて御座候間、追て注文差出候節、納方六ヶ敷様子ニ御座候は、其節御伺申上候品も可有御座候、尚御賢慮次第奉存候、以上

結立

御立山

酉十月　　御勘定奉行所

〈頭注〉御付紙

申出之通、府内近辺御立山より伐取候様可被取計候

馬場筋通

此節御巡検使ニ付、府内御通駕之場所見分仕候趣左之通奉伺之候、早々御治定之御差図被仰出被下度奉希候

一、馬場筋通住居之面々、門其外構堀廻り堀淵等損し相見申候、不見苦様取繕方御触達被成下度奉存候事

自分掃除

但、自分々々構廻掃除方、勿論と奉存候事

黒門扉

御付紙

承届候、夫々触達ニ可及候

一、黒門扉は、御巡検使御逗留中、夜分は〆切候様可仕候哉、其外宴席門・御厩御門等も同様被仰付候哉、御差図可被成下候事

〆切

御付紙

黒門扉は、御逗留中暮六ツ時より〆切被仰付候、尤府内御在留之間、昼夜共ニ〆切ニ被仰付候

御米蔵

同

以下五ヶ条、申出之通被仰付候付、夫々可被致手当候、御米蔵前番所之儀は、切組ニして不見苦様可被取計候

一、御米蔵と松山卯右衛門前と逢駒寄出来候事

一、右駒寄席之内、御米蔵之方ニ寄御番之事

一、宮之内天神社之辺ニ番所之事

万松院

一、万松院□宮山えは山役数人被仰付、有組山ヨリ下り掛、御城内え行掛不申様被仰付度候事

一、梅本ヨリ天道山え入候場所見分之上、垣ニて仕切候事

植込之杉

平田宅磨

右五ヶ条、御屋形内御用心之為、寛政年は御取設被成候儀と相見申候、此節も右之通手当仕可申候哉

一、餅石渕広道之儀、近年手寄住居之御家中、拝借地ニ被仰付候ニ付ては、何れも杉木を植込構出来居候、以前無之事故、此節何れも道通之分は、御取揚可被成候哉、御通行ニ不差支丈之道幅と御座候事故、植込之杉之分成丈詰候て、只今之侭拝借可被仰付置候哉

御付紙

植込之杉木詰付、見掛能取計候は、只今之侭拝借可被仰付置候

一、餅石渕土橋ヨリ上ミ、平田宅磨前通迄いつれも道中樹木枝指掛居候て、御通行之障も相成可申相見申候間、道脇ニ在之候木は、御作事方より枝をおろし候様可仕候間、自分構内より出居候枝は、屋敷々々え伐除候様御達し被下、猶取除方等之儀は、御作事方ヨリ及示談候様可仕候間、応其意候様御達置被下度奉存候

御付紙

申出之通可被取計候、住居之面々えは、夫々可被相達置候

餅石渕

一、餅石渕之儀は、総て地行悪く御座候間、別て道祖神手前之橋辺ヨリ平田宅磨屋敷、外れ島迄凡百拾間程之間、格別荒候処、御手入不被成して難恨所ニ依り、至て道幅狭所も有之候付、成丈地行能く、道幅等も広まり候様仕度御座候、然処大分人夫不召仕候て相済間敷御座候間、其筋積書相達置申候間、追て取調御伺申上候様可仕と奉存候

御付紙

承届候

右之趣奉伺之候、御治定之御差図被仰出被下度奉希候、以上

酉九月　　御勘定奉行所

器物類

御巡検使ニ付、器物類、其外御不足之分御借上之儀ニ付、年行司ヨリ心付申出候書面被成御渡、披見仕候、書面ニ御座候通御貸上之面々、御用済之上入組可申哉之恐れも可在之哉ニ付、御本陣三所ニ品々差分方之儀、吟味仕候処、口々之儀ニて蜜細ニ只今ヨリ申上兼候得共、紙末凡差分仕候通ニて、御借上方心配仕候様、御懇達被下如何可在御座候哉、猶御賢慮次第可然御達被下度奉希候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

料紙箱

絹夜具

黒椀

此御伺、町奉行役談ニ及候様御達ニ相成候ニ付、町奉行え手紙を以申遣置候処、夫々相達候段、十月十九日申来ル

一、料紙箱　参つ

一、縁金黒塗重箱　参組

一、絹夜具　壱通　上吏用

一、同　但、上使御用人衆着用之品故、人数次第、尤四拾壱通御借上之内、人数丈御宿三軒ニ差廻、其余別段御借上之事

一、木綿夜具百通　但、御用人衆迄絹夜具と見、其余御本陣ヨリ御下宿迄人数ニヨリ、宿々え差廻候事

一、宗和膳　百弐拾膳

内　六拾膳　御次用　御宿三軒分

内　六拾膳　御下宿并御船附用

一、天秤　壱丁　売物方用

一、黒椀　百弐拾人前

内　六拾人前　御本陣三軒　御次用

内　六拾人前　御下宿御船附宿御入用

一、黒塗飯次　拾参
同　黒塗飯次拾弐　府内御次用
同　同十八　御台所用
同　同十二　御船附宿用
右之通御入用之内、弐拾九は上御在合之分ニ候間、御借上之分勝手宜方え御貸上仕候ハヽ、其余を上御在合を以御差廻被成候ニして

一、木具　参束　上之分　御宿三軒分
一、同　八束
但、府内御次用且御船宿下宿共ニ九組　内参組　切溜ニても
内　参組　府内上之分
同　参組　右御宿三軒之分
同　参組　御船付宿用

一、丸盆　四束
内　壱束　七曲り御茶屋用
同　参束　府内御下宿御船附宿用

一、錫鉢　参枚　御宿参軒御入用

一、塗片木　九束
内　参束　府内上之分
同　参束　同断通用
同　壱束半　御船附宿用

一、錫久利　拾弐
内　六ツ　府内御次用
同　六ツ　御下宿并御船付宿用

一、湯戸　参拾九
内　九ツ　府内御次用
同　拾八　台所用
同　拾弐　御下宿并御船附宿用

一、吸物椀　九束
内　参束　府内御次用上品ニして
内　六束　御下宿并御船附用

一、料理庖丁　参通　御宿三軒用
但、寛政年は町料理人ヨリ持出相勤相勤候と相見候事

一、菓子盆　参拾枚　御宿参軒用

一、天目　六束　御下宿御船附宿用
一、腰高　壱束
一、鱠皿　拾壱束
一、小皿　拾六束
一、料紙箱　参ツ
一、絹夜具　委細口々在之候事
一、宗和膳は多数御入用故、御借上相望候丈御借上之儀、心配方御懇達可被成下候事
一、黒塗湯戸　七拾
一、引盆　百八拾六枚
一、錫束々　九ツ
一、鉄間鍋　四拾九
内　弐拾五　府内用
同　弐拾四　錫久利代　府内用
一、日光膳　七枚
但、木具足付九盆折敷ニても宜
一、硯蓋　四拾五枚
一、煙器　五百四拾本

多葉粉盆

紙合羽

蓑

百姓持出

一、春慶多葉粉盆　百五拾通

右別段御借上之分

一、猪口　拾参束

内　壱束　府内御三人様分

同　六束　同断　御次

同　六束　御下宿并御船附宿

御巡検使ニ付、人馬方其外諸方渡人夫着用紙合羽之儀、寛政年之節御行列外は蓑ニて相済候と留書ニ相見候付、御伺申上候処、蓑ニて可相済口々吟味申上候様御達之趣、奉得其意候、夫ニ付当節はいまた人馬方御役々も、不被仰付候事故、此御役所ニて密細ニ人配相分不申候得共、上使御三方様御行列ニ付候人数、宝暦年は百八十人、此分紙合羽着用ニして、其余之人夫蓑ニ相成可然と之儀、寛政年人馬方より申来居候を以、手当仕候事と相見申候、此節も其余之人夫は蓑ニて相済候様可被仰付候哉、御用人衆駕籠舁夫四十二人分之蓑は、御作事方ニて用意相渡、其余は悉皆百姓持出候蓑笠ニて相済候と、寛政年記録相見申候間、当節も右之通手当可被仰付哉、申上候通被仰付候事ニ御座候は、其段御郡奉行所え御差図可被成下候、尚御賢慮之上、早々御差図被仰出可被成下候、以上

十月　　御勘定奉行所

紙合羽着用

蓑笠

御茶道方

御借上

御付紙

承届候、寛政年も御行列ニ附候人夫、紙合羽着用、其余は蓑ニて相済たると相聞候付、其通手当可被致候、御用人駕籠舁夫着用之蓑は作事方用意、其外ハ百姓自分所持之蓑笠持出候様被仰付候、御用人之人数并御行列ニ附候人夫之高も不相知事故、紙合羽・蓑笠共不足ニ無之様用意可在之候、且又百姓持出之蓑笠、村所ヨリ附用之荷馬差添候様被仰付、荷馬口付共飯米御渡被下候、以上

十月廿三日　　幾度八郎左衛門
　　田島左近右衛門

吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
高崎翼殿

可被其意、百姓所持之蓑笠持出候様可被相達候

御巡検使ニ付、浜崎ヨリ台子参通送越方之儀申越候処、御茶道方御在合之分は、此元御取遣之御積ニて、大坂え修補として差登居候付、器物方御在合吟味仕候処、損不揃之品も御座候間、左之通市中持合之分御借上之儀御達被下、如何可在御座候哉、尤彼地え御借上等之儀申越候時迚も用意可難相届哉と奉存候間、此段奉伺之候、以上

十月　　御勘定奉行所

一、茶釜　参
一、風呂　壱通
年行司書面被成御渡、披見仕候

水風呂

御巡検使御船附宿、水風呂之儀、壱軒ニ壱ツツ、も、先格之通手筋え用意方相達置申候間、其段御達置被下度奉存候

日雇

一、御巡検使御入船之節、漕船弐拾四艘、五人乗ニして都合百弐拾人、町ヨリ差出、町用銀之内より賃銀御渡被下候先格ニて、雇入方心配之趣ニ相見、然上頭漕六艘五人乗ニして参拾人、且又御入船田舎御下之節、人数御不足之節、会所ヨリ日雇相雇差出候分共、雇付不相届御断之儀ニ相見申候処、何れも此御役所差配之儀と相見不申候間、筋々御吟味之上、御賢慮之御差図被下度奉存候

田舎売物役

一、田舎売物役、茶屋亭主下人之儀は自分雇ニて、賃銀、上より御渡被下置候儀と相見候処、雇付被相届、御郡中ヨリニても御手当被下方之儀と相見、是又御郡奉行所御吟味之上、何れ共御達被下度奉存候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

夜具

絹夜具

木綿夜具

筑前

南岳院

御巡検使御用人衆以下、侍分之夜具、寛政年ニハ絹夜具用意致し在之候処、御着之上、俄ニ木綿夜具ニ仕替候様被仰渡候と留書ニ相見、多数之儀ニて手当方相届兼、絹・木綿打混為相済儀と相見候得共、当節は絹・木綿両様共ニ手当いたし置候上は無御座候得共、両段之御用意と申候ては、大造ニも相成申候得は、絹夜具而已之御手当ニ取計置、如何可在御座候哉、夫共両様之御手当可被仰付候哉、何れ共御賢慮之上、被仰出可被成下候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

御付紙

侍分、絹夜具致用意可被置候、若木綿夜具と申注文ニ相成候時、火急仕替難手届事情相断、夫共ニ聞入無之節は、木綿夜具取交候様ニ成共、不致手当してハ可被難叶、猶筑前にて之御様子聞糺之上、追て相達候品も可有之候

十月十八日

南岳院御本陣之表門南手ニ、先御船手久我右衛門と申者家を立込居、門前甚手狭ニ在之、右家解払方之儀、先日御伺申上置候処、此節別紙之通御作事方え願出候付、御作事方添書共差上之、奉入披見候、頃日御作事方役々、且御駕籠組之者罷出見分為仕候処、西手へ三尺、南手え四尺引直候得は、殿様御出被遊候ても、御駕籠之振回り等余差支間敷由ニ相聞、御見掛も宜相成り

可申候間、久我右衛門申出之通、自分ニて引直候様被仰付、御作事方え願出候木品は御渡被下、如何可有御座候哉、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

御付紙

書面之通、久我右衛門居宅引直候様可被相達候、且木品之儀も申出之通御渡被下候付、可被得其意候

十月十九日

久我右衛門

平田主計

銀五百匁余

（天保八年酉）

平田主計、願書被成御渡披見仕候処、此節御巡検使御宿ニ御借上ニ相成候ては、引移先上ヨリ御用意被成下候哉、又は自分ニて移先致用意候哉、両段之処被仰付被下候様と之願面ニ相見、就夫段々府内御宿御普請ニも取掛居、最早主計住居不日取掛候積ニ御座候得は、何れ之道引移先之儀、上より御手当も可被下儀ニ付、此節は上より銀五百弐拾五匁御渡被下、自分ニて相応之家居借調、家移等始終相済、御用済之上、本宅え又々引移候節、難渋体願出無之候様御達被置被下、如何可在御座候哉、尤右之銀高御渡被下候御事ニ御座候ハヽ、追々申候通御不繰中之儀ニ付、半数現銭、半数公木札を以御渡被下度奉存候、尚御賢慮次第奉存候、以上

酉　　御勘定奉行所

中馬六疋
朝鮮俵
飼料
馬具
大坂注文

御巡検使ニ付、中馬六疋御用意ニ付、飼料方之儀御馬方ヨリ申出候書面被成御渡披見仕候、此御役所留書吟味仕候処、寛政年ニは中馬六疋、取分最前ニ馬方孫右衛門と申者、一日一疋九銭参匁、朝鮮俵弐俵充、口牽飼料共ニ相請持居、尤六疋之内、田舎御附廻之間は、五疋之分は口牽不差出、御郡奉行所ヨリ差出ニ相成候付、九銭弐匁弐分充、壱疋は口牽弐人差出候付、同参匁充ニして請持申出居候処、其後馬方市之助と申者府内ニては九銭弐匁五分充、田舎は参匁充、其余孫右衛門通ニして相請持候と相見申候ニ付、当節も上之飼料ニして御立被置ヨリも、賃銀雇ニ被仰付候方、御便用之儀と奉存候、就夫右雇賃銀、飼料共御渡被下方之儀は、兼て請負被仰付置、御巡検使御着之日ヨリ賃銀被下、如何可在御座候哉

一、上馬・中馬御用意方、寛政年以前は段々相減居候と留書ニは相見候付、頃日御伺申上置候処、上馬八疋、中馬六疋用意いたし置候様被仰出、奉得其意、馬具等大坂注文取計罷在、此節御馬方ヨリ被申上候書面ニては、此節之御巡検使、多数馬を被好候時は、馬具全く御在合無之、御用欠ニ相成候向御座候処、右申出之通、若馬を被好候時は、御不足ニも可在御座候得共、先規馬数追々相減相済居候事ニ御座候間、当節も右之御手当ニて可被宜哉と奉存候得共、万一も数疋被相望候時は、礑と御用欠ニ相成可申、此儀は如何共差極難申上、御賢慮次第之御儀と奉存候

右之趣奉伺之候、何れとも御賢慮次第被仰出可被下候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

〈頭注〉此伺被仰出委細在之

田代
浜崎
商人廣川理兵衛
総御入料

此節御巡検使ニ付、田代より申越候書状差上之、奉入御披見候、田代之儀は御休泊ニも相成間敷と之趣相見申候得は、格別御心遣之儀も有之間敷、然処浜崎之儀何れ御休泊之間難免之様子ニ付、田代ヨリ作事掛前川伴吾諸見分として差越、尚平山元右衛門え委談申越、此前寛政年之節は、御領分ニ不相成前之儀ニて、此節初て之儀ニ在之、素り先例等相考候処両庄屋且寺等ニて相済たると相聞候処、いつれも難御用立候付、此節は新古之御役場取繕、商人廣川理兵衛宅御借上ニして、右三所之修理積取計絵図、積書等差越申候間差上申候、然処御役場御門内手狭ニ有之段、番所厩仮繋等取設候場所も無之候付、隣家清左衛門家屋敷六銭七百八拾匁ニて御買入被成度、外ニ弐百四拾匁御合力被成下候ハヽ、組内より助合いたし呉可申段申出候分共ニは、都合壱貫弐拾匁ニ相成、然上年々米壱俵程充、御年貢之減と相成不容易御事とは奉存候得共、此節之御取設手狭ニて不相届ものと相見申候得共、申越候通可被仰付候哉、状面之通被仰付候御事ニ御座候ハヽ、屋敷代は先々之通郡用銀より貸ニして、御合力之分は、揚切候様被仰付度奉存候、尤総御入料銀拾弐貫匁程之分、御仕向方之儀申越候処、差当何を以御仕合可被成御銀筋も無之事故、此段は追て御伺申上候様可仕と奉存候、段々御普請向相後候ては、御間筈之程不安奉存候間、早々御治定之御差図被仰越被下度、御普請向は素り諸御取設ニ至り、平山元右衛門御用便宜、御間筈能引請心配仕候様、御達被下度奉存候、此段奉伺之候、以上

九月　　御勘定奉行所

木挽

御巡検使ニ付、府内御普請向口々多端之儀ニ御座候処、板類之御有合至て少く、木挽雇入方御作事方ニて心配仕候と相聞候処、木挽仕候者少く、雇入方難相届相聞候間、郷木挽一日四人充、五日代ニして、十月一盃迄被召仕候ハヽ、大概相済可申哉ニ奉存候間、御郡奉行所へ御差図早々罷登候様、御達被下度奉希候、以上

九月　　御勘定奉行所

日吉丸・長盛丸

此節御巡検使ニ付、日吉丸・長盛丸弐艘新規造立被仰付候付、御船奉行所ニて総御入料積立之書面被成御渡、披見仕候処、大造之御入料ニて斯ル御中不安奉存候得共、御造立ニ不相成して難叶御事と奉存候得は、早々御取掛被仰付度奉存候、就夫旅大工雇下之儀ニ付、人数減少方御船奉行所示談仕見候得共、八人は何分御雇付ニ不相成して、御間筈能御成就之程も難計相聞申候間、申出之通雇下可被仰付候哉、申出之通被仰付候御事ニ御座候得は、大工雇付として是迄追々下代壱人被召仕来候付、此節も召仕候様可仕候哉、何れ共早々御治定之御差図被仰出被下度奉存候、以上

旅大工

九月　　御勘定奉行所

佐賀村給人

佐賀村給人、平田十平願書御郡奉行所添書共被成御渡、披見仕候、十平願出之趣心得方、尤之儀ニ相見申候得共、其筋吟味仕候処、圓通寺御普請ニ相成、御借上被成候方御便用ニも相見、

圓通寺

殊圓通寺之儀は、上ヨリ之御普請場ニて、頓て訳官をも被成御招候得は、御入用之儀ニ付、何れ御普請不被成候て難叶、此節御取繕被置候ハヽ、其方御便用と奉存候、猶御賢慮次第奉存候、以上

九月　　御勘定奉行所

田舎御普請

口上手控

御巡検使田舎御普請として、此節被差下候大工番手之者、田舎ニて病気等差起、御普請場え不罷出時は、御宛行如何可被仰付候哉、御役所旧記色々、先例吟味仕候得共、右体之例相見兼候間、御伺申上候、いつれとも御評議之上、御差図被下度奉希候、以上

十月四日　　御作事方

御勘定奉行所

大工番手

此役所付紙

大工番手之者、田舎ニて病気等之節は、一日米五合ツヽ之飯米而已被相渡、急ニ快方之期不相見候ハヽ、村継を以早々上府可被取計候

御人柄

御巡検使御下向、御取設方之儀ニ付、御郡奉行所ヨリ被差出候御伺書壱冊被成御渡、披見仕、ケ条書を以左ニ申上げ候、

一、御巡検使御人柄相極、御用人名前とも申来候上は、為御知ニ相成候儀之由、此御役所えも何れも被仰達候儀と相見申候

御付紙

先規之通、追て可相達候

木銭旅籠

一、同断、木銭旅籠両段之内、御取賄方之儀、御手当方隣国御問合ニ相成候儀と相見、寛政年ニは、御郡奉行所被申上候通、御巡検使ヨリ御挨拶之御旨ニ被応候儀と相見申候

御付紙

吟味之上、追て可相達候

諸色直段

一、御巡検使ニ付、諸色直段之極ニ相成候儀は、此御役所留書ニは大坂・筑前問合候上、直段御定被成候儀と相見申候

金銭相場

一、右同断、金銭相場、是又同様御問合之上、御極被成候

大坂問合

御付紙

二ヶ条、大坂問合候様可被取計候

人足賃

一、右同断、田舎御往還ニ付、駄賃、軽尻人足賃、木賃等追て取調可申上候

御付紙

吟味之上、可被伺出候

御召船

一、右同断、佐須奈浦え御見分之節、御乗船御用意方之儀、御船奉行所御吟味之上、御治定可被成下、且又御召船敷込用之畳、差釣水夫着用看板等之員数、御船奉行所御吟味之上、員数相極候ハヽ、早々御船奉行所より役談ニ相成候様御達可被下候

御付紙

畳差釣看板類之員数、申談候様、御船奉行所え相達置候

綱浦在番

一、綱浦在番、御目付被成御引候後、彼村下知役ヨリ在番代勤被仰付置、寛政年ニも御郡奉行所ヨリ御伺ニ相成候儀も有之と相見候処、御書付御渡方之儀は追て御沙汰可有之段被仰出候段、此御役所留書ニ相見、押詰御目付被差下置候儀ニ可有之候哉、別段御府内ヨリ被差下候儀ニ御座候ハヽ、其頃合ニ至り御浦目付壱人被差下置候ハヽ、浦方御締相兼、御用便ニも可相成哉、併在番所之儀は訳も違候意味合も可有御座儀ニ付、何れも御賢慮次第奉存候

御付紙

先格之通被仰付筈ニ候

足軽着用之羽織

一、御郡奉行所足軽着用之羽織三ツ、木綿股引三ツ用意方之儀、内納銀より御郡奉行所ニて用意ニ相成儀ニ御座候得共、直納ニ相成候故、寛政年之通、上ヨリ御渡被下度段申上ニ相見、当年之儀と公役銀ニ至り、御召船御造作用木材多数御注文相納候付ては、納越代銀今以渡前相残居候様之儀ニ付、当節ハ御出来御渡被下度御事と奉存候

御付紙

可為書面之通候

売用薪

一、御巡検使御召船并御附船、売用薪用意方之儀、御郡奉行所申上之通、久田隣村え入札被仰付、先格之通久田御船屋え立、御船番より見かしめ被仰付、其趣御船奉行所えも御達被下置度奉存候

煙草

一、右同断、煙草之儀御郡奉行所御伺書之通、御備ニ相成候儀と相見申候、先格之通御用意被仰達被下度、奉存候

御付紙

二ヶ条書面之通、筋々え相達置候

御肴御用意

一、右同断、御肴御用意方之儀、御郡奉行所伺書之通、寛政年ニは御手漕船之儀被相止、曲り海人船、且ツ佐野屋正左衛門より差出候肴御受用ニ相成、正左衛門えは追て銀弐枚被成下、肴代不被成下置様相見候得共、此節は如何可被仰付候哉、其比よりは時代之転変、肴物御受用被成、銀弐枚被成下而已ニて可相済哉、且又漕船之儀も壱艘御用意不被成置候ては、時節柄万一暴風之節、肴御用意相成間敷候得は、前広生洲ニても可被仰付置、如何可有御座哉、此段は尚吟味仕、追て奉伺候様可仕候

人馬方木札

手洗類

御付紙

承届候、追て可被伺出候

一、人馬方木札之儀は、御作事方ニて用意相渡候儀と相見候付、此節も其手配り相心得出来方手当罷在申候

一、御巡検使久田村御繋船中、御揚陸之節為御備手洗類、延命寺え御備ニ相成候分、此節は長杢之進宅御借上被仰付置候儀ニ付、同所え相備候様被仰付被下度奉存候

御付紙

二ヶ条可為書面之通候

小隼御用意

一、上使仁位浜ヨリ樽之浜え御渡之節、小隼御用意方之儀、其外御役々乗船共御先格之通、御船奉行所被申談御用意ニ相成候様、被仰渡被下度奉存候、桐油類用意方之儀、是又御船奉行所請前之儀ニ付、早々取調御用意被仰付度奉存候

御付紙

諸用意方、筋々え相達置候

郷夫賃銀

一、御駕篭舁被召仕候郷夫賃銀之儀、御郡奉行所伺書之通、御先格と相見、右伺書之通被仰付
如何可有御座哉

大船越堀切

一、御巡検使ニ付、大船越堀切之儀、御郡奉行所申出之通材木橋ニ出来被仰付、上ヨリ人夫飯
米等御渡被下度奉存候

御付紙

二ヶ条書面之通可被心得候

大船越
材木橋

一、御巡検使大船越御通行ニ付、同所堀切之所、以前は船橋掛り相済居候儀と相見、宝暦年土
橋御出来ニ相成、寛政年は御立山竹木材も多く、郷役人中心付申出ニ依、材木橋掛り、御下
向迄之間、諸船為通用、中を取外し被出来置候義と相見申候得共、近年は木材も寡く相聞候
得共、御郡奉行所伺書ニは其段不相見儀ニ付、如何可被仰付候哉、最早御下向御用意方、田
舎向御普請等、未夕取掛ニも不相成、甚以御取設方諸般差掛居候儀ニ付、以前之通、此節は

船橋

船橋ニ被仰付如何可在御座候哉、此段は当御郡奉行所御吟味之上、何れとも御治定被成下度
奉存候

右之趣、宜御聞得被下度奉希候、以上

酉九月　　御勘定奉行所

南岳院

銀四百五拾匁

南岳院願書被成御渡、披見仕候、此節御巡検使ニ付、居宅御借上ニ相成候付、変宅先御差図被下候様と之書面ニ御座候処、差当御移可被下場所も無之候事故、平田主計え御渡被下候候釣合を以、銀四百五拾匁御渡被下、右を以て稲荷上下連宮、其外両度之家移料共、悉皆相済候様被仰付度、尤当時之繰合ニては、現銭之御渡方不被相届ニ付、半数現銭、半数公木を以て御渡可被下段をも御達被下度、猶御賢慮次第奉存候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

道筋荒

此節御巡検使ニ付、砥石渕平田宅磨前通ヨリ広道土橋辺迄之間、道普請之儀、御作事方差配之儀ニ相見、頃日見分仕候処、田舎通行之場所ニて、至て道筋荒居、大分御手入無之候ては難叶相見申候、夫ニ付人夫積、御作事方より申出候を以は、百六拾人も不被召仕候ては、相済間敷趣ニ相聞、就夫郷夫被召仕方も繁々有之中ニは御座候得共、右之人夫日数十日之割合、当年中御郡奉行所繰合を以、御作事方え被相渡候様御差図被下度、猶御賢慮之上、可然御差図被下度奉希候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

銀山御見分

〈頭注〉御付紙

書面之趣見届候、銀山御見分之有無相極候上、出来之儀ハ可及差図候、以上

煮売・菓子

十月廿六日

御巡検使ニ付、田舎御茶屋々々之儀、宝暦年は煮売等被仰付候と相見申候処、寛政年は上使御振合も御座候て、煮売は被相止、湯茶并飴類之菓子、其外餅等売物ニ出し、草りわらし等段々送りニ仕候様被仰付候と相見申候、此節煮売之儀如何可被仰付候哉、煎売被仰付候得は、早々御用達方も御座候間、何れ共早々御差図被仰出被下度奉存候

一、仁位渡、御船中ニて御菓子重被進候先格と相見申候処、寛政年被相止候段、被仰付候と相見申候、此節如何可被被仰付候哉

右二ヶ条之趣、宜御差図可被成下候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

御付紙

書面之趣承届候、二ヶ条共御下向之上使御心得方ニ出候儀ニ付、寛政年之形ニも差極難相達置、依之敏ニ江戸表え申越置候品も有之候間、追て可及差図候間、其節ニ至り御不都合ニ不相成様可被心得置候

十月廿五日

佐須奈

御普請

御巡検使ニ付、田舎宿々御普請之儀、頃日御伺申上、佐須奈御関所え宛一組被差下、今程専ら御普請取掛罷在候段申越候間、佐須奈村成就之上ハ、段々村々御普請取掛可申と奉存候処、いまだ一ヶ所も成就ニ不至、段々時月も差迫、其上寒気之時節ニも至り候事故、今一組来月初旬ニも被差下、下モヨリ取掛候様被仰付候ハヽ、御成就も尖ニ可有之、御安心之御事と奉存、御作事方ヨリも別紙之通申出候付、差上之申候、尤御作事方書面之趣ニては、別段御出方ニも相成候段相見候得共、御普請御成就速ニ有之候得は、各別御出方増と申ニも無之奉存候間、此段奉伺之候、御賢慮之御差図奉願候、以上

十月廿四日　　御勘定奉行所

御付紙

書面之趣、先達て被伺出候品ニヨリ委細相達置候通ニ候間、被差下候役々名前可被伺出候

十月廿六日　　御作事掛　古川武左衛門

御付紙

承届、手筋を以相達候　　御作事手代　扇廣作

田舎御宿

大工小頭

並大工

本番手

右は御巡検使ニ付、田舎御宿々御普請として可被差下候哉、尤武左衛門儀は府内御普請等之取掛ニ相成居、いまだ皆成就不至、口々之御普請万端体認之人ニて御座候得は、田舎御普請成就迄被差置候ては、御作事方役々被差下、跡人少ニも相成、多端之御普請難行届奉存候、此節は御普請向太概手配仕、御安心ニ相成候を見分いたし、時宜ニ応上府いたし候筈ニ御座候

大工小頭

忠右衛門

御付紙

大工小頭以下夫々可被申付候

並大工

拾弐人

本番手

藤次郎

当時番手

弐人

右同断ニ付、可被差下候哉

右之趣奉伺之候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

御駕籠夫
参拾人

稽古

上使御駕籠夫、参拾人御手当被成候内、拾五人は郷夫御手当ニ相成候事と相見候付、御郡奉行所ニて其手当可在之、同拾五人は御作事方より差出候事ニ相見、寛政年は当時番手被召仕相済候と相見申候処、御時勢ニ付、当時番手之人数相減候上、近来之当時番手ニては御駕籠夫ニ可召仕丈之者も無之候付、右之拾五人雇入方心配仕罷有候得共、今以壱人も相雇出し得不申、其上只今より段々稽古いたし候事と相見候処、雇付方相後候ては、稽古之間も無之、此先雇出し可相届見込も無之候付ては、御郡奉行所請持之拾五人外、御作事方差配之拾五人は、郷夫を以て被召仕被下候様、申上度評議仕候得共、御郡中之儀御巡検使ニ付ては、繁々被召仕候事と奉存候付、可成丈は於府内雇出し度、其筋も折角心配仕罷有候得共、相対ニては今以雇付得不申候得は、市中えも御手筋を以御吟味方御達し被下置、相望候向も在之候ハヽ、当時番手御扶持を以可被召抱段被仰達被下候て如何可有御座候哉、此段奉伺之候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

詰所

御米蔵

御巡検使ニ付、人馬方御役々被仰付候、就夫詰所之儀、寛政年は最初御改所ニ出張有之、其後恵美須崎二番、三番御米蔵ニ相詰候様被仰付、諸品共入置、尤二番御蔵之内を筵ニて仕切、上使御荷物をも入置候事と相見候、此節詰所之儀如何可被仰付候哉、浜一番、二番御米蔵当時御入用も無之候付、当節も右之二ヶ所を人馬方詰所ニ御手当被仰付、如何可有御座候哉、いつれとも御差図被仰出被下度奉存候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

人馬方詰所

御付紙

人馬方詰所之儀、先々之形も有之、御改所当時不差支場所ニ候得共、只今ニては手遠ニ相成り居、此節は小船番所え出張取調いたし、御巡検使御入船時分、申出之場所え引移候様被仰付候ても、差支之儀は無之哉、遂吟味可被申聞候

十一月廿七日

屏風用意

茶席

御巡検使ニ付、諸用意物之内、寛政年ニは府内御本陣用と相見、台子先キ屏風壱双半用意仕候と相見申候ニ付、当節も其通相心得、注文方等其筋え及問合候処、右之屏風は御飾付ニ相用不申品と相聞、茶席ニては相用候儀も有之候得共、御用意無之候ても、強て作法ニ相欠候と申訳も在之間敷段、御茶屋方ヨリ申出候を以は、此節新ニ御用意ニおよひ間布哉ニ奉存候間、此段奉伺之候、尚御賢慮次第奉存候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

御付紙

申出之通、不及用意候

十一月廿六日

租米之儀

朝鮮入方

寄夫飯米

当秋穀、八郷より相納候租米之儀、御貢米船追々入津ニ相成候ニ付、御米繰ニ依、佐須・豆酘両郷之外、六郷上納租米之分は、巡検上吏御廻郷之節、寄夫飯米ニ当テ、其郷々え相備置候は第一運送方等相浮ミ、百姓共御厭被成下、且は御用便之儀ニ御座候間、六郷租米之儀は、御備置被下候様と之趣ニ相見候、然処追々御伺申上置候通之御米繰之訳ニ有之候ニ付ては、右急納方之儀、御郡奉行所え追々及役談居候訳ニて、既ニ当年之儀は、是迄御買米其外御買上麦、八郷御借上等を以御扶助米、其外口々之飯米ニ麦を差交筈ニ御渡続ニ相成居、不遠御下向御迎御船々仕出、飯米御米入り見へ来り、来春は御巡検使、引続訳官をも御招被成候得は、平年ヨリは御米之御入用莫太之儀ニ有之、其上朝鮮入送方、昨今彼地之模様ニては、此先果散々敷入送之期相見不申、旁来年之儀は、何分手当聢と相立不申しては難叶、夫飯米之儀は、何れ之道御渡不被下して不相叶儀故、麦を以追々御渡をも取計置申候、御巡検使ニ付、寄夫飯米は先規凡白米三百弐拾俵程、御泊村々相備置候事と留書ニ相見申候得は、専ら其心組ニ罷在申候ニ付、右租米之儀は、兼て御積前之内ニ御座候間、何分常例之通無滞早々上納方、猶又諭達ニ至候様御達可被成下候、尤御巡検吏ニ付、寄夫飯米之儀は前ニ申上候通、御都合能相備候心組ニ御座候、猶何れ共御賢慮之上、可然被仰出可被成下候、以上

酉十月　　御勘定奉行所

御借上

上使為御下宿、御借上被仰付置候六十人松井文作居宅、其外佐護・豆酘両郷草使家御借上被仰付置候付、文作・儀右衛門、右住居西手ニ有之候土蔵之儀、西手通ニ戸前有之候付、右西手戸前通用ニして、住居被仰付候ハヽ、新タニ移先用意不仕候て相済、在難可奉存候、両郷草使之儀は、山口屋敷内ニ御取設ニ相成居候、中官家御貸渡被下候上ニは御座候得共、引移候付ては、用費も掛候、其上平田主計、且南岳院えも家移料御見込御渡被下置候儀ニ付、御見計を以文作、両草使えは家移料として銀百五拾匁ツヽ、御手当被下如何可有御座候哉、尚何れとも御賢慮次第奉存候、以上

家移料

酉十一月　　御勘定奉行所

御付紙

書面之通、六十人松井文作、佐護・豆酘両草使え家移料として銀百五拾匁ツヽ、御渡被下候間、夫々可被相達候、以上

十一月六日　　幾度八郎左衛門
　　田嶋左近右衛門

仁位格兵衛殿
御勘定奉行所
御郡奉行所

桶類

御立山

御巡検使ニ付、府内、田舎入用之桶類、結立用之杉樽多数之儀ニ付、昨今郷方夫仕も繁く候得は、府内御立山之内ヨリ参尺廻程之杉木八本、御伐取りニ相成候ハヽ、凡七八十〆ニも可相成、右丈郷注文相浮候様ニと之趣、御郡奉行所役談ニ付、此程御伺申上候訳ニヨリ、府内近辺御立山之内ヨリ、三尺廻杉木八本伐取、其筋ニて伐短〆〆ニいたし候処、八本ニて漸拾四〆と相成、多数之杉樽、中々難行届候、就夫御立山之杉、追々多数御伐取ニ相成候儀ニは御座候得共、不被得止事儀故、今拾五本丈三尺廻之分、先つ伐取方被仰付被下候ハヽ、其上ニて猶御伺申上候品も可在御座候、何れ共御賢慮次第奉存候、以上

酉十一月　　御勘定奉行所

三尺廻杉

御付紙

申出之通、三尺廻之杉木、拾五本伐取候様可被取計候

十一月八日

客館

見苦敷場所

御巡検使御下向ニ付、客館取調置候様被仰渡、奉得其意候、然処右御場所之儀、御行礼家取付、御廊下之処追々御解除ニ相成候跡、表張御見掛之御場所ニ無之候付ては、御解取相成候侭ニ付、品ニ依見苦敷場所も可在之哉ニ付ては、我々而已見分仕候付、難差極儀ニ付、各様は勿論、其筋之御役々立会見分被仰付、凡此位取繕置可然と申丈之仕様、御差極被成下、其趣を以取調候

様被仰付被下度奉伺之候、以上

酉十二月　藤正左衛門
吉村儀右衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

通船

御巡検使御揚陸以後、御逗留中御乗船え通船として、小使船弐艘、船改処え相備候先格と相見、寛政年ニも先規之通、五人乗ニして弐艘御備被成候段被仰渡置、此節は如何可被仰付候哉、此節も御備被成候ハヽ、其趣船奉行所え御達被下度奉存候、以上

酉十一月　藤正左衛門
吉村儀右衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

御付紙

寛政年は、船水夫とも用意方、其役所え相達し候事故、御船奉行申談、無御用欠様手当可被致候

十一月廿七日

駕籠舁夫

御手当

御行列人夫

御巡検使御下向ニ付、上使駕籠舁夫、都合参拾人御手当被成候内、拾五人は郷夫被召仕、残拾五人は前々ヨリ番手之内ニ召仕候義と相見申候処、当時ハ番手人少ニ有之、駕籠舁可召仕番手之者無之候付、町より相望候者有之間敷哉、御吟味方申上候処、市中吟味仕候得共、相望候者無之段、年行司ヨリ申出之書面被成御渡、披見仕候、右駕籠舁夫之儀は、何分御手当不被置候て不相済義ニ付、此上ハ御家中并寺社方ニ至り、家来々々番手扶持を以被召抱候儀、相望候者無之哉、又は駕籠舁相心得居候者は、御入用之節、相当賃銀可被成下候間、御作事方へ名前申出候様、御達被下度奉存候、其外当時御作事方召仕候人夫日雇変義ニ付、上使御着之日并御逗留中、人夫召仕多人数之儀候処、日雇難雇出義ニ付、是又御家中并寺社方家来々々、日雇ニ差出候様御達被下度奉存候、以上

酉十一月　　藤正左衛門
　　吉村義右衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

御巡検使御着岸御船揚之節、御行列人夫三十人余、御入用有之儀と相見へ、依之右人夫之儀、頭漕水夫之内、壱艘ニ付六人ツヽ、御手当方御達ニ相成、御船揚後は直ニ御荷物船揚之方へ罷出候様、将又御帰帆御行列之節は、郷夫可被召仕候段、被仰達置義と相見申候、此節も先規之

通御船奉行所・御郡奉行所え、右之趣御達被下置如何可在御座候哉、奉伺之候、以上

酉十一月　　藤正左衛門
　　吉村義右衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

木挽

御巡検使ニ付、御作事方え召仕候郷木挽之儀ニ付、先般御伺申上候訳ニヨリ、郷木挽四人ツヽ、日数三十日召仕候様被仰付置候処、郷方ニも御巡検使ニ付ては、人夫召仕方多端ニ有之、御郡奉行所談ニヨリ、三人ツヽ召仕候様相成居、然処右三人ニては、御用相達候丈木挽出来不申候段、作事方ヨリ別紙之通申出候付、今、日数三十日只今之通召仕方、其筋え御諭達被下度候奉存、何分宜御聞通被下置候様奉希候、以上

酉十一月　　御勘定奉行所

御渡物

御巡検使掛御役々御渡物之儀、当今別て之御逗迫中なから、前々ヨリ御役目ニ応し、滞米之内御渡被下来候処、寛政年之節は、御勝手向御行支之訳を以、御減縮御渡方ニ被仰付置、此節ハ弥増御逼迫之儀ニ付、寛政年御渡被下置候通、御渡被下如何可在御座候哉、寛政年被下置候口々、紙末ニ書載奉入御披見候、尚何れ共御賢慮次第被仰渡被下度奉存候、以上

酉十一月　　藤正左衛門
　　吉村儀右衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

御付紙
申出之通、此節も寛政年之形を以御渡被下候
十一月廿五日

一、白米拾五俵　　御附廻
　　御年寄中
一、同八俵　　同断
　　御郡奉行
一、米弐俵　　田舎下り人馬船下知役
　　御郡佐役
一、白米壱俵充　　御附廻り
　　御用達

白米
田舎下り
御用達

米
医師
外科
滞米

一、米参俵ツ、
一、同壱俵
一、同壱俵半
一、白米二俵ツ、
一、米壱俵半ツ、
一、白米半俵ツ、
一、半俵ツ、
一、同壱俵半ツ、
一、滞米壱俵ツ、

人馬下知役
同
医師
外科
御用　大目付　壱人
御船奉行　壱人
波戸御番所詰
御馬廻
同断
大小姓
打廻頭
添役とも
田舎御往還
御屋敷下堅メ
御使者
御船揚、且御上船之節御先払
大小姓　参人

道作り

一、同半俵ツ、　七曲り道作り下知人　三人
　道奉行増人共　四人
一、同弐斗弐升弐合弐勺弐才ツ、　打廻手代
一、滞米弐俵ツ、　御附廻
　案書役　壱人
　御祐筆　壱人
　御先廻り
　御作事頭　壱人

案書役
祐筆

一、同壱俵八升参合参勺才　御附廻り
　御作事手代　壱人
　与頭　壱人
一、同白米壱俵
　但し、上使御旅宿ニ殿様御出無之節之御使者相勤候人
一、同壱俵ツ、　上使御立退場
　御借上家主　参人
一、同壱俵八升参合参勺参才　御附廻り
　日帳付　壱人
　御勘定手代　壱人

日帳付

御郡手代

人馬方下知役手代　六人
御郡手代　参人
人馬船下知として、別段被差下候御郡奉行え被相付候
御郡手代　壱人
御賄掛　六人
縄船奉行　弐人
田舎旅籠賄下知　六人

馬医

馬医　壱人
仁位御渡り御用小隼御船頭　参人
御関所加番御横目頭　壱人
同大小姓御横目　壱人
綱浦在番所勤、奥御目付　壱人
田舎下り諸組之者下代

旅籠銭

一、滞白米四俵
一、同弐俵
一、同弐俵
一、滞米之内、五歩方渡
以上

御巡検使ニ付、田舎御附廻り御役々旅籠銭、壱日壱人銀壱匁五分、且組之者并下人えは、田舎於村々、売物方より壱日壱人米七合五勺、味噌参拾匁ツヽ、被成下、尤道中不仕節は、壱日一人

賃金

米五合充、味噌相添相渡候と相見、且町役之面々えは、紙末之通賃金被成下、附飯被成下候節は、壱人銀四分充、右賃銀之内ヨリ差引候様被仰付置、此節も先規之通被仰付度奉存候、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

酉十一月　　藤正左衛門
　　吉村儀右衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

町差人

尚以申上候、町差人之儀、多人数之被召仕ニ相成儀ニ付、此御役所書留ニ相見候、人夫之廉々左ニ書載仕置申候、尤町奉行所ニも記録可有之儀ニ付、差人之数等は手当方心組可有之段、勿論ニ御座候得共、年隔候取調之儀ニ付、品ニ依自然見落等有之、御入用之図ニ至り御手当薄時は、忽御用支ニ至候段、大切之儀は多筆申上候迄も無御座、尚又請前之口々吟味有之、何分御古格之通町請前之廉々は、町ニて御手当被相立候様被仰渡置、如何御座候哉、為念奉伺之置候、以上

平町人雇賃銀

一、六銭八分　　御巡検使ニ付、御役々え町より付人被成下候分、平町人雇賃銀壱日一人如斯、夜勤は半減ニして、別段四分充御増被下

但し、町差引役ヨリ押詰差引帳差出候を与頭方へ引合、右高ニ応し差人之人数吟味仕候上、賃銀御渡被下来、此節も先規之通被仰達置被下度奉存候

府内売物方

一、同壱匁五分　府内売物方え被相付候下代升取平町人、壱日壱人賃銀如斯

魚屋

一、同壱匁五分　田舎下魚屋・八百屋、壱日壱人賃銀如斯

但し、府内売物方え被相付候魚屋・八百屋えは、賃銀不被成下相済候上、御見合鳥目被成下候事

下売物役

一、六銭壱匁五分充　田舎下売物役、茶屋亭主、町六拾人壱日壱人旅籠銀如斯

一、同壱匁弐分充　右同断、下旅籠銀如此

府内売物役、町六拾人、賃銀不被成下相済候上、真綿代銀を以被成下候事

料理人

一、同弐匁充　田舎下料理人、壱日壱人賃銀如是

一、同壱匁六分充　同配膳板本之者、右同断、賃銀如斯

漁船

此節も御設不被置候ハ、、相済間敷、宝暦年迄は弐艘御用意ニ相見、寛政年ニは前条之通壱艘御設ニ相成候儀と相見、此節は如何可被仰付候哉、御治定被仰渡、請負之儀は町奉行所え御達ニ相成候時、右之通、当時相望候者無之儀と相聞申候得は、近年漁船曳下来候者一統申談、上吏御滞留日数ニは纔之義ニ付、寛政年之形を以少々御内貸之義は、願出候て御貸渡被下、其外

御厄介筋不申出候て、御用相勤候様御達被下度奉伺之候、以上

酉十二月　　藤正左衛門
　　吉村儀右衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

縄船

御付紙

内貸取計、受負相望候者在之候ハヽ、其通可被仰付候、左も無之候ハヽ、縄船弐艘手当方両役所申談、御弁利筋可被申出候、以上

十一月廿三日　　幾度八郎左衛門
　　田嶋左近右衛門

仁位格兵衛殿
御勘定奉行所

府内売物方

御巡検使ニ付、府内売物方え御徒士目付・御勘定手代被相附候儀と相見申候間、当節も可被相附奉存候、夫ニ付、以前は表御徒士中ヨリ壱人、目付役被仰付候御事と相見申候処、寛政年は、右両役ヨリ被相附候付、右表ヨリ被仰付置候人は被差免候様相見申候付、此節も右両役ニて御

田舎売物方

下目付

済可被成候哉

一、田舎売物方え前々ヨリ御徒士目付・下目付被相附候事と相見申候処、寛政年は御徒士目付は不被相付、下目付両人は村々壱人ツヽ、繰為替ニして被相附相済候と相見申候、売物方之儀専ら御料理用之品々持下、尤上使之附々被相調候品も候得共、格別之儀も無之相見申候付、当節も下目付而已壱人ツヽ可被相附候哉、尤御料理方之面々、心得ニより御入目も違候事と相見申候間、御料理方をも相兼、令見分候様被仰付被下候ハヽ、御用便ニ可相成儀と奉存候右之通奉伺之候、御賢慮之上、宜御差図可被成下候、以上

十一月　　藤正左衛門
　　吉村儀右衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

御付紙

両条、寛政年之通手筋えも相達置候

戌三月廿一日

縄船

魚問屋

湊海人船

網肴

御巡検使ニ付、以前ヨリ町屋請負縄船壱艘、且湊村海人曲り海人船共弐艘、御手網船壱艘、佐野屋正左衛門納之網肴、御手当被成候儀と相見申候処、寛政年は右之内御手網船壱艘、湊海人船壱艘被相減、縄船壱艘、曲り海人船壱艘、佐野屋正左衛門請持網肴ニて、府内え御用相済ミ、不足之節は手余縄船釣上之分、其時々之立直ニて御買上可被成段、魚問屋中え御達ニ至居候と相見申候、猶又田舎之儀は網船壱艘、曲り海人船御附廻り御用相勤候事と相見、依之、此節縄船は一段御伺申上候処、御付札を以弐艘手当方被仰達候趣奉畏候、右縄船弐艘之御手当ニ被仰付候ハ、宝暦年以前之御形と奉存、外ニ湊海人船壱艘、御手当ニ相成居候様相見申候処、右湊海人船被相省候は、寛政年之御形ニ候得は、此節湊海人船之儀は、如何可被仰付候哉、尤此節も佐野屋正左衛門受持之網肴、曲り海人船壱艘は寛政年之通相備候筈ニ御座候、猶何れ共差図被仰出被下度奉希候、以上

酉十一月　　藤正左衛門
　　吉村儀右衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

御付紙

承届候、佐野屋正左衛門請持之網肴、且曲り海人船壱艘被致手当候ハ、、縄船は壱艘致用意、不差支様可被取計候、尤湊海人船不及手当候、以上

十一月廿一日　　幾度八郎左衛門
　　田嶋左近右衛門

吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
仁位格兵衛殿　　可被得其意候
御郡奉行所

入用之箇物

御巡検使ニ付、御本陣并御下宿・御船附宿御入用之箇物類、上使在合御不足之品々御借上之儀、頃日被仰出候付、御借上方示談仕候儀左ニ申上候、御本陣三所御入用之箇物類、御在合御不足之分、御宿亭主中ヨリ御請持申上候、御用支ニ相成不申候様御請持申上候

一、御下宿　　松井好五郎
一、御船附宿　　平山源助
　　亀谷半蔵
　　崎野屋佐兵衛

器物

右御宿々御入用之器物類、右之銘々持合罷在候分、御用立候様相達、御請持申上候

一、御下宿　　佐護草吏
　　豆酘草吏

引盆
煙器

右は御入用之器物類、持合之分御用立候様内談仕候処、何れも持合罷有候品々故、御用立可申由ニ御座候、尤我々ヨリ示談は仕候得共、其筋違候事故、御手筋之御役所ヨリ御達被仰付候ハヽ、御請持可申上候

一、別段御借上之品

引盆
煙器　両品折角相調居申候、追可申上候

錫棗入　此品持合之者無御座候

右之通御座候間、器物類之儀は御用支ニ相成不申候、此段為可申上、如此御座候、以上

十一月　遠藤忠蔵
前川松兵衛

御町奉行所

御付紙

見届候、何れも持合之品御用立候段、奇特之次第候、草吏共へは御郡奉行所ヨリ申付候様相達置候、以上

十一月廿四日

縄船
諸色高直
御増銀
銀五百匁
大船越

御巡検使ニ付、縄船壱艘御手当方被仰出置、就夫魚問屋統領中願書、年行司添書とも被成御渡、披見仕候処、近年時体之転変ニ随、諸色高直ニ相成り、人夫雇賃銀ニ至り、夫ニ準高賃ニ相成候間、寛政年ニは銀五百匁拝借被仰付置候を、此節は九銭五百匁御合力被成下方、願出候と相見申候得共、漸々壱艘仕出方御達ニ至り候儀と申、御先規之銀高ニてハ、当時ニ及難渋仕候付、御増銀ニして御合力之儀申立、右を御取用被成下候時は、自余御巡検使ニ付候御役々、御渡者は勿論、総て右ニ拘候職人賃銀、人夫雇賃ニ至り願出候時は、何れも同様之主意ニ可相成、然時は未タ御手当も不相立、此中御手入可相成儀ニ付、先規を以銀五百匁御貸渡被下、余は漁船曳下候者、一統申談相償候様御諭達被成下度奉存候、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

酉十二月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

御勘定手代仮役　御作事方出張
　山内宇右衛門
御作事手代助勤
　圓嶋貞次

右は御巡検使ニ付、鶏知村御宿々、且大船越御番所為御普請可被差下候哉

大工小頭　壱人

大工　拾弐人
番手　弐人

右同断ニ付、可被差下哉
右之趣奉伺之候、以上

十二月　御勘定奉行所

猶以申上候、伺之通被仰付候御事ニ御座候ハヽ、御切手其外送り方等、其筋え御差図被下度奉希候、以上

台挑灯

御巡検吏ニ付、田舎ヨリ御上府之節、夜ニ入候得は、研石渕古川将監殿掛屋敷前、手甫籌弐丁左右ニ燈之、夫ヨリ御宿々御門前迄御通道筋え台挑灯、六拾張程を間配燈之候先格と相見申候処、宝暦年・寛政年共昼之内、御上府ニて御入用無之相見、尤寛政年は台挑灯は被相止、手甫籌弐丁而已手当仕居候と相見申候、此節手甫籌・台挑灯如何被仰付候哉、何れ共御差図被仰出被下度奉存伺之候、以上

手甫籌

酉十二月　吉村儀右衛門
藤正左衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

中村太玄宅

御付紙

手甫籌・台挑灯、先規之通可被致用意置候

十二月

御借上

御巡検使ニ付、中村太玄宅、此方御役々詰所ニ御借上ニ相成居候付、門内え先規供部屋三畳敷取建来候処、太玄方門内手狭ニ有之、可建組場所無之候付、不得止事、太玄宅向手ニ町屋台所廻り、七八畳敷御借上之儀、年行司方及談申候処、上ハ店五畳敷、下タ店土間四五畳敷御借上可申与之趣ニ相見申候間、右土間之分ニ腰掛出来候て、上ハ店、下タ店共御借上御済可被成候哉、御賢慮之御差図被下置候ハヽ、町奉行申談無御用欠手当仕度奉存候、此段奉伺之候、以上

酉十二月　　御勘定奉行所

供部屋

御付紙

新規供部屋不及用意候間、申出之通町家借上方、町奉行可被談候

十二月

風呂場・雪隠

御巡検使ニ付、田舎御宿々之儀、御普請取計罷在候、就夫上使用之風呂場・雪隠等は、新ニ取建候段勿論ニ御座候処、御止宿下宿共、侍分之雪隠は新ニ取計申候処、下之分は在来之雪隠取

掘立
風呂場

繕ニて可相済分は取繕、難相用損し所之分は、掘立ニ屋根壁共ニ苦ニて出来候様、此節御普請方役々ヨリ、村役人え示談仕置候と相聞申候、扨又風呂場之儀、侍以下之分は御宿々勝手廻りニ有之候竹縁ニ、腰壁出来可被相済哉、寛政年絵図面ニも別段ニ出来候儀相見不申候付、右ニて御済被成候ハヽ、右腰壁出来、且下雪隠取建ニ至り、御着自分(時)ニ相成り、御作事之手を以出来候様仕度奉存候、此段奉伺之候、以上

酉十二月　　藤正左衛門
　　吉村儀右衛門

田嶋左近右衛門様
幾度八郎左衛門様

御付紙

伺之通被相心得、大様麁略之儀無之様可被取計候、以上

十二月十八日　　幾度八郎左衛門
　　田嶋左近右衛門

吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
高崎翼殿　　可被得其意候

年行司書面
割増
御国役
御国力
鶴野銀山

年行司書面被成御渡、披見仕候、御巡見使ニ付、田舎下り六十人平町人旅籠、且賃銀之儀、寛政年之節とは時代之違も在之、以前之被成下ニては難儀可仕候間、割増被仰付被下候様と之書面ニ相見、然処御巡検吏ニ付旅籠、且賃銀等被成下之儀は、追年ニは時代之違有之段見張居候儀なから、何ツ之年も年古キ御定通ニて相済来候儀と相見、上下共御国役々相心得候処ヨリは、御旧記通を以万端御取計ニ至り候儀ニ付、時代之転変等之申立、御取用被成下候ハヽ、自余御渡方一体ニ御増渡可被仰付御腹無御座候ては、忽自余御手入相生可申、御手当方之儀は追々申上置候通、今以御手不付此場ニ候得共、右御用向之儀御国力を被尽候て、御取計在之居候儀候得は、軽輩ニ至り、不足之分は自分ニ相償候ハ、御国恩を忘却不仕為ニて、諸御公役筋相勤可申儀と奉存候得は、難渋体願立候迚、御取用難被下儀と評議仕候、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

酉十二月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

御巡検吏之儀、此節は鶴野銀山え御越可被成も難相計との御事ニ付、樫根・下原両村え御止宿ニ相成候ても宜敷様、御本陣・下宿共見分相済、御普請入料等其筋ニて積立ニ相成候内、六郷之釣合ニて、御加勢筋相届候丈出精仕候様相達置申候処、奉役初村久兵衛より別紙之通申登、御加勢帳をも差出候付差上之、掛御目申候、右ヨリ上之儀は、得相届不申儀無相違奉存候間、

其段可然御聞得之上、何れ共御差図被仰出被下度奉存候、此段為可申上如此御座候、以上

十二月廿日　　御郡奉行所

田嶋左近右衛門様

幾度八郎左衛門様

銀山方

上使銀山方御巡検ニ付、樫根・下原両村え御止宿被成候時、御宿々御普請御入料之内、御宿家主之銘々え、当郷中ヨリ御加勢申上候口々、左之通ニ御座候

壱番様

同　壱番様御本陣

御入料銀九百六匁七分参厘六毛

樫根村

内四百五拾匁　　樫根村給人一宮藤馬ヨリ御加勢申上候

同　下宿　　同村惣右衛門方

御入料銀弐百九拾六匁七分弐厘弐毛

佐須郷

内七拾五匁　　佐須郷中ヨリ御加勢申上候

同　下宿

同　弐百参拾壱匁八分九厘八毛

内七拾五匁　　樫根村法者源右衛門ヨリ御加勢申上候

弐番様

同　弐番様御本陣
同　壱貫九拾五匁九分弐厘壱毛
内七拾五匁　檀家中ヨリ御加勢申上候
同　下宿
同　参百拾弐匁四分弐厘壱毛
内参拾八人大工手間　樫根村足軽松右衛門ヨリ御加勢申上候
内拾五人　同手伝い　樫根村重六方
同　下宿
御入料銀参百五拾八匁四分七厘弐毛
内七拾五匁　当郷中ヨリ御加勢申上候

参番様

同　参番様
同　七百六拾六匁八分
内百五拾匁　鈴木志津馬ヨリ御加勢申上候
同　下宿
同　弐百五拾匁七分弐厘
内七拾五匁　下原村松右衛門ヨリ御加勢申上候

下原村

御加勢帳

同　下宿

同　弐百八拾壱匁八分壱厘七毛

内七拾五匁　　同村源右衛門ヨリ御加勢申上候

御加勢帳

合　壱貫五拾匁

同　大工参拾八人手間

同手伝十五人手間

右之通、御加勢可申上段申出候付、此段御伺申上候、以上

十一月廿四日　　初村久兵衛

御郡奉行所

鶴野銀山

佐須郷奉役

御巡検使、当節は鶴野銀山御越之所、難被計由を以、御止宿可被成家々、頃日見分として御役々被差下、御普請御入料積立ニ相成居候処、御郡奉行所ヨリ御手伝方委曲達ニ至居候儀と相見、佐須郷奉役初村久兵衛書状、御手伝之口々、別紙を以申出候帳面、且御郡奉行添書共被成御渡、披見仕候、右御普請御取掛方之儀は、弥銀山えも御越可被成儀は、追々御様子ニ被応、御取計可被成候哉、御下向之頃合ニ差掛候ては、仕事之運も有之儀ニ付、御間後ニ不相成所は、御都合方何れ共御差図可被成下、尤出銀方之儀は、例常之事故、申出之通被仰付置、如何可有

御座候哉、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

酉十二月　　御勘定奉行所

御付紙

手筋を以、相達置候

御勘定手代　御徒士目付兼帯

扇四郎治

御作事手代

扇廣作

仁位村

湯殿

右は、御巡検使御止宿仁位村御本陣・御下宿ニ至り、旧臘御普請残之分、且又御止宿ニ相成候村々、御本陣・御下宿共、侍分湯殿出来無之候付、新規建組として可被差下候哉

大工頭　壱人

大工　九人

番手　弐人

右同断ニ付可被差下候哉、右之通奉伺上候、以上

戌四月　　御勘定奉行所

大坂・筑前
大坂注文物

御召船

木綿類

松葉紙

御付紙
申出之通可被差下候

御巡検使御下向ニ付、諸御手当方御用意相揃候ハヽ、早々申出候様被仰渡奉得其意候、此元ニて用意被相成品々は、大坂・筑前・下モ関注文差出置申候処、筑前・下モ関注文品々は追々下り着申候得共、大坂注文物は以全く下来不申、彼地御役々ニも聊無油断儀とは奉存候得共、彼地御繰合御難渋中ニ付ては、急調相届兼、延引ニ相成候儀と相見、然処右御難渋次第は見張居候儀ニ付、先般御代官方ヨリ相達居候上、銀之内、右品々注文代ニも当、大坂ニて取遣方御伺申上、其通御聞届被成下候付、早速仕向取計置申候得共、御召船御造作は素り、其外口々手引不相成候、御出方差湊(あつめ)居候儀ニ付ては、其分ニも安々は為繰替候共哉と被相考、不得止儀とは申なから、御巡見使御用意品々は、別て御太切之御用意方之儀ニ付、其段憚被申越置候得は、今程は極て船中ニ掛居可申候得共、昨今風順不宜相聞申候得は、吹直り候ハヽ、極て相達可申、其上ニて木綿類、晒染仕立方手入不仕候て不相叶候得は、達方相待兼罷在、且又田舎御宿御普請方之儀手残も在之、去ル十七日御役々被差下置、去廿三日迄ニは、仁位村御普請成就ニ至り、直ニ仁田村え立越積之段申越居候、仁位村外は、上使侍分之湯殿而已出来候儀ニ付、不日御成就可相成、然処麸細工之儀、早速為取掛度御座候処、此節は御旧例之御取設ニ可相成哉、又は寛政年之通紋紙張は被相止、張壁之分襖ニ至り、何れも松葉紙張可被仰付候哉、当時之□所位

紋紙

御作事方

（天保九年戌）

道普請

松葉紙

江戸表ニて御問合、委細申来候様被仰越置候儀と相聞申候処、今以御左右到来不仕候故、御左右之御様子ニ依候得は、紋紙張り相成居候共、松葉紙ニ可相成、又は松葉紙張ニ相成居候付、紋紙張ニ仕替候様御座候ては、御費筋不軽儀ニ付、其段は追々表御書札方御用掛之人咄合、相見合罷在申候、猶又御府内御通筋、且研石渕道組、神前土橋迄之道普請、早速取計不申して不相済段、勿論ニ御座候得共、御作事方人夫繰相成不申候付、日雇を以取計可申候処、是又今御一左右御到来之上、俄ニ人夫多人数入レ取計度、相見合罷在申候、右之通之儀ニ付、宜御聞通可被成下置候、此上も御左右達方、遅達ニも御座候ハヽ、手配方奉伺候様可仕、尚宜敷御差図被成下度奉希候、以上

戌正月　　御勘定奉行所

〈頭注〉御付紙

書面見届候、道普請之儀不都合ニ無之様可被取計候、田舎御宿々壁・襖・御本座ニても紋紙・松葉紙・板張とも在来り不見苦分ハ張替ニ不及候、紋紙御在合も有之と相聞候付、御本座麁末ニ相見候分は紋紙張ニいたし、其余は松葉紙可被相用候、尤此節、御宿ニ見分として役々被差下候事故、尚又申談、御都合能く可被取計候

三月十八日

御船繰
船大工

御巡検使御下向付、御船繰不相成、小隼弐艘新規御造立被仰付置、就夫筑前ヨリ船大工拾人御雇下ニ相成候処、小隼御成就ニ至り候付、何れも帰国取計可申段、御船奉行所ヨリ申来、其趣は、同所ヨリ申上ニ相成居可申儀と奉存候、就夫大工中、上船之日ニは、先例被成下物在之居、且又御役中ヨリも餞別として遣出候分、従上御遣出被下来候儀ニ付、此節も被成下、且御役中遣出之分ニ至り、従上御遣出し可被下哉、左候ハヽ、此節は紙末之通、被仰付度奉伺之候、尚何れ共御賢慮被仰渡被下度奉存候、以上

戌二月　　御勘定奉行所

筑前船大工

白銀壱枚　　筑前船大工統領　壱人
鳥目参貫文　　同断大工　九人
惣中

右は上船ニ付、従上被成下、如是

肴一折　　同断大工中
酒一樽　参升

右は御役中ヨリ、上船且餞別相束遣出之分、上ヨリ御遣出被成候分、如是

右之通奉伺之候、以上

壱州御迎

御合力銀

注文品

御付紙

承届候、先例も有之事故、申出之通夫々可被取計候

二月八日

御巡検吏、江戸表御発駕之比合相極候、御左右御達被成候ハヽ、御用達乾一郎兵衛儀、壱州迄御迎之御使者被仰付置候、付ては季拝借滞米之御渡も銘々御渡可被下儀哉と奉存候、就夫寛政年ニは、小田番儀御迎送共被召仕候付ては、御送被召仕候節は、仕出御合力銀弐枚而已御渡被下候て相済居、斯ル御逼迫中之儀ニ付、此節も右両人内壱人、御迎送兼被仰付、諸御渡物、寛政年番被召仕置候通り、被仰付候儀如何可在御座候哉、且又御船付侍中之儀、寛政年ニも御迎送共、同人被召仕置候儀ニ付、此節も先規之通御迎送共別人不被召仕、同人被召仕被下度奉存候、斯ル御厳倹中之儀ニ付、御出方筋之儀は、少々も相省候様不被仰付候ては、御巡見使御手当方、全く御備相立ち居不申儀ニ御座候得は、誠以当惑恐怖罷在、種々様々と専ら仕繰を付、罷有候儀ニ御座候得共、今以御手当全備不仕、御用意品ニ至り、是非御手当御立不被成候て不相済儀ニ付、江戸表為御登ニ可相成、上銀等当時大坂ニて取遣方報伺、御聞届被成下候付、大坂取遣之口々ニ割合申遣置候得共、是迚も注文品々代全数之御手当不相立、右之分は彼地ニて仕繰を以、調下候様申越置候得共、彼地ニも追々申上置候通、公納之口々其外御名目銀、返備前々口々差湊仕繰不相成、断而已奔走ニ打掛居候儀ニ付ては、今以注文品不下来、代銀手当不

銅拾万斤余

朝鮮

相成候と之儀ニは有之間敷哉と、彼地えも追々差下方申越置、少も御出方被相省候て、少金たりとも御仕向不取計候ては、第一は去々年冬ヨリ下シ前之銅、入質ニ相成居候ニ付ては、拾万八千斤下方相滞居、朝鮮よりは頻ニ催促申越、銅不被差送候ては、仕入不相成儀ニ付、是等之差配粉骨罷在候段は、多筆申上候迄も無之、御明察之通ニ御座候得は、御勘定之御役々兼帯等之儀は、此場之儀ニ付、何分ニも右御迎送ニ至り御渡方、相減候様御下知被成下度、深々奉希候、以上

戌二月　　御勘定奉行所

縄船

御巡検使ニ付、先例之通縄船一艘、御手当仕候様被仰付置候候処、魚問屋統領中、此御役所え呼出申達置候品御座候処、色々故障申出候段、申上置候通御座候、然所寛政年之節は、谷口久右衛門え請負被仰付候付、銀五百匁前貸取計、釣上納之魚代を以差引仕候由、此御役所留書ニ相見居申候付、此節も先例之通請負壱人被仰付、銀五百匁前貸可被仰付候哉之段申上、其趣を以御達被成置候処、銀五百匁前拝借ニては、相勤得不申候付、九銭五百匁御合力被仰付候ハ、、一統申談相勤可申段、魚問屋統領中より願出之書面被成御渡、披見仕候、御合力被成下候儀は、先例無之事故、右統領之内、馬場屋喜兵衛と申者え此御役所より諭達仕候品御座候処、御重太御用之儀ニ付、外人ニ不相拘、其身壱人ニて縄船一艘用意可仕置御用相勤可申、就夫田舎御附廻中、其日数ニ応一日九銭弐拾匁ツ、御渡被下候ハ、、釣上之魚は不残相納可申段申出、一統

銀五百匁前貸

魚問屋統領

釣上之魚

願出候、釣合を以は大ニ便利ニ相見申候間、可然御聞届可被成下候、統領中右之通、苦情申出居候中、喜兵衛儀一統ニ不相拘、速ニ御請申出心得方、尤之者ニ付、御用無滞勤終、御用便ニ相成候、品ニ依候ハヽ、其節申上候品も可在御座、右之趣宜御聞届置被成下度奉希候、以上

戌二月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

御付紙

見届候、縄船之儀前々と違、当節は一艘ニて被相済候事故、御用不差支様可被取計候

二月十一日

御用意方

御巡検使御下向、諸御用意方、寛政年之御形を以取計候様、兼帯被仰渡置候処、尚又江戸表え御問合方、被仰越置候儀も有之、品ニ依右御返答御達迄、御差図方御見合ニ相成居候儀も御座候処、今般右御返答之御左右御到来之処、寛政年之形ニて宜段申来候間、其心得を以御取設方、取計候様被仰渡奉得其意、諸般寛政年之通を以、御手当可仕儀勿論ニ奉存候、然処其後時体之転変、当時ニ被及御取設之内、品柄ニヨリ御増減ニも相成候儀共は有之間敷候哉、心付之品申上候は勿論ニ御座候得共、自然其余ニ至、相改候様之儀等御座候ては、其品ニ依、差掛御用意方相届不申儀ニ付、御吟味之上、兼て御達被下置度奉希候、以上

寛政年之通
御増減

戌三月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

御勘定奉行仮役
吉村儀右衛門
御勘定手代
内山繁左衛門

右は御巡検使、田舎御宿々御普請為見分可被差下候哉、此段奉伺上候、以上

戌三月　御勘定奉行所

御勘定手代
内山繁左衛門

田舎御宿

右は此節、田舎御宿々為見分可被差下段、御伺申上御聞届被下置候処、府内諸御手当多端之儀ニて、人繰相成兼申候間、右田舎下之儀可被差免候哉

御作事手代
扇廣作

右は先般御宿々御普請として被差下置、体認之儀ニも御座候間、下村中、御勘定手代兼勤ニて、可被差下候哉

右之趣、御聞届被下候ハヽ、夫々相達候様可仕候、以上

戌三月　吉村儀右衛門
藤正左衛門

綱浦御番所
畳
障子
縁金
平鍋

此御役所下代

人繰之訳ニ依、清兵衛召仕候事　源治

右は此節、田舎御宿々為見分、吉村儀右衛門被差下候付、相附差下可申候間、可然御聞届可被下置候事

綱浦在番代勤、村瀬初右衛門より、綱浦御番所敷畳之儀、御米漕船欠乗御改之節、村中自分敷入之分を以相償居候得共、此節御巡検吏ニ付、畳弐拾四畳、障子拾四枚張替之儀、願出之書面ニ、御付紙を以左之通被仰付

見届候、御物出之此節ニ付、畳之儀は村中、近村有合仮成之品、其比借上ニして相繕不及難儀様可被談候、障子は取放候故、張替ニ不及候、其外之品々取替可被相渡候、以上

三月十九日　　田嶋左近右衛門
　　杉村右馬助

御勘定奉行所
御郡奉行所

一、縁金三升焚壱ツ　　同弐升焚壱ツ
一、一枚半平鍋壱ツ

薬缶

久田村御船江

御船江波戸先

一、薄縁五枚

一、薬缶弐ツ

以上

御巡検使ニ付、久田村御船江波戸先え、三畳敷縄結ニして御番所取設、幕壱張相渡、其余は番人を始、一体御船奉行所ヨリ手当有之事と寛政年留書ニ相見申候、如何之御主意を以被相設候と申儀は、書留ニ無之候得共、先格有之儀ニ付、御船奉行所示談仕見申候処、彼御役所ニも書留無之儀と相聞候付、猶又、延享年・宝暦年両例吟味仕見候処、何れも御設ニ相成居候様相見申、此節如何可被仰付候哉、奉伺之候、以上

戌三月　　吉村儀右衛門

藤正左衛門

御付紙

御船江波戸先え仮番所之儀、先規之通取立、番人は御船手相勤候様取計、都て之儀両御役所申談、夫々可被取計候、以上

三月十九日　　田嶋左近右衛門

杉村右馬助

麩細工方

府内道筋

見苦敷

御入料

御勘定奉行所

御船奉行所

山本卯兵衛

右は麩細工方え日勤之面々、巡検上使田舎御宿々麩細工として被差下候付、其跡御用差支申候、就夫右卯兵衛儀、今程御書翰紙合御用被仰付置候得共、日勤之面々上府迄差配を付、麩細工方え日勤仕候様、御手筋を以御達被下度奉存候、以上

戌三月　　御勘定奉行所

御巡検使御下向之上、府内道筋研石渕、平田宅磨住居前通ヨリ下モ手、且馬場筋通奥里迄、此程与頭以下御用掛之役々、町役ニ至り立会見分仕候処、御家中住居之取繕不相成候て、見苦敷ケ所々々、御作事方ヨリ取調差出候書面、与頭方え差越、御家中之分は、御達ニ相成候様示談仕置、就夫当時平素、困窮之御家中ニ候得は、右ケ所々々之内ニは、自力ニて取繕仕得不申人も可有之候哉ニ候得共、右取繕方御手当筋等申出ニ可相成も難計、然所御巡検使御用御取設方之儀は、追々申上置候通、莫太之御入料ニ候処、今以御手当不相立中ニ候得は、難渋体申出ニ相成候時、御手当方之儀は不被相届、此場ニ付自然左様之向も有之候ハヽ、与頭より取繕方、諭達在之候様御差図被成下置度、夫とも取繕方不被手届、従上御取計不被下候て難叶向も御座

入料皆済

候ハヽ、御作事方ヨリ為取繕、御馬廻中ニは石麦、其以下は御切米を以、其入料皆済迄引取、上納可被仰付候哉、左無キ御渡方ニ至り、御手支之此場ニ付、御手入不相生様、与頭方え御差含被成下置度奉存、奉入御聞置候、此段宜御聞通被成下候様、偏ニ奉希候、以上

戌三月　　藤正左衛門
　　吉村儀右衛門

杉村右馬助様
田嶋左近右衛門様

壱州御迎

大坂え注文

御巡検使江戸表御発駕之頃合、御間近ニ相成候ニ付ては、御用達之内乾一郎兵衛儀、壱州迄御迎之御使者被召仕候付ては、最早御渡物不相渡して難叶、就夫寛政年ニは御迎送共、小田番被召仕置候付、送り被召仕候節は、銀弐枚而已御渡被下候て相済居、此節も斯ル御逼迫中ニ付ては、先規ニ被為任、迎送共同人被召仕被下度段申上置候処、今以御治定被仰渡無之、然処御巡検使御用意品、大坂え注文申越置候分不下来段は、追々申上置候通、彼地之儀口々御渡方相滞、誠以危急ニ迫り居候儀ニ付、如何ニ差配り仕居候哉、御間筈之程甚以不安、此場ニ至居候儀ニ付、少金たり共御仕向不取計候て、不相済図ニ押移居候得共、此元ニも且夕（ママ）之御渡方危御行詰ニ付ては、今以其儀も不相届、此場ニ在之、依ては先般申上候通、御迎送とも同人被召仕被下度奉存候、夫とも送りニハ別人不被召仕候て、不被為限御事情も御座候ハ、季拝借滞米御渡方

御銀米

滞米

銀

之儀は、寛政年小田番被召仕候節、持前隣国立帰之御渡方、滞米白米拾弐俵之半減、六俵御渡ニ可相成を、拾六俵相渡有之候は、迎送共ニ同人を被召仕候故之儀共哉と奉存候得は、此節迎送別段ニ被召仕候御事ニ御座候ハヽ、寛政年御渡方之通、半数ツヽ御渡可被下候哉、御出方筋之儀は、少しも相省き候様御差図不被下候ては、御銀米とも御用半ニして御行支ニ可至も無覚束、当時之御繰合ニて誠以御太切至極之此場ニ付奉伺之候、何分宜敷御聞通被成下、何れ之道ニも御省略之御差図、被仰出被下度奉仰候、以上

戌三月　　藤正左衛門
　　吉村儀右衛門

杉村右馬助様
田嶋左近右衛門様

御付紙

見届候、迎送是迄之通両人ツヽ、被仰付候、御用達之儀は重キ勤向と申、最前と時勢も違、旁ニ付、一郎兵衛御渡物、左之通被仰付候条被得其意、最早仕出ニ臨候事故、御渡物急速可被相渡候

一、滞米　　八俵
一、銀　　弐枚

乾一郎兵衛

一、外ニ滞米　参俵　　乾一郎兵衛

右之外、持前隣国立帰之御渡方被仰付候

四月廿三日

原田宇右衛門
大宮吉左衛門
波多野新左衛門
田口甚七郎

御賄掛

右は御巡検使御下向、田舎御廻村之節、御賄掛六人被差下候内、弐人は当年御賄掛之内、御用掛被仰付置候付、残四人不足ニ付、右之通田舎御附廻として田舎御下り中、添賄掛可被仰付候哉、奉伺之候、以上

戌三月　　藤正左衛門

襖之儀

御巡検吏田舎御宿々襖之儀、有来候分、多分引手入居不申儀と相聞申候間、一体ニ引手入候ては、与程入用之内御用意仕置、木引手四百六十有之、不足之分当町有合無覚束、然処寛政年ニは、皮引手ニても相済居候処、相見申候得は、此節は御本陣之分計木引手入ニ被仰付、下宿之

木引手入

分は皮引手付候様御治定被成下、如何可有御座候哉、何れとも御差図可被成下候、以上

戌三月　藤正左衛門

杉村右馬助様

田嶋左近右衛門様

御付紙

承届、申出之通可被取計候

三月廿一日

人馬方

御米蔵

小船番所

御巡検使ニ付、人馬方之儀は、恵比須崎御米蔵壱番・弐番御蔵二戸前明渡し、同所え被召置候儀と相見え候付、明渡方御米蔵談達仕置候得共、直ニ同所ニ被召置候て如何可有御座候哉、然処御渡着之儀は、今少し御間も在之儀ニ付、壱州辺迄御通船相知候迄は、小船番所え被召置候時、府内欠乗等有之節、明渡候様御達ニ相成、御差支無御座候ハヽ、当時は小船番所え被召置候時、外ニ差支之品も相見不申候、猶何れも被仰渡可被下候、以上

戌三月　藤正左衛門

朝鮮帰国船

郡町出夫方

大坂注文品

山駕籠

下方催促

御付紙

可為書面之通候、人馬方之儀来廿八日ヨリ取掛候様相達置候間、可被申談候、尤朝鮮ヨリ之帰国船、府内浦欠乗之節は、仮番所取設候様可被相心得候

御巡検使江戸御発駕、四月初旬ニ相成候段被仰渡、就夫御船奉行所諸手配方帳面一冊、同所申上之書面とも被成御渡、披見仕候、郡町出夫方之儀は、追々示談付居候段、勿論ニ御座候得共、御渡着可相成時分、御不筈之儀無之様、出夫手配方、右別帳人数高、御郡町共御取糺被成下置度奉存候、御巡検使ニ付、入用之品々大坂注文品々之儀、少々は相達候得共、残所有之候ニ付、相達居候分は内引ニ仕、残高口々書載、追々催促申越置候得共、手配方返事も不相達、其外諸役所注文品何れも達し不足在之、第一御夜具、出来用反物、御召シ山駕籠、其外御用人以下侍分安駄駕籠等、必要之品々不下来、此節岸作右衛門中帰国被仰付候付、彼地調達方申承り候処、無油断差下方心配罷在候儀と相聞候得共、代銀御渡方不相届儀ニ付、其時分迄は出来上り居不申趣申聞、素り御用品も違候儀ニ付、何分御間筈能差下候積合候段申聞候得共、段々御間近ニ相成、甚心遣ニ奉存候得共、右差下方催促之為、相当之人只今ヨリニても被召仕、何分取下候様仕度奉存候得共、現金銀之間、御仕向不取計候ては、被召仕候時、代銀等之凌ニて不差下図ニ押移居候時、態々被召仕候程も無之儀ニ付、右之通作右衛門出帆時分迄之所は、甚以気遣敷申分ニ御座候得共、追々申越置候品も候得は、是非心配を以可差下儀ニ付、夫を便可相待外、差当心付之品も無之、其段御明察可被成下候

御帰帆
御送漕船
十五艘
田代・浜崎
御郡夫
鯨組雇

御付紙
承届候

一、御帰帆之節、壱州迄御送漕船御手当方之儀は、御船奉行所ヨリ申出之通、九艘は寛政年之形を以町ヨリ差出方御達被下、残十五艘は海人船を以可被召仕候処、船之儀は相揃候儀と相聞候得共、乗組人数男子而已ニて相揃兼候儀と相聞候付、希は御郡ニも追々被召仕、多端之儀ニは御座候得共、御帰帆ニ相成候時ヨリは、手透ニも相成候儀故、右十五艘之内、七艘丈御郡ヨリ被差出候様御達被下候ハヽ、残八艘之儀は、何分曲り海人船を以御手当相立候様仕度奉存候、御郡夫之儀は、当節は道作り其外御渡着之上は、弥多人数被召仕、難渋候段見張候儀御座候得共、元来人寡御国柄ニ付ては、他国ヨリ御取寄可相成候得共、此近領之儀は、何れも此節上使ニ付ては人夫召仕多端之儀ニて、他国え被差出候者無之趣ニも相聞、田代・浜崎ヨリ御取寄ニ相成候時、船手働之儀は、御用ニ相立候者可在之候哉、多分御用立間布奉存候間、何分ニも御郡夫被召仕ニ不相成候ては、御用支ニ可相成候儀と奉存候、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

戌三月　　藤正左衛門

〈頭注〉御付紙
曲り海人船、外不足之分は廻り鯨組雇入方、船奉行所えも及差図置候

若殿様
人夫不足
御駕籠夫
大部屋夫
大坂注文品

御作事方ヨリ別紙之通申出候付、差上之、奉入御披見候、同所召抱之人夫、是迄不足ニ有之、押て繰合を付召仕罷在候処、若殿様御在国被為在候得は、猶又召仕方繁々ニ有之候を、色々仕繰を付不召抱様心配仕居候中、不遠、御巡検使御下向ニ相成候時は、人夫不足ニ有之、是迄之人夫ニては、如何様仕繰を付候時差支候儀と相聞、其上砥石渕道祖神ヨリ府内ニ掛道造等ニも、人夫召仕不申候て難叶、其内長比宜敷者も御座候ハヽ、御駕籠夫ニも撰取り候様為仕度候得は、申出之通大部屋夫、当時番手御作事方、仮成ニ人繰相立候丈召抱候様及差図度奉存候、猶いつれとも御賢慮次第奉存候、以上

戌三月　　御勘定奉行所

御付紙

承届候、当時番手大部屋夫、申出之通召抱候様可被取計候

御賄方下代
半吉

右は御巡検吏御用、大坂注文品々今以不下来候付、為催促上坂申上、一両日内出帆便より差越申候、可然御聞届可被成下置候、以上

戌三月　　御勘定奉行所

御国御着
看板羽織
延享
夏服
御駕籠舁夫
寛政
海陸四拾日位

御巡検使、四月初旬江戸表御発駕之御積ニ候段被仰渡、御国御着御都合ニヨリ、閏四月下旬、五月初旬ニも可相成、就夫諸御手当之内、御駕籠舁夫、且御行列ニ加り候人夫は素り、其外口々人夫、着用之看板羽織等何れも木綿を以手当仕罷在候、然処只今之御様子ニ御座候得は、多分夏季ニ相成可申候処、看板羽織等ニ至り、是迄用意仕居候木綿ニて、御済可被成候哉、都合五百程も御入用ニ御座候を、只今ニ至り、全布ニ御仕替可被成迚は大造之儀ニて、当時之御繰合、臨時御出方ニ相成候は素り、大坂御仕繰御行支ニ付、去年より注文申超居候品々、今以不下来品も在之様之儀ニ付、只今より申越候時、買下方弥御間筈之程、千万無覚束奉存候、勿論御国御着、甚暑中迄延引ニ相成候儀は有之間敷、延享年御巡検吏田舎御往還、四月廿三日御発駕、五月二日之御上府と記録ニ相見え候処、其節多分木綿看板羽織等御用意ニ相成居、尤未タ夏服ニ不至前ニは御座候得共、布羽織等相交用意仕候と相見申候得は、当節御着之遅速ニヨリ、夏季ニ相成候儀も在之哉ニ奉存候得共、延享年之形を以、木綿之看板ニ御在合之布羽織看板、五拾程御座候を染置、洗濯等仕、折柄白布御在合在之候を、御駕籠舁夫三拾人分新ニ出来ニして、御手廻之分計を布看板着用為仕、其余は木綿相交ニして可被相済候哉、尤近年は、諸侯様方夏季ニ相成候ても御六尺は素り、総て荷物人足よりは、布看板ニては、荷被キ方難儀仕候付、何れも木綿草看板御着セ被成候儀と相聞、寛政年ニは二月下旬、江戸表御初駕ニ付三月下旬、此元御着之御手当ニ相成居候処、四月初旬御渡着ニ相成居候を以は、江戸御発駕より此元御着迄、御海陸凡四拾日位ニて御渡着ニ相成候儀と相見申候得は、此節ハ四月初旬御発駕之段、申来り

閏四月中旬

居候を以、閏四月中旬比御渡着ニ相成候積合ニ付、夏服前ニ御座候得は、木綿而已相用候段、勿論ニ御座候得共、自然夏季ニ相成り候時、火急ニ仕替も不相成儀ニ付、此段奉添御聞置候、御賢慮御差図被成下度奉希候、以上

三月　　御勘定奉行所

御付紙

申出之通用意可有之、猶又御便利之増減、無油断心掛可被置候

三月廿三日

御銀掛所下代

熊吉

右は御巡検使田舎御宿々、床襖張壁等、麩細工仕事数軒有之、此程麩細工被差下置候得共、下宿共ニは八拾参軒ニ相成り、四人ニては格別大振之仕事之由相聞申候付、今両参人御雇被仰付可被差下候処、麩細工相心得居候者無之、然処此者ニは、少々相心得居候儀と相聞、麩細工方より御雇ニして差下方申出候間、昨廿九日、麩細工中居先え差越申候、可然御聞届被成下、送方之儀御郡奉行所え御差図可被成下候、以上

戌三月　　御勘定奉行所

麩細工

御備品

御巡検使、府内御止宿え御手当被置候品々之儀、専ら取調罷在候、然処右御備品之内、寛政年は上使ヨリ之御様子ニヨリ、紙末之品々、俄ニ為御引被成候事と留書ニ相見申、此節如何可被仰付候哉、諸品何れも手当仕罷在候得共、此節寛政年之形と被仰出候御事ニ付、此段奉伺之候、尤府内御宿之分、為御引被成候御事ニ御座候ハヽ、田舎御宿々之儀、猶又御飾付ニ及間敷御事ニ奉存候、何れ共御差図可被成下候、以上

戌三月　　御勘定奉行所

料紙箱

一、料紙箱参つ　　御止宿参軒分
　同　奉書紙参帖
　同　半切参巻
　同　美濃紙参帖

硯箱

一、硯箱参つ　　料紙箱ニ添
　同　墨宝参丁
　同　金銘筆六本

煙器

一、煙器拾八本
　但し、御使宿参軒分、百本余之内上之分、如此相減有之候事

灯台

一、灯台拾八本

丸行灯参間充、御備ニて相済候と相見申候

一、台子参通

右之品々、此節御備御省キ可被成候哉

上黒椀

一、上黒椀拾人前

一、腰高六束

一、木具壱束

重箱

一、重箱参組

一、間鍋拾弐

一、引盆九拾

一、酒越参つ

一、膾皿七束

一、黒縁高参拾

小皿

一、小皿七束

一、晒布手拭六

一、寄鉢九枚

一、黒塗棗参つ

手拭掛

一、毛せん六枚
一、手拭掛拾八

吸物椀

一、鑞鉢参つ
一、鉢台参つ
一、天目六拾
一、吸物椀参拾人前

右之品々、寛政年は為御引被成候と相見え申候、御膳椀類は、御持越之品ニて被相済候付、被相省候と相見申候得共、当節も御持越可有之候得共、御様子も難相分事故、御見計を以御手当被置、如何可在之候哉、以上

御付紙

見届候、御旅宿御飾付ニは及間敷品は用意可在之、田舎之分は不及其儀候、品々見計を以用意有之、万一御入用之節、不筈無之様心配可被置候

御薬箪笥

御巡検使御宿々え、御薬箪笥御一方様ニ壱充、都合三ツ御用意ニ相成候得共、御三方様御中ニ壱ツ御備被置、御入用之御方え差出候ニして、寛政年ニは相済候段書留ニ相見、此節も御三方様御中ニ壱ツ御備ニ相成、如何可有御座候哉、奉伺之候、以上

戌三月　　藤正左衛門

杉村右馬助様

田嶋左近右衛門様

御付紙

伺之通、御薬箪笥、御三人中壱ツ用意可被致置候

三月廿九日

御茶手桶

御巡検使田舎御通行之節、御行列之内ニ御茶手桶は、壱荷ツヽ御三方様共、為御付被成候御先格ニ候処、寛政年之節御役所ヨリ申上候品ニヨリ、御三人様御中ニ壱荷、為御持被成候段被仰出置、然処其節は、何事も御省被成御儀と申、多分御入用無御座儀と相聞候付、全被相止候様申上候処、御止被成と之儀と被仰渡置候、此節如何可被仰付候哉、奉伺之候、以上

戌三月　　藤正左衛門

杉村右馬助様

田嶋左近右衛門様

御宿札
御合印

御付紙

御茶水桶、寛政年之通用意ニ不及候、以上

三月廿八日　田嶋左近右衛門
杉村右馬助

吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
高崎翼殿
早田安賀之介殿

可被得其意候

御巡検使府内御宿々御門え御宿札掛候先格ニ付、寛政年ニも兼て夫々用意掛置候と相見候処、寛政年ニは府内田舎共御宿札ニ不及、御三方様御合印被遣候ハヽ、御宿々建置候様と之御達ニ相成、掛置候御宿札為引候由、書留ニ相見、尤田舎御宿札之儀は、青竹ニ挟ミ建置候儀と相見候処、寛政年ニは掛札ニ被仰付置候得共、前条之通ニ付、御掛札も相止候儀と相見申候、此節は如何可被仰付候哉奉伺之候、以上

戌三月　藤正左衛門

杉村右馬助様
田嶋左近右衛門様

御手当

麸細工

絹羽織

御付紙

御宿札之儀、寛政年は御巡検吏御差図ニヨリ、為御引被成候処、取分田舎ニて不分ニ有之、御荷物取片付候節、御宿知兼候と相聞候ニ付、此節は致用意可被置候

三月廿七日

山本勘治

小嶋吉次郎

田舎滞留中、白米四合五勺、飯米ニして、滞留日数五十日と見、銀七拾五匁ツヽ御手当被下

山本勘治次男　種次

壱日九銭弐匁五分、日雇賃被成下

麸細工　熊蔵

熊蔵え、白米四合五勺、御手当銀六拾匁被成下

右は御巡検使田舎御宿々、床襖張壁張として被差下、三月廿三日大山村差当下村致候

御巡検使ニ付、紙末之場所ニて相勤候組中、着用之羽織、先格絹羽織御貸渡被下候儀と相見申候処、宝暦年は絹木綿打交ニして相済候と相見、寛政年は木綿而已ニて被相済候と相見申候、当節如何可被仰付候哉、何れ共御賢慮之御差図被下置候様奉願候、以上

絹羽織

木綿羽織

仮番所

四月　　御勘定奉行所

一、絹羽織四拾九　　辻堅足軽着用
一、同六ツ　　御宿三軒切組、番所詰組之者着用
一、同六ツ　　人馬方渡
一、同弐ツ　　大手御門左右ニ組之者弐人着用
一、同六ツ　　久田村仮番所用
〆六拾九

御付紙

寛政年之通、木綿羽織可被貸渡候

四月廿日

府内御宿前仮番所之儀、先格之通、建組候手当仕罷有候処、寛政年は上使御渡着之上、右仮番所為御引被成候と相見申候、当節如何可被仰付候哉

夜具

絹・木綿

御付紙

仮番所取設ニ不及候

一、御三方様御用、御夜具并御家中衆用夜具共、絹夜具御手当被置候処、寛政年は御着当日ニ至り、御家中衆用一体木綿を被相用候付、絹之分仕替候様と之御事ニ候得共、差当全木綿ニ仕替も難相届、絹木綿打交ニして、相済候候と相見申候、尤当節絹夜具御借上ニ相成居、御三方様御夜具とは、別段御出来ニ相成居申候

御付紙

御用意之品ニて被苦間敷候

丸挑灯

一、御門之左右ニ丸挑灯弐張ツヽ、先格燈之候と相見申候処、寛政年は不及其儀、其代り台挑灯壱ツ燈之候と相見申候、尤武田様御自分之丸挑灯共弐張、御燈被成候儀と相見申候

御付紙

丸挑灯・台挑灯共致御用意可被置候

右、当節寛政年之形と被仰出候付、奉伺之候、いつれ共御差図被成下候、以上

戌四月　　御勘定奉行所

郷番所

御巡検使御宿前、仮番所之儀御取設ニ不及段被仰達、夫ニ付田舎御宿前ニも、郷番所御取設ニ相成、諸品差下候手当仕罷在候処、府内之釣合を以為御引可被成候哉、申上候通為御引被成候御事ニ御座候ハヽ、其段御郡奉行所えも被仰達被下度奉存候、御賢慮之上、可然御差図可被下候、以上

戌四月　　御勘定奉行所

田舎御宿

御付紙

申出之通、田舎御宿前仮番所取設ニ不及候、以上

四月五日　　田嶋左近右衛門
　　杉村右馬助

吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
高崎翼殿

佐護郷

雇左官
弐人

右は佐護郷深山村給人、佐護四郎左衛門、伊奈郷勢田・樫瀧両村給人、小宮傳・宮原万之允而

左官仕事

佐須奈

大工小頭

已、上使御宿左官仕事共、家主ヨリ御合力可申上段申出居候処、自分ニて雇下得不申候付、差下方申出候付、此節差下申候間、送方御切手之儀、御郡奉行所え御差図可被成下事

戌四月

御作事手代

森甚兵衛

右は上使田舎御宿々之内、佐護郷深山村・仁位村御本陣、御仕替ニ相成候、御普請其外、佐須奈・鶏知両村御宿々、御取設ニ相成居候場所々々手残有之候付、御普請為取計差下申候間、可然御聞届被成下、送方且御切手之儀、御郡奉行所え御差図可被成下候

大工小頭　壱人

番手小頭　壱人

大工　八人

右同断ニ付差下候、可然御聞届被成下、送方且御切手之儀、御郡奉行所え御差図可被成下候、

以上

戌四月　　御勘定奉行所

研石渕道
郷夫道作
見苦敷

御巡検使御通行之節、研石渕道筋荒損し、御通駕難相成儀ニ付、郷夫被召仕方申上、出夫方御郡え御差図被成下置、則今日ヨリ郷夫且御作事方番手打交セ、道作為取掛申、然処御作事方之儀、口々御普請所多く、ケ所々々立廻り差配仕儀ニ付ては、行届兼候処も可在御座候哉、就夫道川役之儀、上使御下向ニ付ては、増人も被仰付置候儀ニ付、道普請中附添差図仕候様御達被下候ハヽ、費無之は素り、普請方も行届可申と奉存候、其外上使御通筋、頃日与頭以下御役々立会見分仕候節、見苦敷場所々々は書留、取繕方与頭ヨリ可被相達と之儀ニ付、御作事方ニて書留之書面も、与頭方え差越置候処、早速取繕之儀御触渡之儀と相聞申候処、今以取掛不相成儀と相見、然処段々御下向頃合は間近、取掛方は素り、自余構候前通り道掃除方、其頃ニ至り夫々可相成候処、場所ニ依候ては、小石等取除地上ニ不相成候ては、相済間敷道も相見、右等之分は、早々取掛相成候様、被仰渡如何可在御座候哉、先般見分之節、道川役ニも立会、見分心得前之儀ニ付、見苦敷場所々々は取繕方一旦御達ニ相成候上は、道川役ヨリも精々立廻り、無油断差配仕候様、御差図被成下度奉存候、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

戌四月　　御勘定奉行所

御付紙

伺出之趣承届候、いつれも夫々可及差図候

四月九日

餅

黒砂糖

白砂糖

御巡検使ニ付、茶屋々々ニて餅出来高、寛政年用意寡く御不都合之儀も為有之哉ニ付、当節は用意方、大増候様被仰渡奉得其意候、就夫寛政年記録吟味仕候処、茶屋々々ケ所弐斗五升搗、壱升搗、其外弐十五取ニして白餅用意、黒砂糖壱斤、白砂糖壱斤、茶屋亭主え相渡置候儀と相見申候処、餅而已売レ、砂糖は売不申儀と相見申候、依て此節は、白餅五斗搗用意、黒砂糖弐斤、白砂糖壱斤用意相渡置候様仕、如何可在御座候哉、尚何れとも御賢慮次第被仰渡可被下候、以上

戌四月　　御勘定奉行所

御付紙

可為書面通候

四月八日

雨戸

翠簾

御巡検使御通行之節、一ノ御門両御物見翠簾掛在之分、御掛置可被成哉、又は雨戸計ニて翠簾は御取除ニ相成候儀哉、寛政年御通行之節如何為相成哉、書留ニ相見不申、然処信使来聘之節は、取除候儀は御意与被成候儀之由、公儀御役人様ヨリ被仰渡、御掛被成候儀と相聞申候、此節如何御治定可被仰渡候哉、御掛置被成候儀ニ御座候ハヽ、是迄有来翠簾古損居候儀ニ付、新規出来替候様不仕候ては、見苦敷相見申候、是又何れ共御差図可被成下候、以上

戌四月　　御勘定奉行所

田舎御往還

御付紙

宝暦・寛政年之度、田舎御往還之節、一ノ御門并馬門共ニ鎖し、くゞり計り明置候釣合を以は、御物見いつれも雨戸入置候様可被相心得候、尤享保之度ハ、端午御帰府日積ニ付、御通筋之面々、大門を開キ身体ニ応し寄付番相詰候様被仰付候段、記録ニ相見候得は、右等式日ニは、一ノ御門御物見ニ至り、時宜ニ応し差図之品も可有之候間、簾之儀も見苦敷相成候ハ、、新規出来置候様可被取計候

簾

寄夫飯米

御巡検使ニ付、寄夫飯米之儀、御泊村々粗米を以何れも御備ニ相成、今残差廻前米八拾五俵三斗三升余之分、白米ニして四拾九俵と相成り、此分豊村え相備候ハ、、御備相立候付、此跡渡海船有之次第、船揚取計相備申度、依之西目え欠乗之節は、廻府掛豊村ニも直ニ船揚取計、東目豊村ヨリ府内之方え、若欠乗いたし候ても、其村え船揚取計、いつれとも都合宜様、御郡奉行所え及役談置候様可仕候間、右之四拾九俵船揚取計方、御関所方え御差図被成下度奉存候、以上

戌四月　　御勘定奉行所

御巡検使、田舎御宿々御取設方被仰渡候条々、御作事方え差図仕置候処、別紙之通申出候付、差上之奉入御披見候、何れ共御治定被仰渡被下度奉希候

戌四月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

御旅宿御本陣
冠貫

御作事方申出之書面、左之通

御巡検使、田舎御旅宿御本陣ニ限り、表門ニ戸を入候様被仰出、奉得其意候、就夫出来方最前積前之通、冠貫計建置候分は、左右袖柱取付看板出来添、参尺開戸弐枚ニして、〆りハ板冠貫開金物、厚板きりく細工ニ仕可然儀ニ御座候哉、又は開金物大肘坪(壺)冠貫金物も鉄ニて出来候時は、大分之御物出、殊ニ此節御普請ニ被差下候役々之間筈ニ出来申間敷、追て金物出来之上、御打セ可被成候哉、右両条何れ共、出来方御差図可被下候

板冠貫

御付紙

書面之通、板冠貫きりく細工ニ可出来候

開戸細工

一、御本陣表門、出来都て引戸細工ニて、田舎之儀ニ候得は、戸在之候家々少く、右之参尺弐枚引戸、御取外ニ出来候て如何可在御座候哉、矢張開戸細工仕可申候哉、是又何れ共出来方御差図可被下候

引戸

襖障子

御本陣

深山村・仁位村

御付紙

弐枚引戸、取外ニて不苦候

一、御本陣御本間、襖障子共掛金〆り打候様被仰出候処、障子之儀は都て一間割合、弐枚物ニ御座候得は、掛金ニては開閉ニ相障り可申、御広間御障子〆り金物之形ニ出来不申候ては、御間内之御〆り如何敷事共ニは無御座候哉、御吟味之上、御差図可被下候、且又襖之儀は、弐間割合、参尺四枚物ニて、縁之歩合も薄く、三ツ坪〆りニ御仕替不被成候ては、掛金ニては御〆りニ相成不申、是又御評議之上、御差図可被下候

御付紙

開閉ニ不障候〆りニ相成候〆方、可被出来候

一、此節深山村・仁位村御本陣替御普請御入用之板木は、其村ニて最前大体注文差出置候処、其外所々御取繕御普請、且此度御本陣表門戸出来用板木ハ、不日御普請方役々可被差下候御図合ニ候得は、只今ヨリ注文之運ヒ難相届、役々下村之上、入用之木品、其村ニて村役人応対、取出方談ニ及候計ニ仕度、其筋御郡奉行所ヨリ御止宿村、御昼場所共ニ書達ニ及候様御達置被下度奉希候

御付紙

可為書面之通候、御郡奉行所ヨリ及差図置候

右之通、条々御評議之上、可然御差図被下度奉存候、以上

四月九日　　御作事方

御勘定奉行所

畳屋

畳屋　四人

右は豊村・大山村・佐賀村・佐須奈村、御巡検使御宿々畳差として、明十四日差下申候間、送り方御切手之儀、御郡奉行所え御差図之事

人参膏

御薬物

上使田舎御巡検中、人参膏、左之通被進候御先規と相見候処、寛政年之一体之釣合を以は、被進及間敷候得共、御薬物之儀は、御用意はいたし置候様被仰渡置候、当節は如何可被仰付候哉、御薬物之儀ニ付、御用意被置候儀ニ御座候ハヽ、手当方御用人中え被仰渡置度奉存候、以上

四月　　御勘定奉行所

一、人参膏　拾丸ツヽ、　　御三人様

一、同　　五丸ツヽ、　　御用人　御人数次第

以上

幕飾

御紋付幕

御付紙

伺出之趣承届候、則御用意方御用人中え相達置候

御巡検使ニ付、御関所・御番所幕飾之儀、御場所柄も違候付、以前布御紋付幕、御張被成候御先格ニ付、布御紋付幕差下候様被仰渡置、奉得其意候、然処布御紋付幕之儀は、御当用御在合無之、此節新規御出来ニ相成候得は、布之儀当町調ニ不相成候ては、布御有合無之、弐張御入用ニ付、多数買上不相成候て難出来、御入料も不少、御手当も不相立此場之儀ニ付、成丈は御在合ニて御済被成度、就夫御陣道具方御備之幕之内、布御紋付幕有之間敷候哉、御備幕御座候ハ、、弐張此御役所貸ニ相成候様、御差図被成下度希申候、自然御紋付幕御備無之儀ニ御座候ハ、、御歩行御用御備、布御紋付幕弐張在之候を以、御済被成候ハ、、御巡検使御附廻御役々持下り、御関所御通行之日為張、直ニ取帰り候様可仕候間、其間御歩行之節は、引両付幕ニて御済被成下候様被仰付置、如何可有御座候哉、御歩行用を以御済被成下候様申上候段、甚以不容易儀と奉存候得共、御手当不相立中ニ付、不得已、此段も御伺申上見候段、宜敷御聞通可被成下、已上

四月　　御勘定奉行所

御付紙

御歩行用御備之御紋付布幕、弐張差下方、申出之通可被取計候

四月

同、御下村掛之御手当御入用無之、御不用ニ相成候事

鶏知村

御巡検使ニ付、鶏知村之儀御昼休御手当ニ相成居候処、先規御上府之節、御休ニ相成候儀と相見候間、当節も先規之通諸御手配仕居候処、御郡奉行所心付ニて、府内御発駕之御都合ニヨリ、御下村掛鶏知村へ御立寄可被成も難計、其節之御賄手配方申来、就夫御下村掛御昼休有之候節、御賄方手配仕見候処、別段御役々被差下、新ニ御手を不被立候ては、先規之人数ニては難行届相見申候、然上御郡奉行所ニて、器物類之用意方も全数相届兼候趣ニ相聞候付、不足之分は新ニ御用意不被差下候て難叶御座候、新ニ御役々被差下候御費ニも不軽、然上右器物類不足之分、用意方等も御心遣之儀ニ奉存候得は、上使御三人様は御持越之御茶弁当之外、御扣一通り、府内御宿亭主ヨリ御弁当同様相仕立、御弁当差下候節、一所ニ持下候様被仰付、如何可有御座候哉、御用人以下之分は、別段新ニ御賄掛壱人下代被相添、御発駕前日ニ被差下、彼村ニて刻蔵又は切飯等ニて、侍分はこし物香物相添差出、其以下は香物而已ニて、手当仕置候様被仰付候ハヽ、新ニ御役々御手を不被立、御用便之儀と奉存候、何れ共御賢慮之上、可然御差図可被成

御昼休

御弁当

下候、以上

四月　　御勘定奉行所

御付紙

書面之通、可被致手当候、以上

四月　　田嶋所左衛門

杉村右馬助

吉村儀右衛門殿

藤正左衛門殿

高崎翼殿

早田安賀之介殿　　可被得其意候

府内御本陣

大坂

美濃紙

障子張かへ

上使府内御本陣、御座廻障子美濃紙張ニ為積、大坂え注文申越置候処、今以不下来、然処御下向頃合間近ニ相成、大坂ヨリ下来候を相待候時期も不相知、第一麩細工少人数之儀ニ付ては、早々為張置候様仕度、就夫美濃紙之儀は、右之通御有合無之儀ニ付、溝口張ニ被仰付如何可在御座候哉、上使ニ付ては、以酊庵ヨリも障子張かへ之儀申来居、是又和尚住居燕鴻室、表座廻り寄付ニ至り、何れも美濃紙張候仕来り之場所ニ候処、美濃紙は全く御払底之儀ニ付、溝口張

ニ被仰付如何可有御座候哉、何れも段々取掛不申候ては、御間筈ニ合申間敷奉存候付、奉伺之候、以上

戌四月

吉村儀右衛門
藤正左衛門

御付紙

申出之通、溝口紙張ニ可被致置候

大山村　川本茂十郎
豊村　波多野新左衛門
仁田村　下代　入右衛門
　　下モ男　傳治

右は番組

佐賀村　御泊り　井常右衛門
佐須奈村　御昼　大宮吉左衛門
仁位村　御泊　下代　荘七

大山村
仁田村
佐賀村
仁位村

琴村
鶏知村
御昼

琴村
深山村　御泊
鶏知村　御昼

右弐番組

下モ男　喜作
原田宇右衛門
田口甚七郎
下代　久兵衛
下モ男　忠吉

右三番組

高山蔵之介
下代　瀧川吉兵衛
田蔵下代　弐人
下モ男　壱人
竈之者　三人

右は御下村掛、鶏知村御昼御備

御先越　　御作事掛
古川武左衛門
御跡仕廻　　御作事手代
三木田経右衛門
御附廻　　御勘定手代
内山繁左衛門

右之通、御巡検吏田舎御下村之節、御先越・御附廻として可被差下候哉、奉伺之候、以上

戌四月

侍分三拾六人
絹夜具
夜廻役

御巡検使御三方様、御用人以下侍分三拾六人ニ相見候付、頃日御伺申上、御差図之通御借上之絹夜具、差出候御手当仕居申候、然処田舎之儀、御泊村々何も木綿之分は、御借上相揃居候処、絹夜具は全持合之人無之、就夫府内ヨリ不差下候て難叶、都合三拾六通之絹夜具、府内御発駕跡、荷作、御泊毎ニ御間筈能差廻可申迚は大造之儀ニ相見申候得は、支配之人無之してハ、御心遣之儀ニ奉存候間、兼て被仰付置候上使御家中衆頼ニ付、田舎え夜具被差下候節之支配人被仰付置候事ニ付、右之人え支配被仰付如何可有御座候哉、又は別段御達をも可被成下候哉、夫ニ付人馬之間、御手当無之して難叶相見申候間、手当方御郡奉行所え御差図被成下度奉希候

一、先規、市ヶ峯え弐間角縄結ニして、夜廻役詰所被相設候儀と相見候付、当節も出来方及差図置申候、夜廻役詰方之儀、御達被下度奉存候

〈頭注〉此詰所当節ハ御不用ニ相成候事

右之通奉伺之候、以上

戌四月　　御勘定奉行所

御付紙

書面弐ヶ条承届、兼て被仰付置候支配人え委置候様可被取計候、別段相達ニ不及候、夜廻役相詰方手筋え相達置候、以上

四月廿二日　　田嶋左近右衛門
　　杉村右馬助

吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
高崎翼殿　　送方之儀可被得其意候

書手
御合力銀

御巡検使ニ付、御用達え被相附候書手壱人、旅籠御合力銀・船中飯米、宝暦年之形を以申出、右ニ付、御宛行等御渡可被下候哉之趣ニ相見、然処寛政年ヨリは、御家中以下御渡物、総て相減、此節も同様被仰付置候付ては、寛政年書手御渡方吟味仕候処、紙末之通ニ付、年行司ヨリ申出之、宝暦年ニも同様之御渡方と相見申候、当時御逼迫中、御増方等願出候時、御取用可被

御合力銀
勝本
船中飯米
駆付人夫
人夫六拾人

下儀ニ無之段は、新ニ申上候迄も無之、紙末之通相心得候様、被仰渡被下度奉存候、以上

戌四月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

一、銀拾参匁参分参厘　　毎月御合力銀
一、勝本滞留中旅籠銀　　正銀壱匁五分ツ、
一、往還船中飯米四合五勺ツ、　　御用達書手壱人

御付紙

申出之趣相達置候、御巡検使御在留中、非常御立除之節、駆付人夫御一方様え弐拾人ツ、、総人数六拾人御手当方、紙末之通、駆付候様筋々役談仕置申候、可然御聞届置可被成下候、以上

戌四月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

人夫六拾人
内参拾人　　駕籠舁夫
内拾五人　　御作事方
内拾五人　　御郡夫

同拾人　御郡御米蔵浜三ヶ所馬方ヨリ
同弐拾人　町ニて備相立居候段、年行司ヨリ申来
但し、九人御米蔵七人、御郡浜両馬方ヨリ駆付方、御郡奉行所ヨリ相達置候段申来、御米蔵馬方は同所ニて相達置候段、申来居候事
以上

寄夫飯米

御巡検使寄夫、飯米用白米四拾九俵、御関所え渡海船有之次第、船上御差図越被成下候様、頃日御伺申上置候処、只今之様子ニては、渡海船之程も難計御心遣ニ相見申候間、右白米府内ヨリ差下候手配仕り候間、船揚ニ不及段御差図事

御船奉行所

御巡検使ニ付、御船奉行所手配方之儀ニ付、同所ヨリ被申上之書面被成御渡、披見仕、此御役所評議仕候趣、左ニ申上候

漕船三拾艘

一、御帰帆之節、壱州迄御附渡り漕船参拾艘之内、六艘御船奉行所ニて御手当相立候ニ見、残弐拾四艘之内、九艘は寛政年之通町ヨリ被差出、御郡より七艘被差出候様御達被下候ハヽ、残八艘は曲り海人船を以、御手当可仕段は、頃日御船奉行所申出之書面被成御渡候節、添書を以申上置候通ニ御座候、右之筋々御達被下、故障も御座候ハヽ、又は取紛申上方も可有御座、右之趣宜御聞通被成下、筋々御当を被付、何れ共被仰渡可被成下候

御船手人数

御付紙

先書添書ニ付札を以相達置候、御郡奉行所より役談可有之候

一、御船手人数不足ニ付、御雇四拾五人之内、拾八人は船大工を以手当相立、残弐拾七人之内、七人は府内ニ相成候儀と相見、残弐拾人雇入方之儀、斯御不繰中不容易段勿論なから、何れか人数は、不相揃候て相済間敷儀ニ付、御雇被仰付度儀と奉存候

水夫人数

御付紙

先船及差図置候

一、水夫人数之内、御郡より出夫之分、引残五拾八人之内、壱州渡弐拾壱人は、雇入相成候儀と相見候得共、残参拾七人之儀は心当無之候付、地方より雇下可被仰付哉之趣ニ相見、然処地方雇下之儀は、御巡検使ニ付ては人夫多人数被召仕候儀ニ付、直下ニ壱口ニて多人数雇下候儀は、相届兼可申は素り、第一御手支之所ニ目を付候ハヽ、高賃之申組ニ不至候ては、雇下相成間敷儀と奉存候、就夫秋目ニ相成候得は、漕船方え雇下御免被仰付候付、右御免可被仰付口々、当年限り只今ヨリ雇下御免被仰付置候ハヽ、何れも雇下候者ニは、得意をも付居可申儀ニ付、上ヨリ之御心遣無之して雇下候ハヽ、町夫之優取も付可申候儀ニ付、当年之儀

高賃

町夫

訳官御招

は御巡検使は素り、訳官御招被成候付ても、町夫ニ被召仕方多端之儀ニ付、只今より御免被仰付置候て、如何可有御座候哉、左候ハヽ、雇下可申人数当を付、其内より右人数不足之分をも、御手当相立候様申組仕度評議仕候

御付紙

吟味之上、可及差図候

惣嶋忠兵衛

一、別紙添書を以、申上ニ相成居候惣嶋忠兵衛・西崎屋武八積立之小船、雇下方之儀は、甚以御不便利之儀ニ相見、殊更御附渡漕船之儀は、前条申上候通之儀ニ付、右両口雇下方之儀は、先見合置、此上御便用之道周旋仕候様、御達被下置度奉存候

御付紙

申出之通、及差図置候

右之趣、宜御聞得被成下度奉希候、以上

戌三月　　御勘定奉行所

御駕籠舁夫

上吏御駕籠舁夫参拾人之内、拾五人御作事方ニ手召抱ニ相成候分、人数相揃候段相届申候、被召抱方之儀ハ、先例之通、与頭以下御役々御使者屋ニ罷出見分有之候様、御達被下度奉存候、以上

戌四月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

御渡物

御巡検使ニ付、御紋之御渡物之儀、先般御伺申上候内、紙末之口々御伺落ニ相成居、尤御用達之儀は、寛政年は小田番御迎送、田舎御附廻共相勤、旅行之御宛行被下候上、田舎御附廻ニ付、白米六俵御渡被下有之、岩崎右平儀は府内計相勤、白米五俵御渡被下有之、当節は御迎送を両人分て相勤候付、壱人は府内御用達相勤候、壱人は田舎御附廻り相勤候ニ付、両人共旅行之御充行、外ニ別段白米三俵御渡被下候上迄ニ候得は、府内相勤候人之御手当、寛政年同様ニも難見処も有之候得は、此節は減を付、紙末之通御渡被下、如何可在御座候哉、尚何れとも御賢慮次第奉存候、以上

戌四月　　御勘定奉行所

白米

一、白米四俵　　御用達

但し、府内相勤候人え減を付如此

一、米壱俵八升参合参参勺参才
夜具差配として、田舎え被差下候人は如此御渡被下候ニして

御付紙
可為伺之通候

御本陣成就

上吏府内御宿、御本陣成就仕候間、御届申上候、明日ニも御見分可被成候哉、奉伺之候、以上
戌四月朔日　吉村儀右衛門
藤正左衛門

田舎売物役

田舎売物役、御茶屋亭主中ヨリ何れも下役無之候付、両人程ツ、御附被下候願書之書面、町奉行所ヨリ為持来候処、此御役所ニ右両役勤筋之儀書留無之、若は御郡奉行所ニは書留無之候哉、両両役願書年行司添書ニも、御郡奉行所え差越、彼御役所心付も候ハ、、被申聞候様致役談申遣置候処、手紙ニて返事左之通

御茶屋亭主
餅

御紙面令拝見候、田舎売物役、御茶屋亭主中ヨリ手筋え差出候紙面、年行司添書共ニ被差越、売物役渡相成候、餅突之儀は、郷方ニて之手当方如何相成居候哉、及為御知候様被仰下令承知

餅
臼・杵・こしき

候、右餅突之儀ニ付、郷方え先規手当之処は、御泊り村ニて売物役并御茶屋亭主ヨリ、餅突用之臼・杵・こしき等之儀可申出候間、借渡候様ニと之儀、郷々共ニ相達有之、其余右ニ付、何等之手当も相見不申候、尤御泊り村ニて突候餅を茶屋々々え運送之儀は、其村々ニて無手支様可相成儀ニ候得共、右役々え人夫等相渡候儀等ハ、先規無之様相見不申候間、左様御承知可被下候、此段御報為可申述如此御座候、以上

尚々、御差越之書面、及御返進申候、以上

四月晦日

餅突

右之通、返書ニ候得共、運送のミニては、餅突手不相達候付、閏四月朔日御郡奉行御屋敷え差出候付、運送手を以餅突は参り、其外仕事有之候ハヽ召仕、餅突之節其村所婦女ニ至り、似合仕事申付候ハヽ、手伝之所触下ニ相成候様及御役談候処、其趣早速相達可越置段、高崎翼より藤正左衛門え被申聞候事

御渡物

人馬方組中御雇両人より、御渡物無之難渋いたし候付、本組同様御渡方被仰付被下候哉、申出書面ニ、右馬方手代ヨリ添書を以申出候書面、御支配御方ヨリ御渡被成候付、此御役所ヨリ添書を以、左之通申上ル

人馬方

改名

御座飾り

料子箱

台子

御茶道

人馬方勤、組中両人願書、且ツ人馬方手代中添書共御渡被成、披見仕候、御道具久兵衛儀は、滞米ニ当米壱斗壱升壱合壱勺壱才、此分は平等御渡被下、弐口共相渡方御米蔵え書出置、御旗傅吉と申名前、御雇之内ニも相見不申、又左衛門と申者有之、右名は上使御名前ニ相紛候儀ニ付、自然は此節傅吉ニも改名被仰付置候儀共ニは有之間敷哉、然処改名之儀、与頭方ヨリ不申来儀ニ付難相分候得共、右又左衛門改名、傅吉と相成居候得は、是又九兵衛同様ニ御渡方、御米蔵え書出置申候、右之趣宜御聞得被成下、可然御渡被下度奉存候、以上

戌閏四月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

御巡検使ニ付、府内・田舎共ニ御座飾り之儀ニ付、頃日御伺申上置候、品ニ依、府内は用意仕置、田舎料紙箱・台子等手当ニ不及段被仰渡候ニ付、其通手配仕罷在候処、此節松浦様御振を以、宝暦年之通御座飾をも仕候様被仰付、府内・田舎共ニ料紙箱・台子等も飾付候様可被仰付候哉、尤宝暦年ニは、御茶道より壱人、御附廻として田舎え被差下候儀と相見候処、寛政年ニは御止置、御茶道方ニ預候品々、御賄掛持下り相済候と相見、此節も其手配りニ罷有候処、台子等飾付方之儀は、専御茶道ニ相預り候儀ニて、手数向等相心得居候人ニ無之候間、難叶奉存候間、宝暦年之通御茶道壱人、府内・田舎共可被相増候哉、其外御茶道方預り之品々は、いつれも御賄掛持下り之積ニ御座候得共、御茶道被差下候へは、其人ヨリ差配仕候得は、猶又御都

合宜敷奉存候、素り上吏御着之上、府内之御振ニより、田舎えも被差下方、御達をも可被成下候哉、猶何れ共此段奉伺上候、宜敷御差図可被成下候、以上

閏四月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

御付紙

承届候、府内・田舎共御本陣御座飾り、先ツ宝暦年之通被仰付、御茶道三人、内壱人田舎御附廻をも被仰付候間、可被得其意候、田舎御飾用諸品持下之儀は、御茶道可被申談候

閏四月三日　　御勘定奉行所

御巡検使ニ付、田舎御宿々御座飾として、御茶道壱人被差下候段被仰出候、然処寛政年ニは不差下候て、滞米且旅籠飯米御定メ無之、此節は紙末之通、御渡可被成候哉奉伺之候、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

閏四月　　御勘定奉行所

御付紙

書面之通可被相渡候

閏四月五日

御茶道三人

御茶道壱人

一、米壱俵八升参合参勺参才　滞米之分
一、上旅籠銀壱匁五分
一、下付飯中白米七合五勺
上下旅籠付飯、御徒士之通ニして

御茶道壱人
上下弐人

木賃賄

御巡検使御賄之儀、当節は木賃賄被仰付置候付、先規之通隣国問合候処、只今迄不申越候付、紙末之通、可被仰付候哉奉伺之候、尚何れ共御賢慮次第奉存候、以上

閏四月　御勘定奉行所

魚菜代
一、銭　拾弐文　魚菜代
木賃
一、同　六文　木賃
米代
一、同　弐拾参文　米代
〆　銭　四拾壱文　掛紙ニて米直段之儀は、此節別紙を以御伺申上候直段帳通ニ相改候事

御朝夕合銭　八拾弐文　上之分

弁当

一、銭　八文　魚菜代
一、同　六文　木賃
同　弐拾参文　米代　中白米
〆　銭　参拾七文
朝夕合銭　七拾四文　御次之分

一、銭　参拾五文　御上壱人御弁当
内　六文　木銭
同　六文　菜代
同　弐拾参文　米代
一、銭　参拾弐文　次御壱人如此、同断
内　六文　御壱人　木賃
同　参文　菜代
同　弐拾参文　米代　御壱人弐合五勺ツ、
以上

御先越御作事掛
蚊帳釣手
大工
御手当

上使田舎御巡検之節、御先越御作事掛古川武左衛門被仰付置、御先格大工小頭壱人、本番手壱人召連下候儀ニ相見候得共、此節は田舎御宿々、御蚊帳釣手打釘持下為打候手配ニ相成居、其外自然繕細工等有之節、大工小頭而已ニては、御用便ニ不相成儀ニ付、大工壱人被差下方申出、如何様大工小頭計ニては差支可申儀ニ付、御先形不相見儀ニは御座候得共、此節御普請向差急出来仕居候儀ニ付、自然見落之場所可有之も難計儀ニ付、申出之通、大工壱人御先越人数え差加、可被差下候哉奉伺之候、以上

戌閏四月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

御付紙

書面之通、大工壱人差加、召仕候様可被致候

閏四月五日

口上手扣

私儀、御巡検使御用達勤ニ付、為御手当白米四俵、御渡被成下難在奉存、多少ニ不依奉畏候筈ニ御座候、然処寛政年御巡検使之節、御倹約中之儀ニ御座候処、御用達府内勤白米五俵、田舎御附廻同六俵被仰付、御手当被成下有之、殊ニ寛政年府内勤岩崎右平義は、右五俵而已ニて、

幾度小四郎

諸般手届不申趣願出、別段白米拾俵代、町用銀之内より御渡被成下候程之御座候得共、私儀、御時体柄彼是御嘆願筋可申上様無御座、先例之通と相心得奉畏罷在候処、四俵御渡ニ相成、同勤田舎御附廻は素り、都て寛政年之通御手当被仰付候由、府内勤御用達ニ限、当節より壱俵御減少ニ相成候段、御主意被為在之候て被仰付候共哉と奉存候得共、脇々之釣合も有之、此節より私ニ限、先例ニ違ひ候御手当被仰付被成下候様御座候ては、前後相勤候人之振合ニも相拘身分ニ取、如何ニも難儀千万之仕合奉存候、依之近頃、纔式之儀彼是奉願候段、恐多奉存候得とも、各別之御訳も不被為在御事ニ御座候ハヽ、何卒脇々之釣合を以、先例之通御手当被成下候ハヽ、身合ニ取千万難在可奉存候、此等之儀何分宜被仰上、願之通被仰付被下候様御執成偏奉願候、以上

閏四月三日　　幾度小四郎

御与頭中様

御附紙

願之事情、無余儀相聞候付、今壱俵相増、白米五俵之高、滞米之内より御渡被下候、此旨可被申渡候、以上

閏四月五日　　杉村右馬助
古川将監

田嶋所左衛門殿
吉村儀右衛門殿　　可被得其意候
藤正左衛門殿

久田道

道筋造替

久田道打上坂道筋不宜、通行之諸人難儀は素り、第一上御通駕ニも差支候程之難所ニ御座候処、御先代様御代ニ、大庭鉄蔵叔父清右衛門と申人、鹿戸下知相勤罷在、其節打上住居ニ御座候処、右之道筋を自分屋敷之内ニ造り替差上候と伝承仕、当時迄其道筋ニ御座候、勿論其内ニ、故春日玄角拝し屋敷加り居、去ル庚寅年五月玄角より代地被下方願出、相応之代地無之候付、右道筋ニ相成居候場所、銀参百五拾匁ニて御買上被成下候、然処此節、如何之訳哉、又以前之古道之方ニ道筋造替有之候処、右之道之儀、本道ヨリ真下之道筋ニて、出水等ニ毎度連々、元々之通岩計ニ相成、通行難相成様相成可申哉、此道ヨリ此前御買上ニ相成居候道筋宜敷相見申候得は、今度御上使ニ付、久田村迄之道造も被仰付置候儀ニ付、猶筋々御吟味、如此前之道筋通行被仰付候ハヽ、当時は素り、往々迄も御手入有之間布奉存候、猶又御手筋を以御吟味被下置、可然御出達被成下度奉存候、以上

戌閏四月　　御勘定奉行所

御座掃除

御巡検使府内御宿々、御座掃除仕揚之上、御茶道方吟味仕候処、御茶道且御弓之者・夫之者召仕候て、御座掃除仕候段、同所記録ニ有之候段相聞、然処右御掃除方之儀、年隔心得兼候儀も可有之、尚又御吟味之上、掃除仕揚候様御達被下、如何可有御座候哉奉伺之候、以上

戌四月　　御勘定奉行所

御付紙

御宿々掃除方、書面之通筋々申談候、可被相達候、以上

閏四月　　杉村右馬助
　　古川将監

田嶋所左衛門殿
吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿

御駕籠舁夫
稽古
夜賃金

上使御駕籠舁夫、参拾人之内拾五人、御作事方ニて召抱候分、田舎御巡検中は壱日壱人、銀弐拾壱匁、府内ニて稽古ニ罷出候節は、壱日銀参匁、可被成下約定を以召抱置候儀ニ御座候処、御下着御間近ニ相成、稽古仕候日間無之、依之夜稽古為仕候付、夜賃金壱夜銀壱匁五分充御渡被下度段、早田安賀之介ヨリ役談申聞候得共、寛政年ニは、当時番手ヨリ被召仕、田舎御巡検

わらじ銭

中、わらじ銭として壱日丁銭三百文ツ、被成下候て相済居候処、此節は右之通賃銀相増居候上、夜賃迄別段御渡被下候段、結構過候様相見候付、減方色々御役談申見候得共相届兼、現在苦労仕候趣ニも相聞申、御下着も弥御間近ニ相成、格別出精為仕候儀と相聞申候得は、御例外之御出方ニ相成、不安次第奉存候得共、元来御手人無之、右駕籠舁夫として被召抱候者之儀ニ付、夜々罷出難儀仕候段、無相違相聞申候得は、不容易義なから夜稽古罷出候節は、壱人銀壱匁五分充、夜賃可被成下候哉奉伺之候、以上

閏四月　　吉村義右衛門
　　藤正左衛門

夜稽古賃

御付紙

書面之通、夜稽古賃銭御渡被下候

閏四月八日

大坂注文

山駕籠

御巡検使御用、大坂注文之山駕籠被下来候付、船上之節被差出候御乗物を以、田舎御召用御備被為置候処、山御駕籠之義出来合不申候付、新古取交、権門駕籠参丁、山駕籠ニ当、調達差下、尤棒之義は角棒ニ仕替差下候儀と相聞候付、則今日船上為仕直ニ人馬方え相渡し申候、古を以山御召ニ可被差出候哉、土台権門駕籠を以、棒而已仕替差下候儀ニ付、山御駕篭と御唱被成御

備ニ相成候時、強て御差支在御座間布候哉、諸色御巡検使ニ付ては、兼て諸家様ヨリも多数御注文ニ相成居候儀ニて、職方ニも殊外混雑仕相断候付、不得已右之通取計差越候段申越、今更仕方も無之儀ニ付奉伺之候、尚何れ共御差図可被成下候、以上

戌閏四月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

御付紙

見届候、山駕篭不相達候ハヽ、不都合如何敷候得共、差掛仕替之道も無之候間、下来候権門駕篭宜相見候を手当可有之候、以上

閏四月十三日　　杉村右馬助
　　古川将監

御勘定奉行所
高崎翼殿
幾度小四郎殿
早田安賀之介殿

権門駕篭

黒門

御巡検使ニ付、黒門内宮ノ内阿須越え仮番所壱所ツヽ御取設ニ相成候御先形ニ相見、番人之儀は、黒門内番所えは番手壱人、水夫壱人、其外弐所は番手之者弐人充、相勤候儀と相見候得共、

番手心得方相達置候品書留ニ無之、心得方相達置呉候様、御作事方より申出候付、私共評議仕候趣、別紙書載奉入御披見候、猶可被成置御品も御座候ハヽ、御下知可被成下候、以上

戌閏四月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

黒門内

黒門内仮番所

其方共黒門内仮番所番人申付候間、心得方左ニ相達置候

一、御巡検使御在留中、御宿近辺往来之人、謡・辻唄等堅可相制事

振売商人

一、御宿近辺振売商人、女・童ニ至り猥ニ通行不致様可相制事

　但、御城住居破損之内、住居之人用向ニ付致通行候儀は格別之事

萬松院

一、御巡検使御附人、其外御馳走ニ付御船附旅人ニ至り、御城近辺、萬松院通行不致候様、其向ニ応し、随分慇懃ニ相断通行可差留事

一、黒門・御米蔵門・宴席門扉を鎖置、用事之時計、番人開候ニ付、番手壱人、水夫壱人相詰候事

八幡宮

八幡宮内

一、八幡宮え参詣之旅人、自然宮山え上り可申も難計候条、其向ニ応し丁寧ニ相断通行可差留候

中桁峠

阿須越

飾手桶

一、上使御通駕之節、遠掛ヨリ立見等無之様可相制候

中桁峠

一、上使御逗留中、是迄居込之旅人猥ニ府内徘徊致候ては、御締も不宜候間、通行之銘々往来ニ心を付、無用之旅人入込不申様可相心得候

一、阿須越之儀は、御屋敷御構も近候得は、第一心を付可申候事

右之通、預之詰所ニ入念、仮初ニも詰所を不外、昼夜無懈怠相勤候様可申渡候、已上

御巡検吏御着之節、波戸ヨリ御門前迄飾手桶貝木相添、凡百程飾置先格と相見、寛政年之節、夫々用意飾置候処、其儀ニ不及と之事ニて、御揚陸前ニ御門前、左右之飾手桶共引候と相見、波戸ヨリ御門前迄見合、飾候儀は全他所ニ無之儀ニ付、重ては被相止度、御門前左右之飾手桶は、其節々時宜ニ応し飾置候様留書ニ相見候、当節も夫々用意為致居候得は、飾方如何可被仰付候哉奉伺之候、以上

閏四月　　吉村儀右衛門

藤正左衛門

波戸より御門前

御付紙

御宿御門前、左右之手桶は飾置、波戸より御門前迄飾手桶被相止候、以上

杉村右馬助
古川将監

吉村儀右衛門殿
藤正左衛門殿
幾度小四郎殿

水茶屋

賃銀
餅搗

水茶屋亭主中ヨリ、願出之品ニヨリ、年行司ヨリ申上候書面披見仕候処、水茶屋壱ヶ所壱人勤ニて凌兼候付、手伝下役壱人充御増被下、賃銀・飯米代共壱日、銀参匁四分弐厘御渡被下候ハヽ、自合ニて相雇、無御用滞相勤可申と之趣ニ相見、御一行多人数之儀ニ付、壱人ニてハ凌兼可申儀ニ付、願書之通下役壱人御増可被下候哉、就夫右賃銀之儀は、町ヨリ出銀を以可相勤筋と奉存候得共、当時市中零落之儀ニ付ては、取立銀等相届申間敷候付、飯米代壱人前、銀壱匁七分七厘、従上被成下、賃銀之儀は町用銀ヨリ相償候用被仰渡、如何可有御座候哉、尤七曲り水茶屋ニて売用、餅搗入料銀拾七匁六分七厘は、従上被成下候ニして、紙末之通ニ相成申候間、何れとも被仰渡可被成下候、以上

戌閏四月

吉村儀右衛門
藤正左衛門

水茶屋

飯米代

七曲り水茶屋

一、銀参百五拾九匁壱分

水茶屋亭主手伝下役壱人雇賃銀、一日、銀参匁四分弐厘ツヽ、人数七人、日数十五日分、

貸渡ニして如是

○内百弐拾弐匁八分五厘

飯米代、壱人、銀壱匁壱分七厘、七人分、日数十五日分、上より御渡被下候ニして如是

残、銀弐百参拾六匁弐分五厘

賃銀、壱人、弐匁弐分五厘七毛、七人分、日数十五日ニして分、町用銀ヨリ相償候分、

如是

外ニ

○銀参拾五匁参分四厘

但、七曲り水茶屋ニて売用、餅搗入料、一日銀拾七匁六分七厘、両度分、上より被成下

ニして

丸印弐口

〆銀百五拾八匁壱分九厘

但、此銀高、上ヨリ御渡被下候分ニ当候事

餅五斗

尚以申上候、申出之日数、十五日分ニ付右之通相成候得共、明六日差下上使之儀、此程御用達ヨリ申来候御日積通、風順宜敷御通船、此元御着岸八日と見、九日府内御滞留、十日田舎御発駕ニ相成候得は、御定式御巡検使之積合ニ仕候得は、十七日ニは御上府ニ相成候積合ニ付、〆日数十二日と相成、然ル上水茶屋亭主之儀、かるさ口・上ノ原相勤候人は、十三日切ニて勤前相済候事故、十五六日迄ニは上府可仕候得は、日数十日、又は十一日ニて勤終ニ候儀ニ付、過上仕候分は、上納可仕段勿論ニ御座候得共、其段厳重ニ相心得置候様、年行司ヨリ相達置候様御達被下置度奉存候、以上

七曲水茶屋売用、餅五斗搗雑用、一度ニ九銭拾壱匁七合五厘

薪半疋　代九銭三匁七分五厘

夫四人　賃銀九銭八匁

右之通、七曲り壱度分之積、御覧ニ添申候、尤餅五斗突之人夫、四人ニては不足ニ御座候得共、他之茶屋与違地ニ付候場所ニ御座候得は、右丈ニて出来立候様可仕候、以上

閏四月　　七曲り茶屋亭主

陶山庄作

田舎売物役

諸色直段

味噌

大豆

田舎売物役ニも、下代壱人ツヽ、御付被下、雇賃銀一日壱人銀参匁ツヽ、此分は上ヨリ御渡被下候段、此御役所評議ニて相極相渡候事

但、是迄は下代壱人御付被下候へ共、此節は下代少人数差支候ニ付、右之通取計候事

売物方諸色直段之内、味噌之儀、壱升ニ付、銀弐匁二分弐厘と御伺申上、其通被仰付置候処、大豆直段ニ少々不引合ニ相見、他方様ヨリ之直段書、被差出置候帳面御渡被成候付、御宿亭主引合見候処、味噌直段高直ニ相見、他方様と不釣合之段申出候付、尚又算当仕見候処、紙末之通被仰付候ハヽ、御定之大豆直段ニ引合候様相見申候、此段宜御聞通可被成下候、以上

閏四月　　吉村儀右衛門

藤正左衛門

一、味噌壱貫匁

代、丁銭弐百七拾文

以上

右之通、廿二日中村太玄宅ニて申上候処、御聞届被成候付、其通相改候様、佐藤恒右衛門より藤正左衛門へ通達致ス

夜入

台挑灯

御巡検使御上府御問近ニ相成、就夫兼て申上置候通、御上府之節、自然夜入ニ相成候得は、研石渕此節土橋御改ニ相成居候、橋際ニ篝弐挺、夫より下モ手、研石渕通ヨリ御旅宿迄間配、台挑灯相燈候儀と相見、挑灯・篝共兼て用意仕置候様被仰渡置候付、何れも用意御備相立居申候、此節自然夜ニ入候ハ、、相燈候様可被仰付候哉、何れとも御下知可被成下候、延享・宝暦・寛政年共、何れも昼之内御上府ニ相成居、御迎挑灯等差出有之儀見出不申、御行列用は、人馬方用意持越候分ニて相済可申哉、其外共御吟味之上、何れ共御差図被成下候様奉希候、以上

戌閏四月廿九日　　吉村儀右衛門

藤正左衛門

御付紙

見届候、御巡検使夜ニ入御着ニ相成候ハ、、伺出之通、土橋際ニ篝弐挺、台挑灯之儀は、御屋敷構通り御馬見所通、一ノ御門下迄拾七張之内、一ノ御門下ニは四張、差出候様可被取計候、馬場先橋左右ニ弐張、小学橋左右ニ弐張、宮谷橋左右ニ弐張、宮前左右ニ四張、江尻橋北左右弐張、差出候様可被取計候

御出帆

五月二日

御出帆之節、頭漕乗組、且ツ漕船拾弐艘は壱州より雇下ニ相成居候処、病人等有之、十二人増

御船奉行所

人之儀申出候得共、俄ニ雇入難相成候付、総中え丁銭弐百匁被成下、相償相勤候様御船奉行所ヨリ相達方御伺申上候処、其通取計候得与之御事を、右馬助殿ヨリ藤正左衛門え被仰渡、尤右之趣、御船奉行所へ申遣候処、小頭和吉を以諭達ニ相成、相償可申段相受持候趣、御船奉行所ヨリ申来候事

漕船参拾艘

御巡検使送小隼は、素り漕船参拾艘之内、拾弐艘は壱州より御雇下ニ相成候付、壱州御着船之上は、直ニ御暇被成下候様取計可申候処、其余は何れも、爰元ヨリ被召仕候儀ニ付、乗組多人数之儀ニて、風勢ニ依、自然壱州ニて滞船ニ相成候時、飯米日数十五日分程貸渡在之居、今日迄は御出帆ニ不相成儀ニ付ては、右十五日之内日切ニも相成候付、此上御不順ニて爰元御滞留ニ相見候ハヽ、貸次キ候儀は勿論ニ御座候得共、右御船々多数之儀ニ付、為用心金、別段金拾両御用達ニ預ニ取計置申候間、可然御聞届置可被成下候、以上

壱州

戌五月四日　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

用心金

人馬方

人馬方之儀、御使屋ニて取用仕候様、被仰渡置候儀と相聞、引移方申来、就夫御使者屋之儀は、此節御普請向一旦出来居候事故、右之侭御囲被置候ハヽ、無程訳官御招ニも相成候節、御手入無之して可相済儀ニ候処、人馬方引移相成候ハヽ、小者も入込儀ニ付、戸襖張壁等損可申も難

浜御番所

計候得は、此節人馬方取調之儀は、浜御番所ニて取調被仰付、如何可在御座候哉、尤万一府内欠乗等御座候節は、一両日之儀ニ付、其節は休日被仰付候時、取調方左程相延候儀も有之間敷、斯ル御不繰中故、訳官ニ付御修理方は御手入無之して相済度、此段奉伺之候、尚何れ共御賢慮次第被仰渡可被下候、以上

戌五月　　御勘定奉行所

訳官

御付紙

見届、訳官見来候事故、損等有之候ては不相済儀故、人馬方浜御番所出張ニ被仰付候、諸事申談、御費無之様第一ニ可被心得候、以上

五月十一日　　杉村右馬助
古川将監

御勘定奉行所
早田安賀之介殿

四人縄下
不埒之者

御巡検使御廻村中、大山村ニて拾参人、佐賀村ニて壱人、都合拾四人縄下ニ取計候付、拾四筋之縄代、相渡方被仰渡奉得其意候、諸組中ヨリ不埒之者等召捕候節、縄代として九六銭壱貫文ツ、、御渡被下候例も有之候処、縄代其節々切ニ相捨候儀ニも有之間敷、右等之者縄掛候都

度々々、御渡不被下候ても相済可申儀共哉と奉存候、既ニ打廻御番所候時、召捕候者在之節々、
払切ニ相成候儀ニても無之、右之釣合も御座候事故、都度々々縄代御渡被下候儀は、斯ル御倹
約中ニ付ては、此節ヨリ御止被成、如何可在御座候哉、尤是迄御渡ニ相成居候儀も御座候得は、
当節迄は御渡被下、以来は御渡不被下候段可被仰付候哉、御賢慮之上、御差図被下度奉存候、
以上

戌六月　　御勘定奉行所

縄代

御付紙

見届候、拾四筋縄代可被相渡候、以来之儀追て及差図候迄は、是迄之通可被相心得置候

七月

料理人
配膳下代

御巡検使ニ付、府内御宿々料理人、配膳下代之者共、御着岸前広ヨリ御旅宿ニ罷出候由ニて賃
銀御渡方申出、然処寛政年、賃銀御渡被下置候は、下代は追通し四人ツ、罷出、配膳之者ニは、
御着前広且ツ田舎御廻検中は弐人ツ、罷出、御着之日より田舎御下之日迄は、六人ツ、総出、
料理人は御着之日ヨリ田舎御下之日迄罷出、御留守中は不罷出、又御上府前日より御出帆迄罷
出候儀と相見、賃銀相渡有之儀ニ付、御先規不相控様取計置度、御宿亭主中え其後諭達仕候処、
御先規有之儀ニ付、諸取調方ニ至り右之人数罷有申候得は、総出ニ不相成時、取集も相成儀ニ

賃銀

付、其通ニして御渡方申出、然処此節は、御下向方俄ニ相成、相進候儀ニて、初発取掛之時分は殊外混雑候儀ニ付、其段は少々斟酌仕、払方申達候得共、夫共御一方ニ付、右賃銀之差イ銀百四拾四匁減縮ニ相成申候、然処同抔之者共、右之通日々相詰候段無相違相申候得は、右差イ銀之分全御渡不被下候ては、難儀可仕儀ニ付、一ヶ所ニては、右之通銀百四拾四匁、三ヶ所ニて銀四百参拾弐匁差イと相成候内、半減ニして御渡被下、三ヶ所ニて銀弐百拾六匁は、此節御下着火急ニ相成候処、一統一和出精仕候故、御間筈能御同意相備候儀ニ付、右精勤仕候と申を以、為御褒美右弐百拾六匁御内々より被成下、如何可在御座候哉、尚何れ共御賢慮次第奉存候、

以上

戌七月　　吉村儀右衛門
　　藤正左衛門

府内売物方

尚以申上候、府内売物方下代弐人、升取弐人都合四人ツヽ、御巡検使御出帆迄は総出仕、御出帆翌日より、御算用差立候迄は、下代壱人、升取壱人、都合弐人分賃銀被成下来候処、此節は、先例不相心得御算用済迄、日々四人ツヽ罷出候儀と相聞候得共、先例在之儀ニ付、下代・升取共壱人充之賃銀相渡置候得共、現ニは右之通毎日四人ツヽ罷出、御出帆は五月六日ニ付、翌七日ヨリ御算用差立候日は、六月四日ニ付、其間之日数廿七日、右弐人分賃銀一日壱人銀壱匁五分充、〆銀八拾壱匁之内、半減ニして四拾匁五分被成下、如何可有御座候哉、斯御至険中御出

賃銀

日稼

方へ助之儀は、甚以不容易儀なから、日稼之者共数日之間、無賃銀ニて罷出たる段、難儀可仕儀ニ付、此段奉伺之候、以上

御付紙

書面之趣、端書共見届候、両条申出之通、御内々為褒美可被相与候

戌七月廿四日

佐須奈村
御昼休御本陣
障子

上使田舎御巡検之節、佐須奈村御昼休御本陣之内、武田喜兵衛宅再見分之節、障子古損見苦敷、難御用立候付、久須村給人久須左近持合之障子六枚、可御用立段申出候付、則御借上取計候処、右障子其侭間ニ合不申候付、切短メ喜兵衛宅え建合、御用相済申候、就夫右障子之儀は御用済之上、御返下可被下候処、右之通喜兵衛方ニも建合家御用立候儀ニ付、右障子之分は、喜兵衛え被成下、左近えは新規出来御返下被下度奉存候付、新規出来之入料、御作事方ニて為積立見候処、紙末之通申出候間、左近え御返下可被下候ハ、、板木、大工手間共積前之通、代銀渡ニ被仰付如何可在御座候哉、奉伺之候、尚何れ共御差図可被成下候、以上

大工手間

戌九月　　御勘定奉行所

板木・大工

一、椴原杉　三枚
一、柵八分板　四枚
一、同、五分板　壱枚
一、杉、五分板　参枚
一、大工弐拾弐人
右品々、大工手間共銀六拾八匁五分御渡被下候ニして
以上

〈頭注〉付紙
伺出之通、板木・大工手間ともに代銀可被相渡候、以上
九月　杉村右馬助
古川将監
御勘定奉行所
御郡奉行所
得其意、喜兵衛・左近へハ可被達候

（二冊の『巡検上使記録　御勘定奉行所』のうち、一冊目終り）